茨城県行方郡北浦村

古　館　遺　跡
調査報告書

1990年3月

山田地区遺跡発掘調査会

例　　言

1．本報告書は、茨城県行方郡北浦村大字山田字古館2022他に所在する古館遺跡の、調査報告書である。

1．本遺跡の調査は、ゴルフ場造成工事に先行する埋蔵文化財の調査である。

1．本遺跡の現地調査は、昭和63年８月20日～同年10月23日まで行い、 整理作業は平成元年２月末～同年６月末まで行なった。

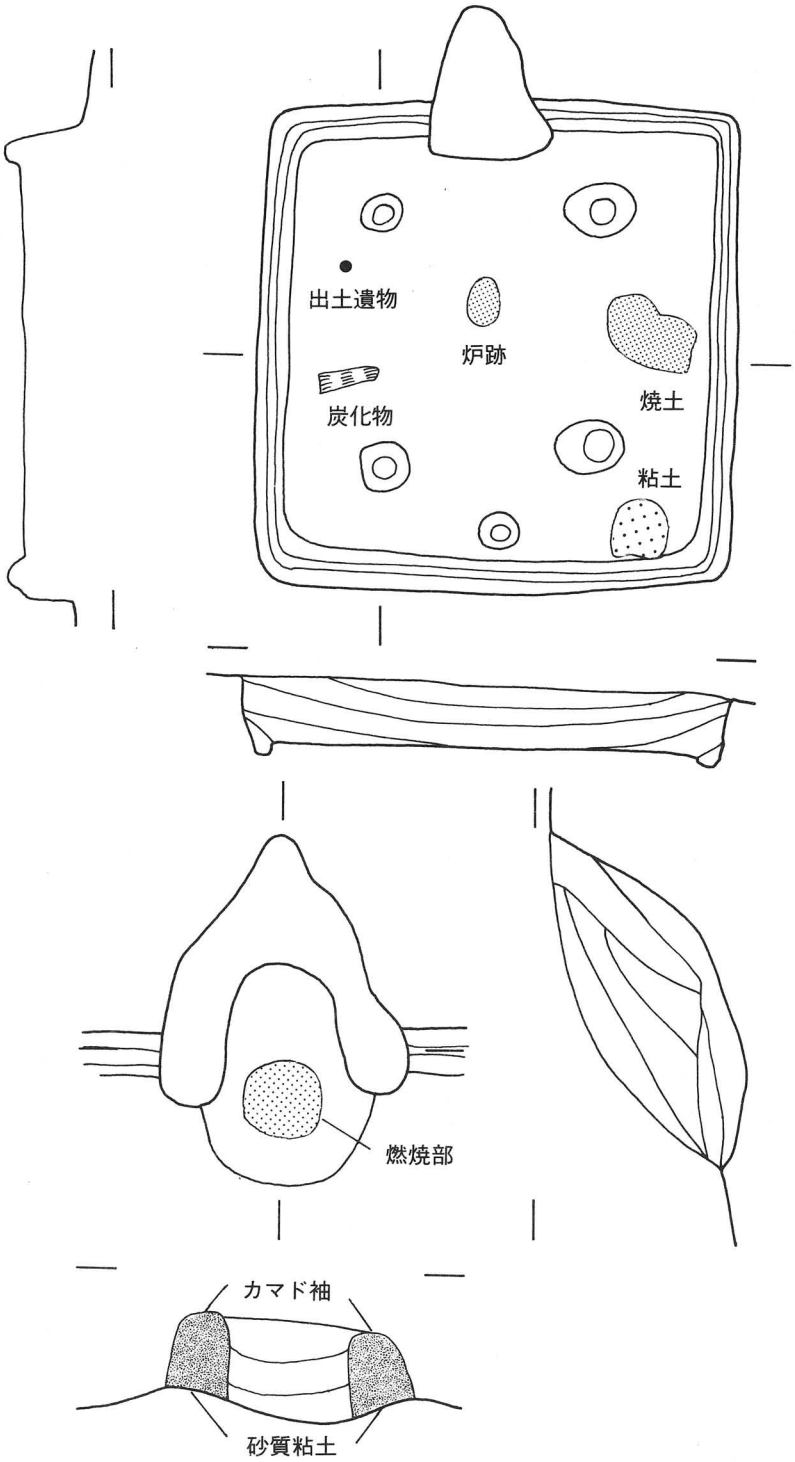
1．本遺跡の現地調査及び整理作業は、山田地区遺跡調査会を組織し、調査は藤原　均（日本考古学協会員、日本考古学研究所）、石井明憲（日本考古学研究所）が行ない、藤原が担当した。整理作業等は、石井が主体的に行なった。組織は、別項で記す。

1．本報告書の縮尺は、遺構に関しては、1／20、1／40、1／80、1／100を基準とした。遺物は、1／2、1／3、1／4が基準である。水糸レベルは、Ｌ＝で統一表示を基準としたが、不可能な場合はその図中に表示した。法量はＡ口径、Ｂ器高、Ｃ底径、Ｄ高台高、Ｅ高台径、Ｆつまみ高、Ｇつまみ径である。

1．本報告書で使用したスクリーントンは、焼土、カマドの袖、人為埋土、盛土であり、各図に表示した。また、模式図を参照されたい。

1．本報告書で、１班、２班が協議の上統一表示出来るものは統一表示した。

1．本報告書の執筆は、藤原、石井が分担したが、石器に関しては実測及び原稿等を道沢　明氏（日本考古学研究所）の協力を得た。執筆は、Ⅰ～Ⅲが藤原、ⅣとⅤが石井、Ⅳ－３－６が道沢である。


出土遺物
炉跡
焼土
炭化物
粘土
燃焼部
カマド袖
砂質粘土

目　　次

例　　言
目　　次
挿図目次
挿表目次
図版目次
Ⅰ．位置と環境……1
Ⅱ．調査経過……1
Ⅲ．遺跡の概要……4
1．古館遺跡の概要……4
2．調査結果の概要……6
Ⅳ．遺構と遺物……7
1．中世の遺構と遺物……7
1）掘立柱建物址……7
2）虎　　口……13
3）堀、西側斜面……19
4）土　　塁……19
5）出土遺物……20
6）土　　壙……23
2．中世以前の遺構と遺物……27
1）住居址……27
2）土　　壙……57
3．その他の遺構と遺物……60
1）炉　　址……60
2）Pit群……62
3）溝　　……63
4）道路状遺構……63
5）覆土内出土遺物……63
6）先土器時代の遺物……70
Ⅴ．総　　括……72

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　遺跡付近地形図…… 3
第３図　古館概念図…… 5
第４図　遺構全測図（付図１）
第５図　第１号掘立柱建物址実測図…… 8
第６図　第２号掘立柱建物址実測図…… 8
第７図　第３号掘立柱建物址実測図……10
第８図　第４号掘立柱建物址実測図……11
第９図　第５号掘立柱建物址実測図……12
第10図　第６号掘立柱建物址実測図……13
第11図　東側虎口部実測図……14
第12図　堀実測図（付図２）
第13図　堀及土塁土層図１……15～16
第14図　堀及土塁土層図２……17～18
第15図　城址関係出土遺物実測図……20
第16図　東側堀出土五輪塔実測図……22
第17図　土壙（粘土貼り）実測図１……24
第18図　土壙実測図２……26
第19図　第５号土壙出土遺物実測図……27
第20図　第１号住居址実測図……28
第21図　第１号住居址出土遺物実測図……28
第22図　第２号住居址実測図……30
第23図　第２号住居址出土遺物実測図……30
第24図　第３号住居址実測図……32
第25図　第４号住居址実測図……33
第26図　第４号住居址出土遺物実測図……34
第27図　第５号住居址実測図……36
第28図　第５号住居址カマド実測図……37
第29図　第５号住居址出土遺物実測図……37
第30図　第６号住居址実測図……40
第31図　第６号住居址出土遺物実測図……40
第32図　第７号住居址実測図……41
第33図　第８号住居址実測図……43
第34図　第８号住居址カマド実測図……44
第35図　第８号住居址出土遺物実測図……44
第36図　第９号住居址実測図……46
第37図　第９号住居址出土遺物実測図……47
第38図　第10号住居址実測図……48
第39図　第10号住居址出土遺物実測図……48
第40図　第11号住居址実測図……50
第41図　第11号住居址カマド実測図……51
第42図　第12号住居址実測図……52
第43図　第12号住居址出土遺物実測図……53
第44図　第13号住居址実測図……54
第45図　第13号住居址カマド実測図……55
第46図　第13号住居址出土遺物実測図……55
第47図　第14号住居址実測図……57
第48図　第15号住居址実測図……58
第49図　土壙実測図３……59
第50図　第６号土壙出土遺物実測図……60
第51図　炉址実測図……61
第52図　Ｐ１実測図……62
第53図　覆土内出土遺物実測図……64
第54図　第１号溝実測図……65～66
第55図　道路状遺構実測図……67～68
第56図　先土器時代石器実測図……71

挿　表　目　次

第１表　城址関係出土遺物一覧表……20
第２表　第５号土壙出土遺物一覧表……27
第３表　第１号住居址出土遺物一覧表……28
第４表　第２号住居址出土遺物一覧表……31
第５表　第３号住居址出土遺物一覧表……32
第６表　第４号住居址出土遺物一覧表１…34
第７表　第４号住居址出土遺物一覧表２…35
第８表　第５号住居址出土遺物一覧表……38
第９表　第６号住居址出土遺物一覧表……40
第10表　第７号住居址出土遺物一覧表……42
第11表　第８号住居址出土遺物一覧表……44
第12表　第９号住居址出土遺物一覧表……47
第13表　第10号住居址出土遺物一覧表……49
第14表　第11号住居址出土遺物一覧表……51
第15表　第12号住居址出土遺物一覧表……53
第16表　第13号住居址出土遺物一覧表……55
第17表　第15号住居址出土遺物一覧表……58
第18表　第６号土壙出土遺物一覧表……60
第19表　覆土内出土遺物一覧表……69

図　版　目　次

図版 1　遺構全景
図版 2　遺跡近景……（調査前）
図版 3　遺跡近景……（　〃　）
図版 4　遺構全景……（近　景）
図版 5　中世遺構 1 ……（建物址・虎口）
図版 6　中世遺構 2 ……（土塁・西側斜面）
図版 7　中世遺構 3 ……（堀土層）
図版 8　中世遺構 4 ……（堀）
図版 9　中世遺構 5 ……（粘土貼り土壙）
図版10　中世以前の遺構 1 ……（住居址）
図版11　中世以前の遺構 2 ……（住居址）
図版12　中世以前の遺構 3 ……（住居址）
図版13　中世以前の遺構 4 ……（住居址）
図版14　その他の遺構・遺物
図版15　出土遺物 1 ……（中　世）
図版16　出土遺物 2 ……（住居址内）
図版17　出土遺物 3 ……（住居址内）
図版18　出土遺物 4 ……（住居址内）
図版19　出土遺物 5 ……（土　　壙）
図版20　出土遺物 6 ……（縄文、先土器時代）

Ⅰ．位置と環境

当古館遺跡は、北浦村の南東部で北浦へ向い細長く突出した舌状台地の先端部に位置している。当遺跡が所在する北浦村は、茨城県の南部で行方台地の中央部で北浦に面している。行方台地は、広く深い開折谷が台地内部まで樹枝状に入り込み、複雑な地形を形成している。内陸部では、比較的広い台地となっているが、開折谷によって形成された台地は、細長く伸びた舌状台地となっている。

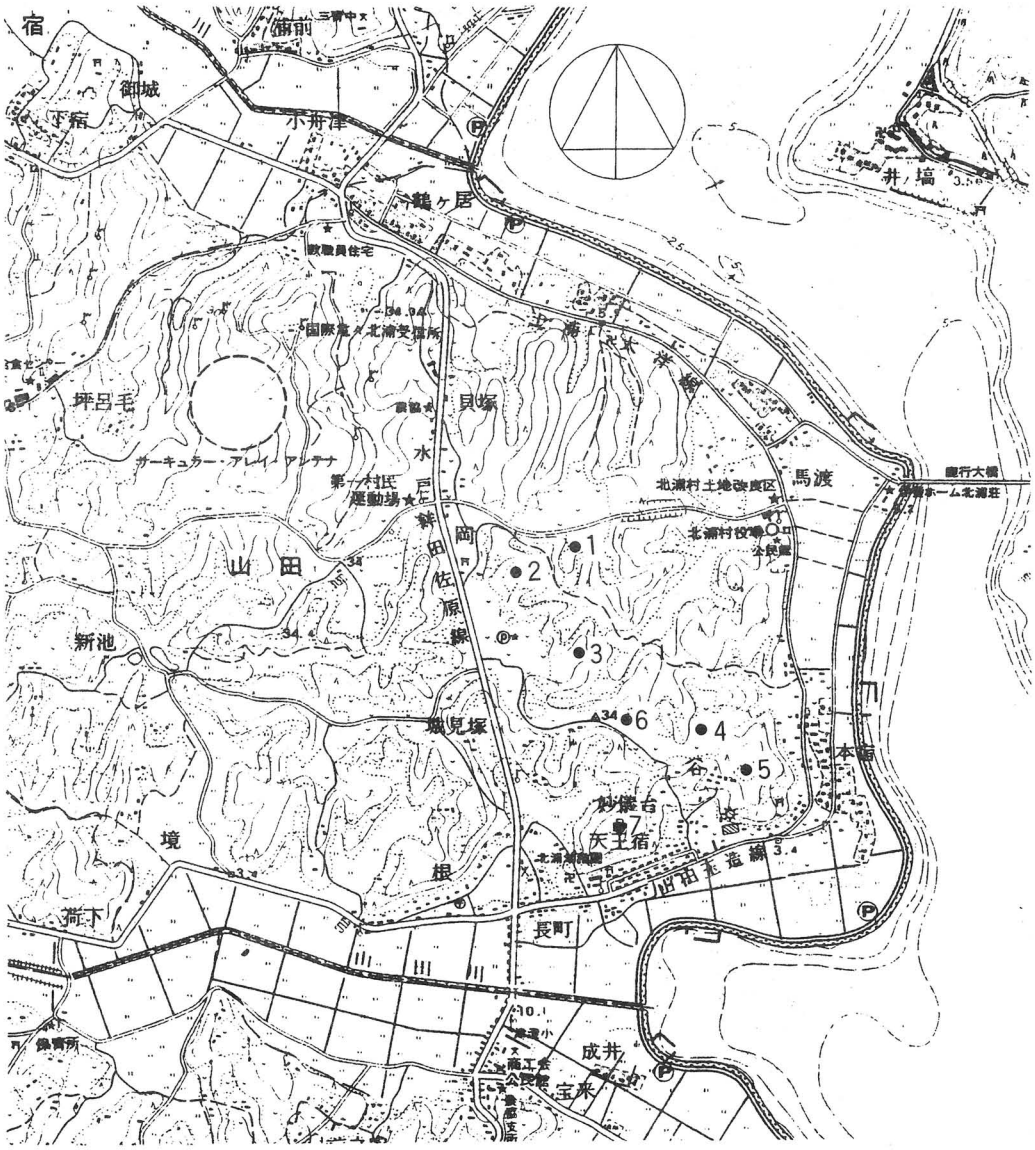
当遺跡は、このような台地から北東に向け細長く伸びた台地の先端部に位置し、当遺跡が位置する台地も北方、北東方向、南西方向に枝分れしている。また、東側の台地とは、馬背状の台地で接続している。

当遺跡の周囲には、西方の広い台地上に古墳時代末～中近世までの平遺跡（第１図４）が隣接し、同遺跡の南西方向には山田城址（第１図７）があり、当遺跡と山田城址との中間付近にも中世城館址（第１図６）が位置している。また、六台遺跡（第１図３）の北西方向には、深く広い開折谷を挟んで今山遺跡（第１図１）と古屋敷遺跡（第１図２）が位置している。

Ⅱ．調査経過

当遺跡の調査は、一時古屋敷遺跡及び平遺跡と併行する状況で調査を行った。調査は、地形測量、確認トレンチの設定と調査、表土の除去と本調査の順で開始した。地形測量等は、古屋敷遺跡の調査と併行して昭和63年７月下旬に行ない、トレンチ調査による遺跡確認作業は、地形測量と同様併行しながら昭和63年８月上旬～中旬にかけて行なった。

当遺跡の本調査は、昭和63年８月下旬より開始した。表土除去作業と、トレンチ内土層実測等を併行させながら行ない。８月末日に終了した。この後、遺構確認作業を行ない掘立柱建物址、土壙、溝、堀、などを確認して９月上旬で終了した。遺構調査は、北側の土塁と堀間に遺構が無く、排土の関係上この部分より調査を開始した。この調査が終了した後、掘立柱建物址、住居址土壙、溝などが所在する平坦部の調査を行ない、９月末日に終了した。また、西側堀と西側斜面及び東側斜面部の調査を併行して行ない、10月上旬に終了した。西側堀と斜面、そして東側斜面部の実測等は、10月下旬で終了した。この結果、６棟の掘立柱建物址、３基の粘土貼り土壙、３基の土壙、虎口１ヶ所、溝１条、などの遺構と、多数の構作 pit 等が確認された。また、10月中旬からは、平遺跡の調査と併行しながら調査を行なった。10月下旬に、全部作業が終了した。



0　　1,500
m

1）今山遺跡　　3）六台遺跡　　5）古館遺跡　　7）山田城址
2）古屋敷遺跡　　4）平遺跡　　6）中ノ館

第１図　遺跡位置図

ZZ321-2-1
(29.511)
ZZ321-2-2
(20.511)
ZZ28-8
ZZ321-2
(31.650)
ZZ321-1
(30.920)
T-4
(31.274)
T-3-2
(30.681)
SBM1 H=TP+33.186
ZZ28-7
T-3
(30.549)
T-1
(34.515)
T-2-4
(35.201)
T-2-1
(31.761)
T-3-1
(19.351)
T-2
(35.346)
T-5
(32.117)
T-2-1
(32.677)
T-2-5
(35.550)
T-2-3
(29.371)
T-2-2
(29.05)
T-5-1
(31.479)
T-5-2
(30.510)
0
50
m

第２図　遺跡付近地形図

Ⅲ.　遺跡の概要

1．古館遺跡の概要　（第３図、 図版２・３）

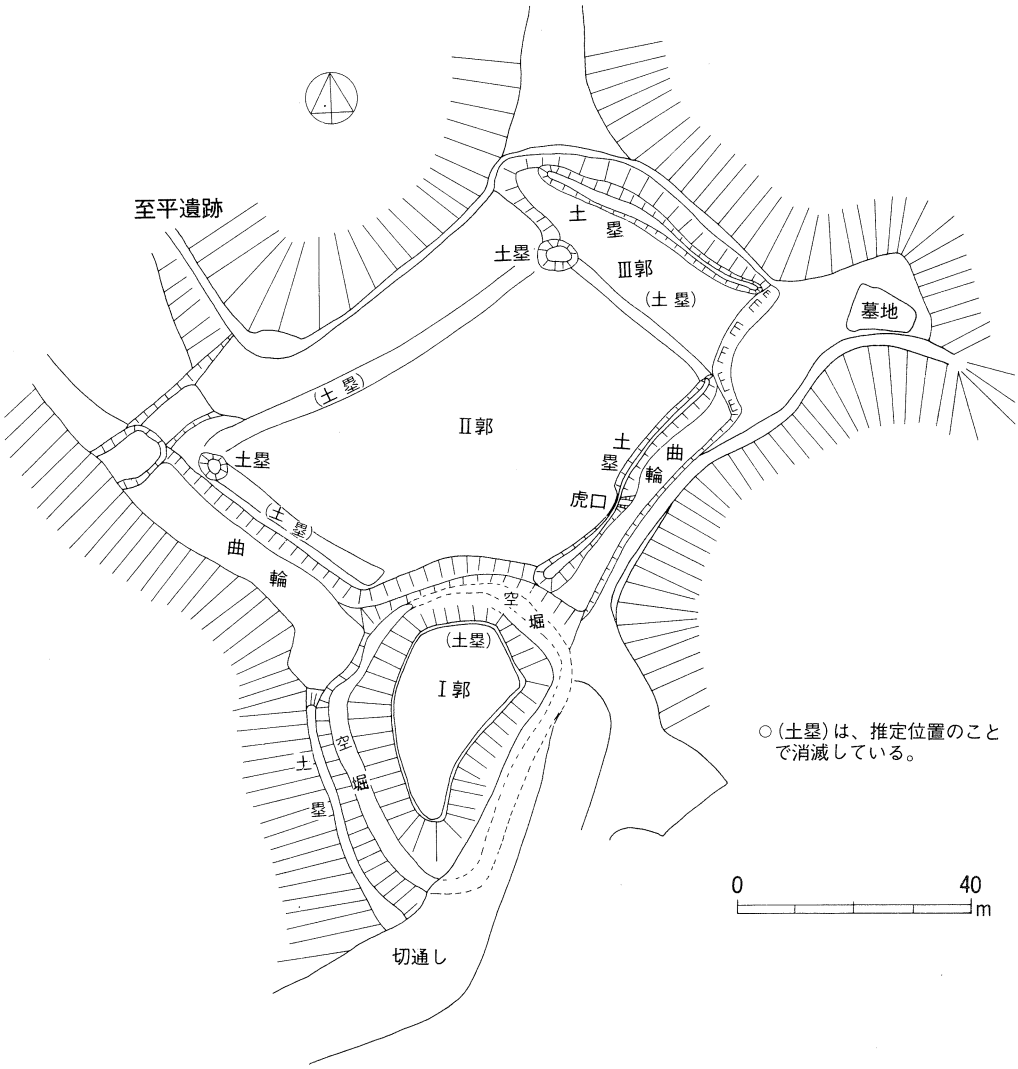
当遺跡の概要としては、調査開始前と調査結果とに分けて述べねばならない。これは、調査開始前と調査終了時とは異なった結果が得られた為である。当遺跡は、その名称が示すように中世の城館址である。

当遺跡は、前項で述べたように北浦へ向い細長く伸た舌状台地の先端部に位置している。さらに、この先端部は北東、北、南西、の方向に枝分れするように台地が伸び、この分岐点と、南西部の台地が城域であり、南西部の台地は分岐点より１ｍ程度高くなっている。中世城館址としての範囲は、南西台地と分岐点の平坦部及びこの台地である。城館址の占地から、南西台地がⅠ郭で本丸に相当する郭であり、分岐点の台地がⅡ、Ⅲ郭でⅡノ丸、Ⅲノ丸に相当する所である。
現在遺構としては、Ⅰ郭は台地辺縁部に土塁と堀状の遺構が残っており、台地下でⅠ郭とⅡ郭の境に空堀が台地に沿って掘り込まれている。空堀は、南側で外側に土塁を供なっている。

Ⅱ郭は、中央部が平坦面となっているものの西側は緩斜面となっている。この平坦部と斜面との境付近に、土塁の痕跡と判断される部分が２ヶ所遺存している。また、北側と東側には土塁が現存している。北側土塁は、台地辺縁部に沿いしっかりした状態で遺存しているが、東側の土塁は低くその痕跡を示す程度である。南側では、土塁の痕跡と判断される部分が南西部に１ヶ所遺存するのみである。Ⅱ郭の東側と南側には、Ⅱ郭より３ｍ程度低くなった平坦面が現存しており、Ⅰ郭台地下の空堀と接していることから、曲輪と判断される部分である。なお、東側斜面に１段～２段のテラスが認められるものの中世城郭に関連する部分かは断定できない。

虎口としては、Ⅱ郭東側に一部土塁がⅡ郭東側曲輪へ崩れ土橋状になっている部分が認められる。この部分が、虎口と推定可能な部分である以外には、虎口らしき部分はⅠ郭、Ⅱ郭には認められず、西側の馬背状に細長く伸る台地部分にも、虎口らしき部分は認められないが、一般的いう大手虎口の位置としては、この細長く伸た台地の先端で平遺跡が立地する広い台地との境付近が推定される。

このように、当古館遺跡はⅠ郭～Ⅱ郭を中心としてこの東側と南側に曲輪を配置した小規模で防護を中心とした中世城郭であるが、土塁の残存状況から造改築された可能性を有している。また、北側と北東部に伸た台地部分に中世城郭の遺構が認められない点は、当古館遺跡が中世城郭としての性格を示す点といえよう。


至平遺跡
土墨
土墨
Ⅲ郭
(土墨)
墓地
(土墨)
Ⅱ郭
土墨
土墨
曲輪
虎口
(土墨)
曲輪
空堀
(土墨)
Ⅰ郭
土墨
空堀
切通し
○(土墨)は、推定位置のことで消滅している。
0
40
m

第3図　古館概念図

2．調査結果の概要　（第１図＝付図１、図版１・４）

当遺跡を調査した結果、中世城館址の遺構と、古墳時代から奈良時代にかけての遺構、近世以降の遺構、などの諸遺構が確認された。

中世城館址の遺構としては、堀、掘立柱建物址６棟、粘土貼り土壙３基、土壙２基、虎口１ヶ所が確認されている。これらの諸遺構と、Ⅱ郭の北西部と南西部に残る土塁状の部分と、東側の土塁とⅢ郭北側土塁、そしてⅠ郭とこの斜面下の空堀、Ⅱ郭の東側と南側の曲輪が、中世城館址の遺構である。

堀は、Ⅱ郭北西部と南西部に残る土塁状遺構の北側と西側に掘り込まれている。この事から、土塁状の部分は土塁残存部と断定される。また、この堀は北西部土塁残存部の所から東へ湾曲しながら折れ曲り、Ⅱ郭北東部で南へ折れ曲りⅠ郭斜面下の空堀に接続するものと判断される。Ⅱ郭西側では、北西部土塁残存部より直線的に掘り込まれ、南西部土塁残存部西側の低地に至るものと判断される。（１号堀）また、北西部では堀１と接して西側谷地部まで直線的に掘り込まれている堀がある。（２号堀）堀の調査から、Ⅱ郭東側曲輪は堀を伴った曲輪と判断され、Ⅱ郭南側の曲輪も東側曲輪と同様の状況を有する部分と推定される。堀１は、長期間使用された後で埋められている。この結果、当城館址は造改修された事が判明した。

掘立柱建物址は、Ⅱ郭の東側に４棟、中央部に１棟、南西部に１棟、各々配置されている。これらの建物址は、北東～南西向きで地形に合った方向で建っているのが多く、地形と直行するように建っているのは１棟のみである。建物としては、長方形で長屋風の建物址と推定されるものが多く、東側に集中している。

土壙としては、粘土貼り土壙３基、土壙２が確認されている。３基の粘土貼り土壙は、Ⅱ郭の南西部に集中した状況で確認された。他の土壙は、北西部、東側中央部などにそれぞれ位置している。 虎口は、Ⅱ郭東側中央部のやや南寄りに位置しており、四脚門を供なっている。通路部分は、良く踏み固められている。

古墳時代以降の遺構としては、15軒の竪穴住居址が確認されている。住居址は、Ⅱ郭の東側、北側、西側で、台地の辺縁部で確認され、中央部や南側では確認されなかった。これは、時期的変遷を示しているが、城館址のため破壊された住居址がほとんどである。

出土遺物としては、城館址関係では天目茶碗、摺鉢、土師質土器（素焼碗）、五輪塔などで、きわめて少量である。住居址関係では、土師器杯、高杯、坩、須恵器杯、などが検出されている。

なお、近世以降の遺構としては、道路状の遺構、溝とが入るが、具体的な時期等を知ることは出来なかった。また、溝に付属するように掘り込まれている土壙状の遺構は、耕作土壙である。

以上、当遺跡の調査結果に関し略述した。　（藤　原）

Ⅳ. 遺構と遺物

1. 中世の遺物と遺構

1) 掘立柱建物址

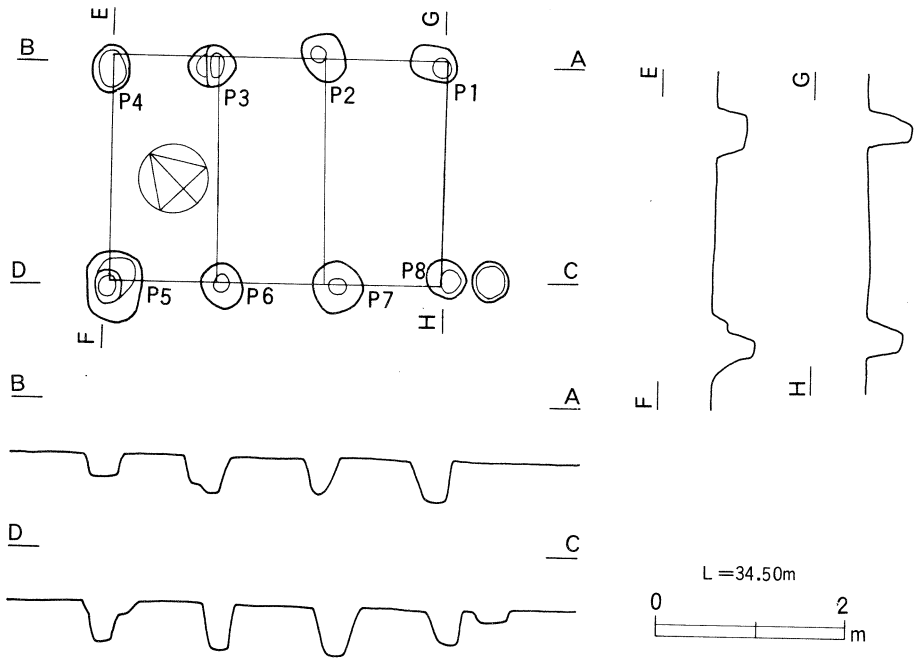
第１号掘立柱建物址　（第５図、図版５）

本址は、調査区のほぼ中央で第２号掘立柱建物址の北側に位置している。大きさは、桁行３間（3.60m）×梁行１間（2.36m）で長方形をなす建物址である。主軸は、N－46°－Wに有している。桁行の柱間は、Ｐ１～Ｐ２間が1.29m（4.3尺）、中央1.17m（3.9尺）、Ｐ３～Ｐ４間が1.14m（3.8尺）で東側が他に比べてやや柱間が広くなっているが、北面と南面は対応している。梁行は、2.36m（約7.9尺）と桁行のほぼ倍の間隔である。こうすると、本址は桁行は４尺を意識し、梁行は、８尺を意識していると考えられる。柱穴は、８本で、円形もしくは楕円形を呈す。Ｐ１－50×36cmの楕円形で深さ44cm、Ｐ２－42×40cmの円形で深さ36cm、Ｐ３－54×54cmの円形で深さ52cm、Ｐ４－44×48cmの円形で深さ50cm、Ｐ５－56×72cmの楕円形で深さ44cm、Ｐ６－39×50cmの楕円形で深さ25cm、Ｐ７－31×44cmの楕円形で深さ40cm、Ｐ８－46×50cmの楕円形で深さ38cmを、それぞれ計測する。

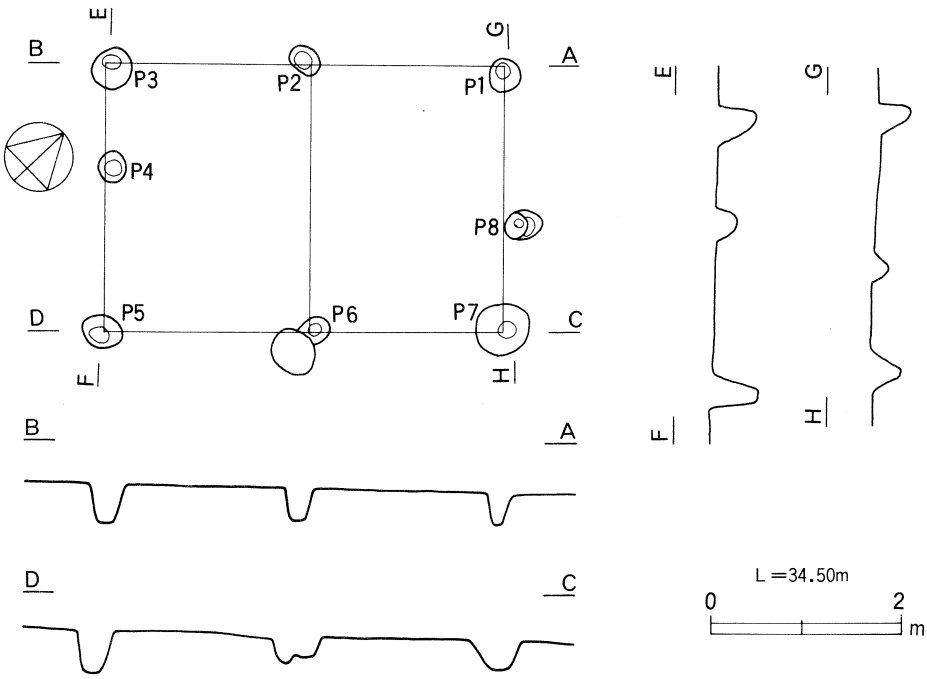
本址に伴う遺物の出土は無かった。

第２号掘立柱建物址　（第６図、図版５）

本址は、第１号掘立柱建物址と虎口との間に位置し、第３号掘立柱建物址と重複している。大きさは、桁行２間（4.20m）×梁行２間（2.80m）で長方形をなす建物址である。主軸は、N－4°－Eに有している。桁行の柱間は、Ｐ１～Ｐ２間が2.04m（6.8尺）、Ｐ２～Ｐ３間が2.16m（7.2尺）でほぼ均等である。梁行の柱間は、Ｐ１～Ｐ８間が1.64m（5.4尺）、Ｐ８～Ｐ７間が1.16m（約４尺）、Ｐ３～Ｐ４の間が1.12m（3.7尺）、Ｐ４～Ｐ５の間が1.68m（6.2尺）で不均等であるが、桁行が７尺、梁行が６尺と４尺を意識していると考えられる。柱穴は８本で、円形もしくは楕円形を呈す。また、Ｐ２が若干外側にズレている。Ｐ１－32×32cmの円形で深さ34cm、Ｐ２－24×28cmの楕円形で深さ36cm、Ｐ３－56×55cmの円形で深さ31cm、Ｐ４－32×28cmの楕円形で深さ24cm、Ｐ５－42×34cmの楕円形で深さ46cm、Ｐ６－30×34cmの円形で深さ50cm、Ｐ７－42×44cmの円形



第５図　第１号掘立柱建物址実測図



第６図　第２号掘立柱建物址実測図

で深さ42㎝、Ｐ８－34×24㎝の楕円形で深さは34㎝を、それぞれ計測する。

本址に伴う遺物の出土は無かった。

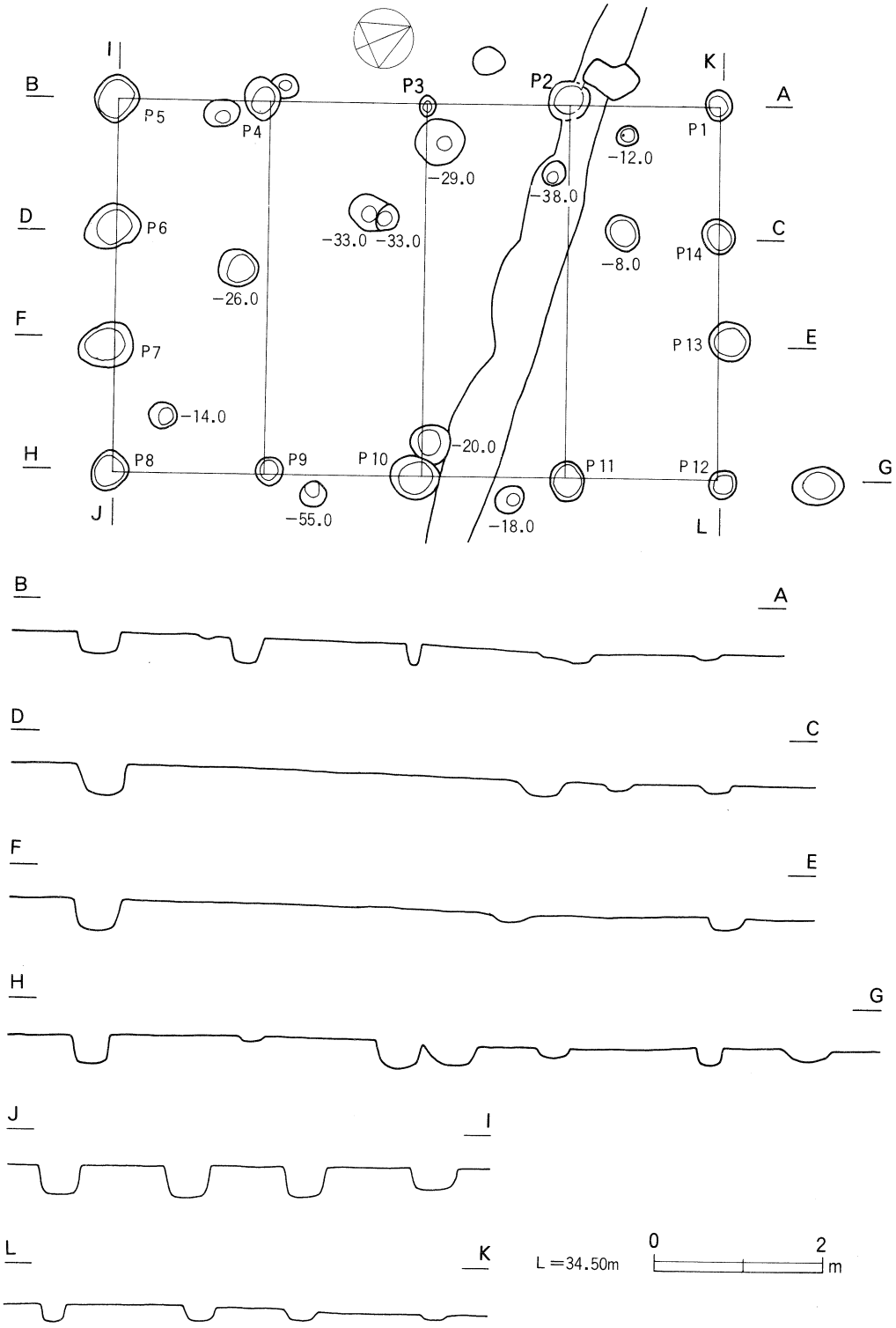
第３号掘立柱建物址　（第７図、図版５）

本址は、虎口のすぐ北側に位置し、第２号掘立柱建物址と一部重複している。大きさは、桁行４間（7.22m）×梁行３間（4.44m）で長方形をなす建物址であり、本遺跡内で最大の掘立柱建物址である。主軸はＮ－23°－Ｅに有している。桁行の柱間は、Ｐ１～Ｐ５間が1.81m（6.0尺）Ｐ２～Ｐ３間が1.71m（5.7尺）、Ｐ３～Ｐ４間が1.89m（6.3尺）、Ｐ４～Ｐ５間が1.81m（6.0尺）でほぼ均等である。梁行の柱間は、Ｐ１～Ｐ14間が1.60m（5.3尺）、Ｐ14～Ｐ13間が1.26m（4.2尺）、Ｐ13～Ｐ12間が1.58m（5.2尺）で、中央部が南側と北側に対してやや狭くなっている。柱穴は、本址の柱穴14本以外に、本址の内側に８本検出された。本址の柱穴は、西側のＰ５～Ｐ８の４柱穴はしっかりした柱穴であるが、他は比較的浅い柱穴である。Ｐ１－32×38㎝の円形で深さ７㎝、Ｐ２－39×42㎝の円形で深さ10㎝、Ｐ３－49×47㎝の円形で深さ14㎝、Ｐ４－32×35㎝の円形で深さ23㎝、Ｐ５－40×48㎝の楕円形で深さ13㎝、Ｐ６－60×52㎝の楕円形で深さ34㎝、Ｐ７－32×34㎝の円形で深さ７㎝、Ｐ８－44×48㎝の円形で深さ35㎝、Ｐ９－64×53㎝の楕円形で深さ38㎝、Ｐ10－64×52㎝の楕円形で深さ37㎝、Ｐ11－54×57㎝の円形で深さ26㎝、Ｐ12－42×53㎝の楕円形で深さ31㎝、Ｐ13－20×26㎝の楕円形で深さ26㎝、Ｐ14－推定50×48㎝の円形で深さ10㎝を、それぞれ計測する。

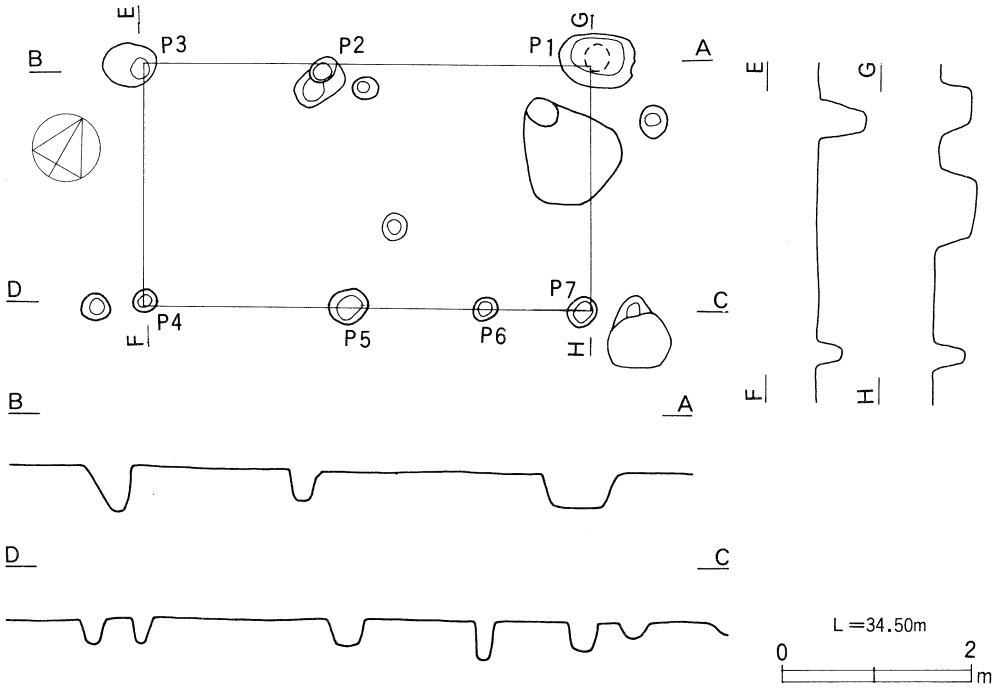
本址に伴う遺物の出土は無かった。

第４号掘立柱建物址　（第８図、図版５）

本址は、第３号掘立柱建物址の東側で、台地の南端付近に位置している。大きさは、桁行３間（4.72m）×梁行１間（2.54m）の長方形をなす建物址である。主軸は、Ｎ－60°－Ｅに有している。桁行は、北列と南列で柱穴の間隔が異なる。北列はＰ１～Ｐ２間が2.84m（9.5尺）、Ｐ２～Ｐ３間が1.88m（6.2尺）で、東側が約1.5倍広くなっている。南列は、Ｐ６～Ｐ７間が1.12m（3.7尺）、Ｐ５～Ｐ６間が1.42m（4.7尺）、Ｐ４～Ｐ５間が2.18m（7.2尺）と東側から順に柱の間隔が広くなり、西側が東側の約２倍になっている。柱穴は７本で、北列３本、南列４本をそれぞれ検出した。Ｐ１は、第10号住居址の貯蔵穴内に掘り込まれており、推定径27×27㎝の円形で深さ35㎝を計る。Ｐ２－30×32㎝の円形で深さ30㎝、Ｐ３－26×24㎝の円形で深さ39㎝、Ｐ４－40×38㎝の円形で深さ28㎝、Ｐ５－24×24㎝の円形で深さ27㎝、Ｐ６－56×46㎝の楕円形で深さ48㎝、



第７図　第３号掘立柱建物址実測図



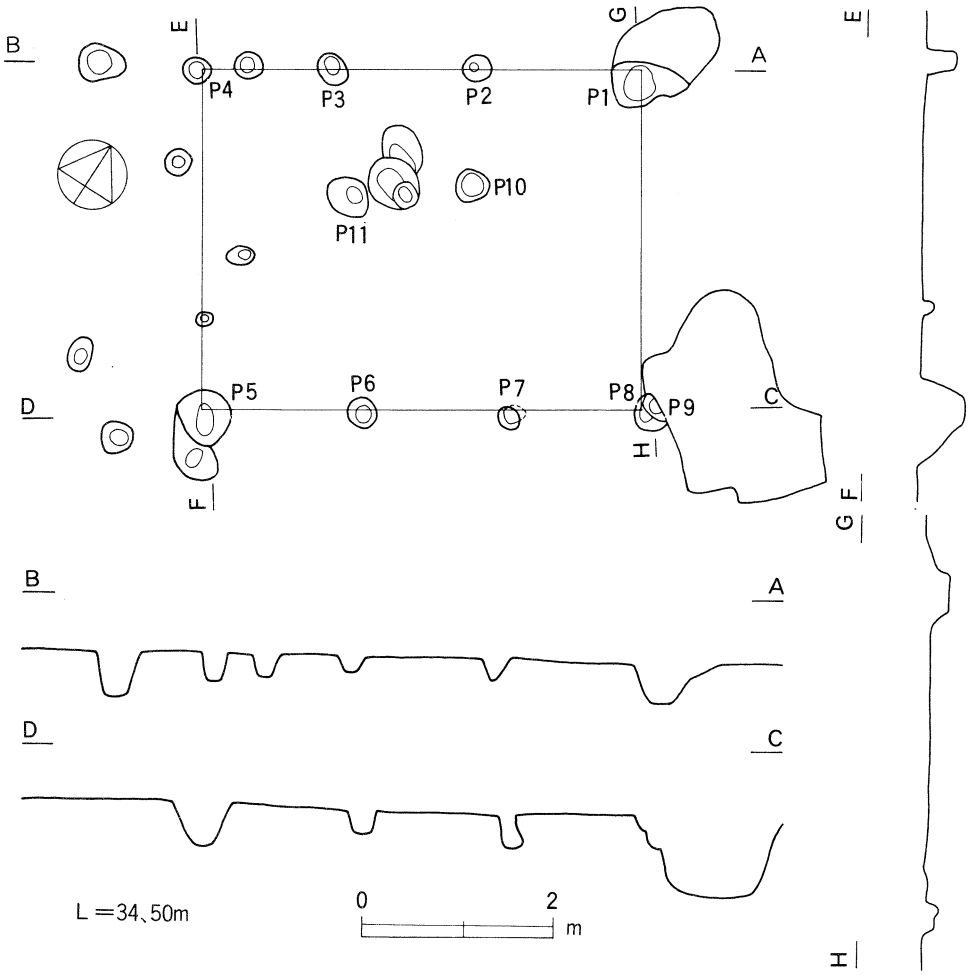
第８図　第４号掘立柱建物址実測図

Ｐ７－32×24cmの楕円形で深さ31cmを、それぞれ計測する。

本址に伴う遺物の出土は無かった。

第５号掘立柱建物址　（第９図、図版５）

本址は、第４号掘立柱建物址の東に位置し、掘立柱建物址の内で最も東に位置している。大きさは　桁行３間（4.65m）×梁行１間（3.57m）の長方形を有する建物址である。主軸は、N－58°－Eに有している。桁行は、北列でＰ１～Ｐ２間が1.76m（5.8尺）、Ｐ２～Ｐ３間が1.50m（5.0尺）、西側1.39m（4.6尺）で西に進に従って柱の間隔が狭くなっている。南列は、Ｐ７～Ｐ８間が1.40m(4.6尺)、Ｐ６～Ｐ７間が1.56m（5.2尺）、Ｐ５～Ｐ６間が1.69m（5.6尺）で北列とは逆になっている。梁行は、間隔が広いが、東から２列目と３列目の間で、本址の中心部分に集中して柱穴が検出された。Ｐ１－80×48cmの楕円形で深さ43cm、Ｐ２は、２本が重複しているうちの浅い方の柱穴である。推定径40×40cmの円形で深さ18cmである。Ｐ４－31×32cmの円形で深さ24cm、Ｐ５－56×58cmの円形で深さ45cm、Ｐ６－27×29cmの円形で深さ29cm、Ｐ７－29×35cmの楕円形で深さ15cm、Ｐ８－31×28cmの円形で深さ24cmを、それぞれ計測する。内側に位置するＰ

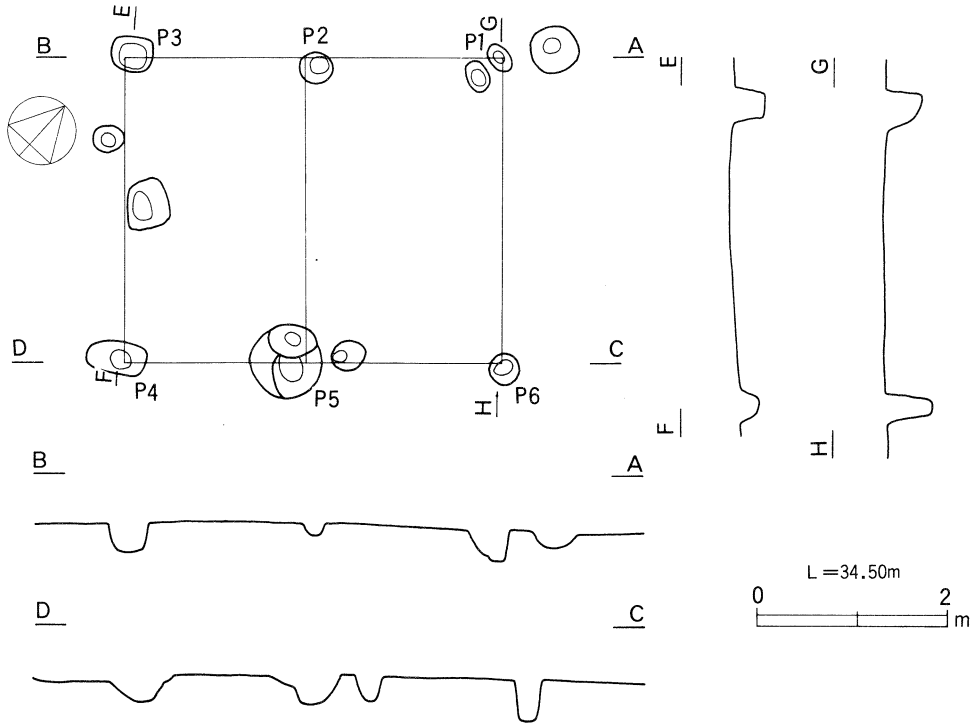


第９図　第５号掘立柱建物址実測図

９は、35×36cmの円形で深さ13cm、Ｐ10は42×40cmの方形に近い楕円形で深さ21cmを計測する。本址に伴う遺物の出土は無かった。

第６号掘立柱建物址　（第10図、図版５）

本址は、調査区の西側で、北側の台地につながる狭い台地の付根部分で北側１号堀の南側に位置している。大きさは、桁行２間（4.00m）×梁行１間（3.18m）の長方形をなす建物址である。主軸は、N－49°－Eに有している。桁行は、北列と南列で多少異なっており、北列ではＰ１～Ｐ２間が1.94m（6.4尺）でＰ２～Ｐ３間が2.06m（6.8尺）あり、南列ではＰ５～Ｐ６間が1.36m



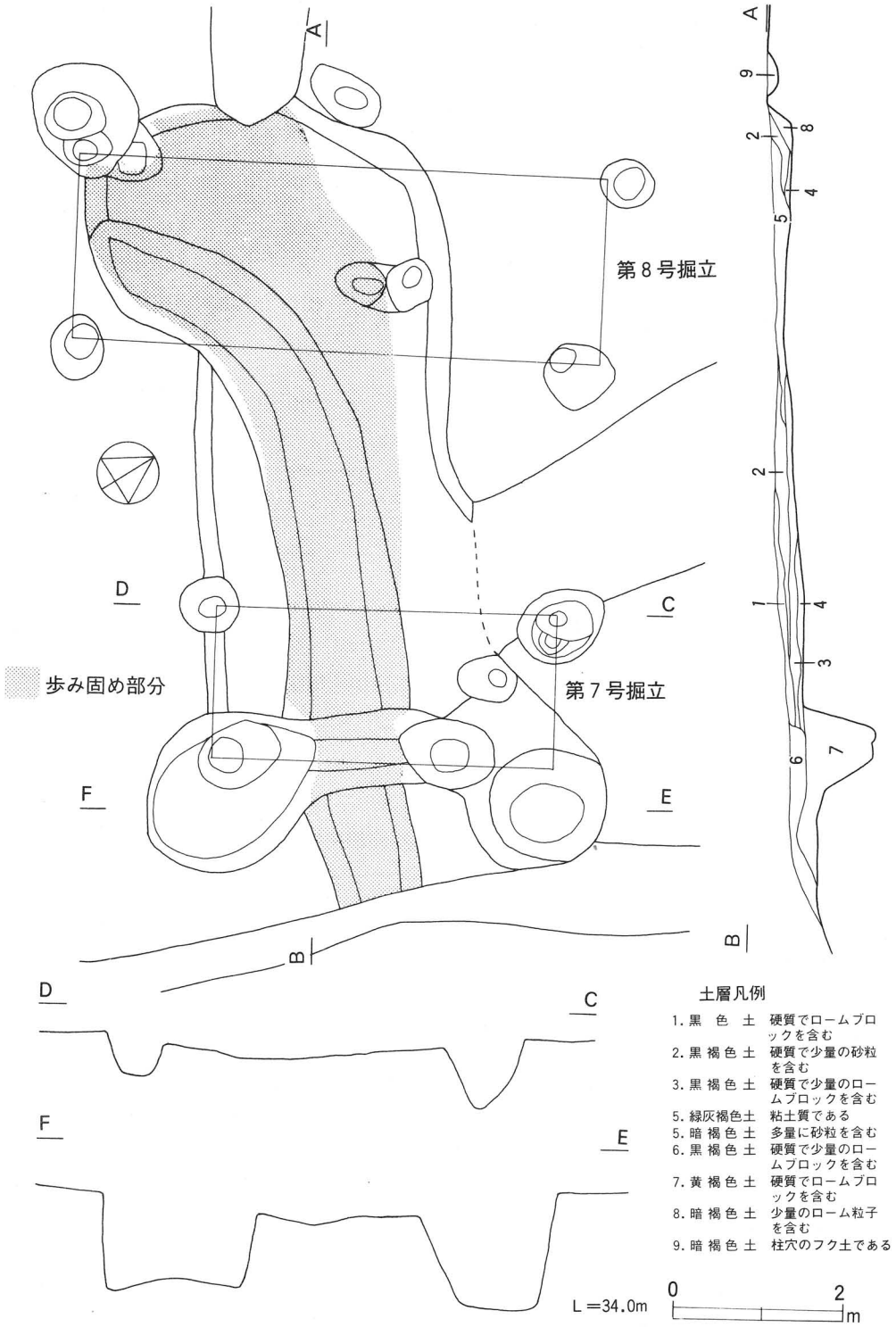
第10図　第６号掘立柱建物址実測図

(4.5尺) 西側1.76m (5.8尺) である。柱穴は６本で、Ｐ１－32×22cmの楕円形で深さ32cm、Ｐ２－32×32cmの円形で深さ45cm、Ｐ３－52×推定径56cmの円形で深さ31cm、Ｐ４－64×35cmの楕円形で深さ20cm、Ｐ５－44×36cmの隅丸方形状で深さ30cm、Ｐ６－35×32cmの円形で深さ28cmをそれぞれ計測する。

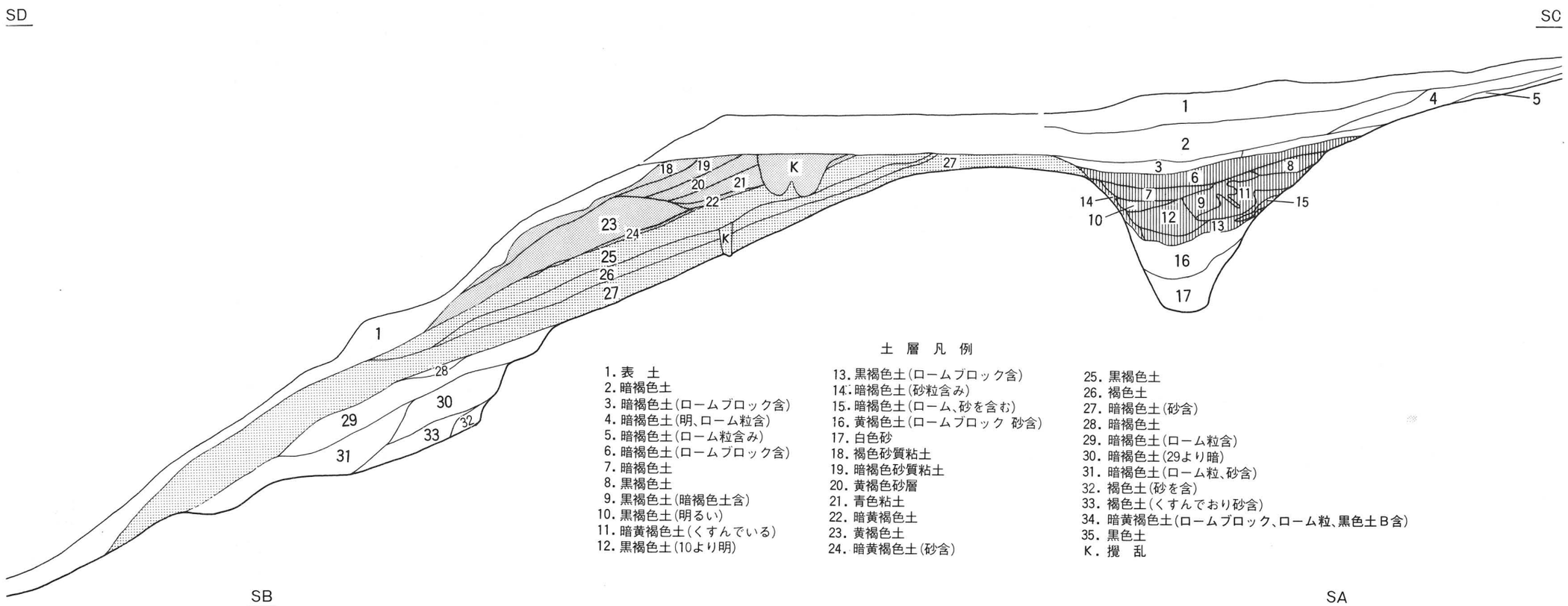
本址に伴う遺物の出土は無かった。

２） 虎口 （第11図、図版５）

本址は搦手口と考えられ、二ノ郭の東側ほぼ中央に位置しており、本址の東側は、急傾斜な崖である。本址は、四脚門を構築しており、通路は粘土質の灰色土を主体によく踏み固められ、門の外側は階段状を呈し、内側は中心に向かってやや高くなる緩斜面となっており、北側で西に折れる通路を構築している。四脚門は、東西径4.08m (13.6尺) 南北径1.68m (5.6尺) を計る。北側柱穴の径に対して、南側の柱穴の径は、北側の２倍以上である。四脚門としては、14尺×６尺の門と考えられる。この西に折れる部分にも、四脚門が所在している。

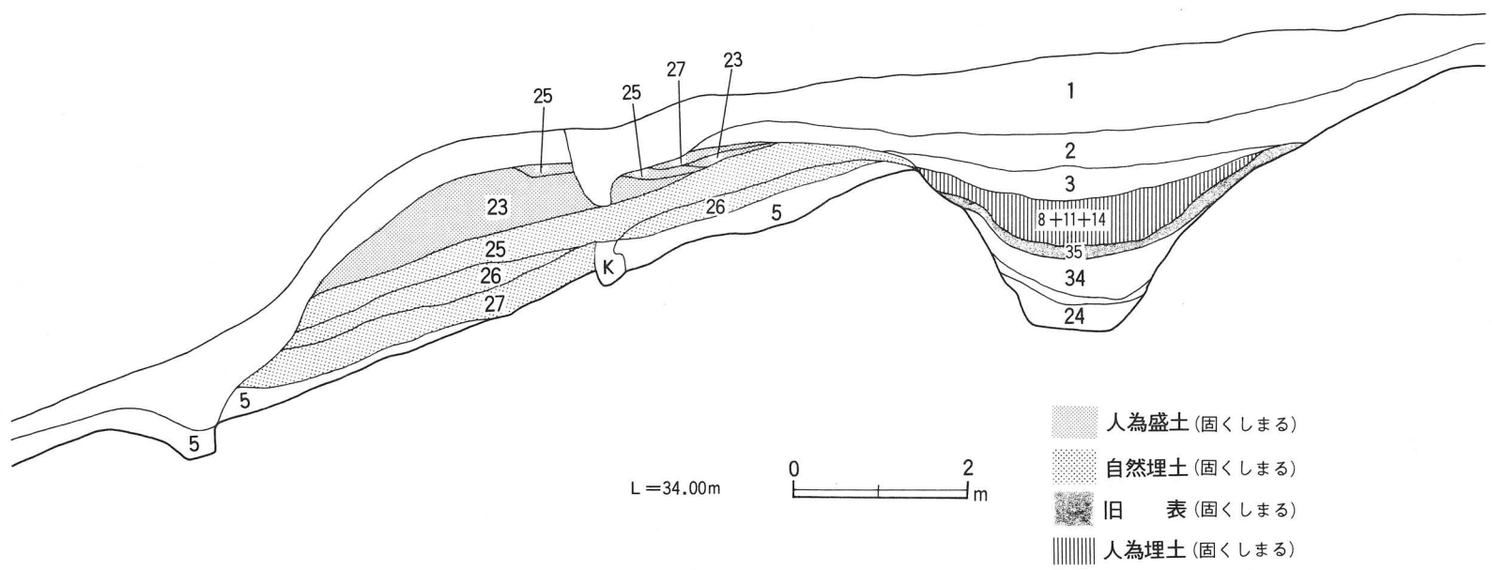


第11図　東側虎口部実測図

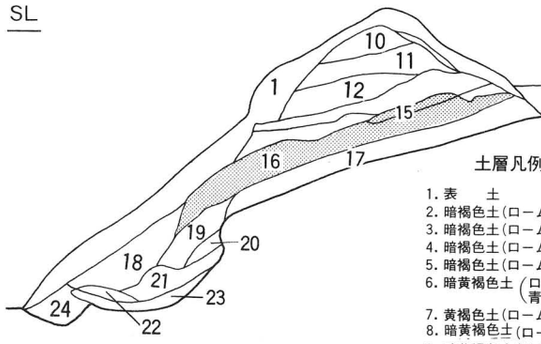


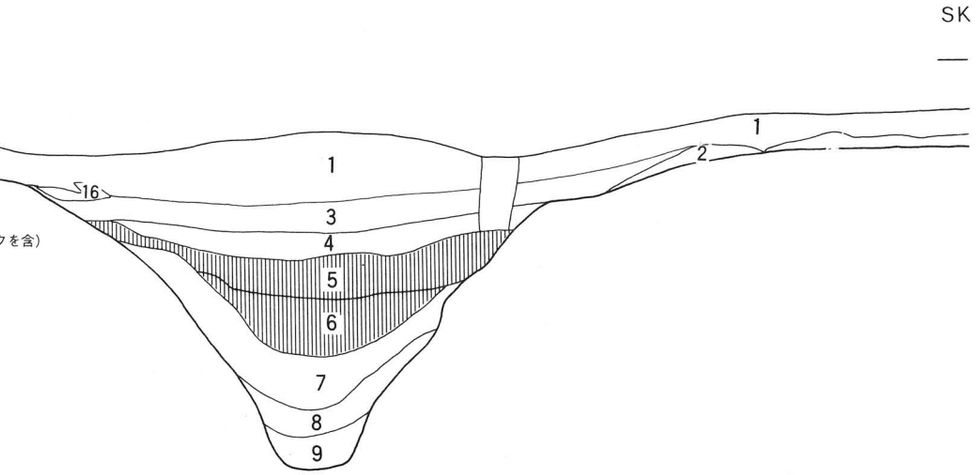
土 層 凡 例

1. 表　土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土(ロームブロック含)
4. 暗褐色土(明、ローム粒含)
5. 暗褐色土(ローム粒含み)
6. 暗褐色土(ロームブロック含)
7. 暗褐色土
8. 黒褐色土
9. 黒褐色土(暗褐色土含)
10. 黒褐色土(明るい)
11. 暗黄褐色土(くすんでいる)
12. 黒褐色土(10より明)
13. 黒褐色土(ロームブロック含)
14. 暗褐色土(砂粒含み)
15. 暗褐色土(ローム、砂を含む)
16. 黄褐色土(ロームブロック 砂含)
17. 白色砂
18. 褐色砂質粘土
19. 暗褐色砂質粘土
20. 黄褐色砂層
21. 青色粘土
22. 暗黄褐色土
23. 黄褐色土
24. 暗黄褐色土(砂含)
25. 黒褐色土
26. 褐色土
27. 暗褐色土(砂含)
28. 暗褐色土
29. 暗褐色土(ローム粒含)
30. 暗褐色土(29より暗)
31. 暗褐色土(ローム粒、砂含)
32. 褐色土(砂を含)
33. 褐色土(くすんでおり砂含)
34. 暗黄褐色土(ロームブロック、ローム粒、黒色土B含)
35. 黒色土
K. 攪　乱



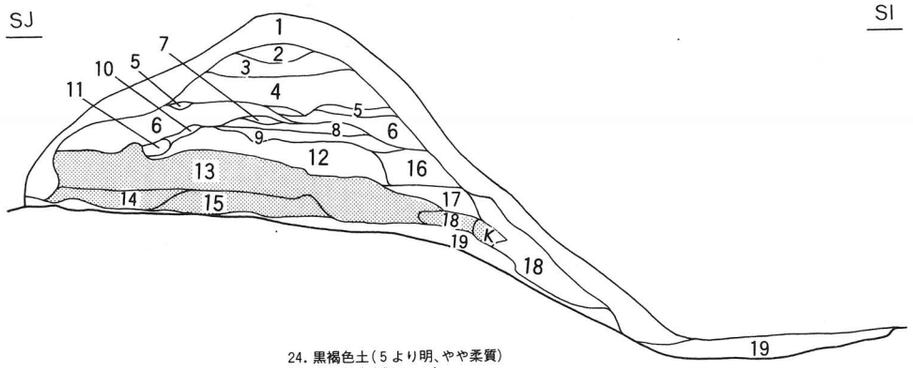
第13図　堀及土塁土層図1(堀1、西側斜面)

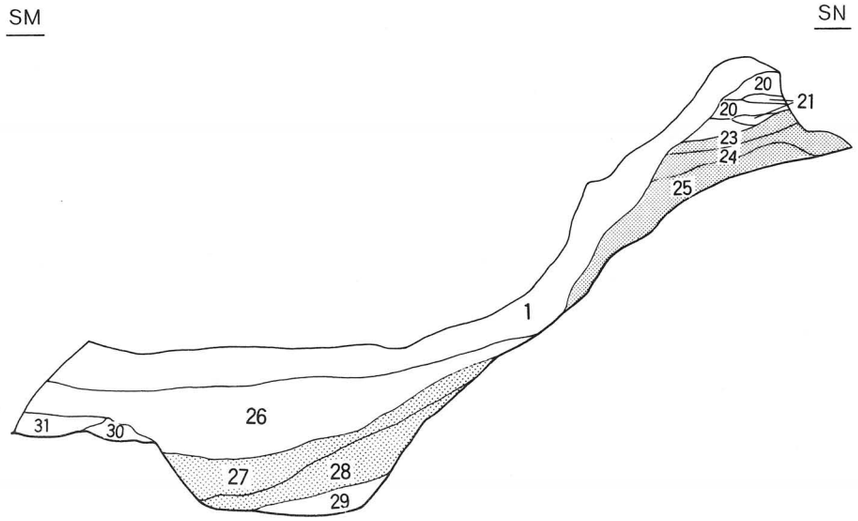




土層凡例

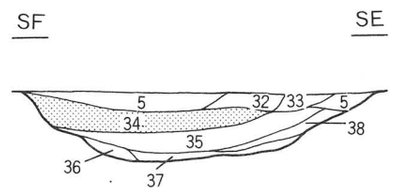
1. 表　　土
2. 暗褐色土(ロームブロック、ローム粒含)
3. 暗褐色土(ロームブロック、ローム粒少量含)
4. 暗褐色土(ロームブロック少量含)
5. 暗褐色土(ロームブロック、ローム粒、黒褐色土含み)
6. 暗黄褐色土 (ロームブロック、ローム粒、黒色土粒 青色粘土、暗褐色土含み)
7. 黄褐色土(ロームブロック、粘土ブロック、ローム粒含み)
8. 暗黄褐色土(ロームブロック、粘土ブロックを含)
9. 暗黄褐色土(粘土とロームブロックが互をなす)
10. 暗褐色土(粘土粒子含)
11. 暗褐色土(粘土粒子、砂を含)
12. 黒色土(粘土粒子、砂を含)
13. 黄褐色土(ロームブロック、黒色土ブロック、粘土ブロックを含)
14. 黒褐色土(ロームブロック、ローム粒少量含)
15. 黄褐色土(ロームブロック、黒色土粘土ブロック少量含)
16. ロームブロック(粘土ブロック含)
17. 黒色土(自然層、ローム粒含)
18. 暗褐色土(砂)
19. 黒色土(砂を含)
20. 黄褐色土 (砂質、ロームブロック含)
21. 黒褐色土(砂粒とロームブロック含)
22. 粘土ブロック
23. ロームブロック(砂質)
24. 暗褐色土(粘土質、砂含)
K. 攪　　乱

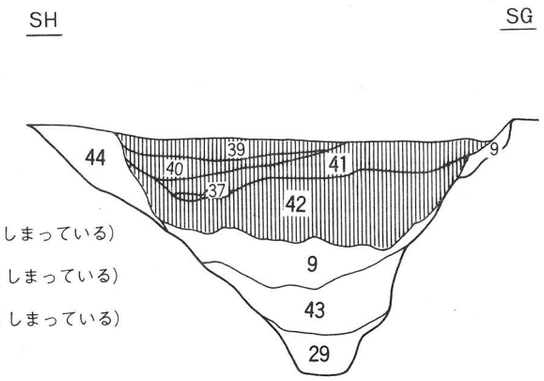




土層凡例

1. 表　　土
2. 褐色土(砂質粘土)
3. 黒褐色土(砂質粘土少量含)
4. 褐色土(ローム小ブロック、砂質粘土含)
5. 暗褐色土(ローム粒と砂粒を含)
6. 暗褐色土(ロームブロック、褐色土、黒色土を含)
7. 黒褐色土(ロームブロック含)
8. 暗褐色土(ローム粒を多量に含)
9. 暗褐色土(黒色土粒、ローム粒含)
10. 暗褐色土(くすんでおり、ローム粒含)
11. 黒褐色土(ローム粒含)
12. 暗褐色土(少量の黒色土ブロック含)
13. 黒褐色土(粘性を有し団子状ブロックが堅くしまっている)
14. 黒褐色土(さらさらしている)
15. 黒褐色土(よく踏み固められている)
16. 褐色土(ローム粒含み柔質)
17. 黒褐色土(黒色土ブロック、暗褐色土含)
18. 暗褐色土(砂粒、ローム粒含み、サラサラしている)
19. 暗褐色土(暗く、くすんでいる)
20. 暗褐色土(ローム粒含)
21. 暗黄褐色土(ロームブロック含、しまり良)
22. 暗褐色土(土器片粒小量含)
23. 黒褐色土(ローム粒、暗褐色土含み、しまり良)
24. 黒褐色土(5より明、やや柔質)
25. 黄褐色土(盛ローム)
26. 暗褐色土(ローム粒、ローム小ブロック含、しまり良)
27. 暗褐色土(ローム黒色土粒、砂含みよく踏み固めている)
28. 暗褐色砂層(黒色土粒、砂ブロックを含み、よくしまっている)
29. 暗褐色砂層(砂粘土粒、暗褐色土粒含)
30. 褐色土
31. 黒褐色土
32. 暗褐色土(ローム小ブロック、砂粒含)
33. 黒褐色土(少量のローム小ブロック、砂粒含)
34. 黒褐色土(少量のロームブロック、砂含、固くしまっている)
35. 黒褐色土(砂含)
36. 黒色土(砂、ロームブロック含)
37. 黒色土(砂含)
38. 茶褐色土(ローム粒子、砂、粘土粒子含)
39. 黄褐色土 (褐色粘土含)
40. 褐色土(粘土ブロック含、しまり良好)
41. 暗褐色土
42. 褐色土(粘土ブロック含、良くしまっている)
43. 褐色土(ローム粒子、砂粒、砂ブロック、ロームブロック含)
44. 褐色土(粘土ブロック、黒色土粒、ローム粒含)
K. 攪　　乱





0　2 m
L＝35.00m

人為盛土(固くしまっている)
自然埋土(固くしまっている)
人為埋土(固くしまっている)

第14図　堀及土塁土層図2

3） 堀、北側谷部の盛り土 （第12～14図、付図２、図版６～８）

堀は、二ノ郭を取り巻く箱薬研堀の１号堀と１号堀を改修して構築された２号堀が、検出された。１号堀は、二ノ郭の外側を全周すると考えられ、箱薬研堀状を呈している。西側で上幅6.00m、底幅約0.6m、確認面よりの深さ3.10mを計る。北側では上幅6.00m～6.50m、底幅0.07m～1.00m、確認面よりの深さ約2.04mを計る。東側では、上幅3.30m、下幅1.50m、深さ1.25mを計測し、箱堀となっている。北東コーナーから箱堀状となっている。東側で二ノ郭側と三ノ郭の比高がほぼ同一であるのに対し、北側は、二ノ郭と外側で1.20m以上の比高差があり、二ノ郭からの深さ3.10m以上を計る。本址は、ロームと粘土を堀り切り砂層まで掘り込まれており、底部の平坦面に部分的に堅く踏み固められた面が検出されており、通路として利用していた事をうかがわせている。

覆土は、下層には、砂と黄褐色土が崩れて堆積した自然層で、その上は、黄褐色土を主体とする人為的に埋められた層である。その上の４層は、２号堀に帰属する覆土と考えられる。４層は、外土塁の下層で認められた団子状の黒褐色土である。土層は、暗褐色土が堆積している。

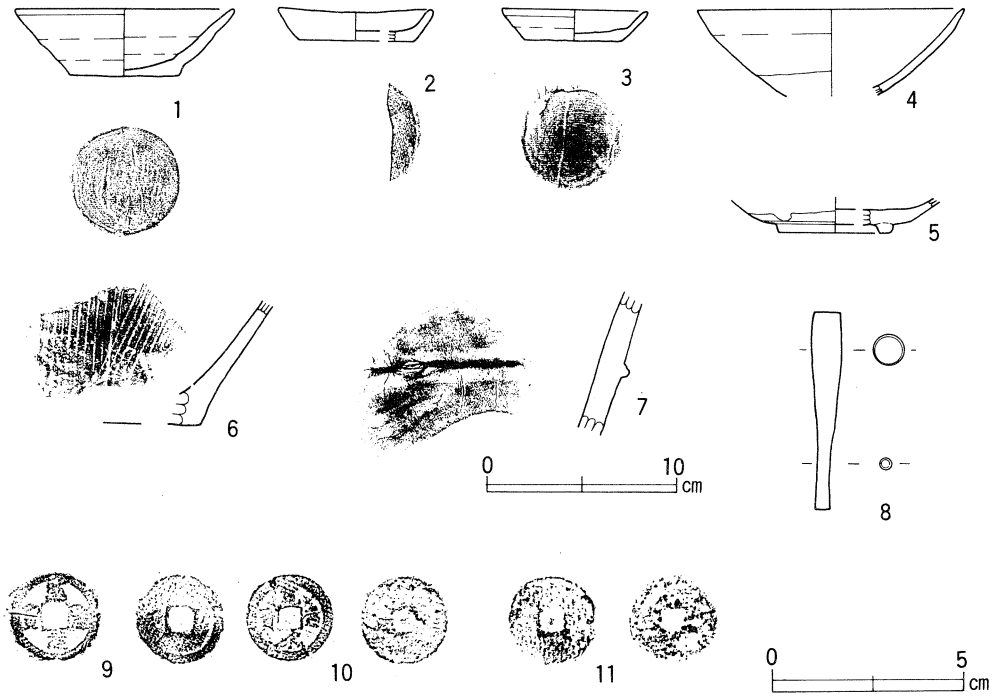
２号堀は、１号堀を改築して作られている。１号堀の北西コーナー部分に粘土と褐色土を埋めて固くしめて、北側コーナー部分で区切り、コーナーから西側の堀が、外土塁の南側を通り、西側の谷へ抜けるように構築されている。断面から見ると１号堀の箱薬研堀に対して、２号堀は半月状を呈し、深さも1.50m弱と浅くなる。

また、西側の谷を２号堀が埋没した後に、褐色土と粘土ブロックを盛り土して、谷の緩斜面部を整地して、平坦面を広くし、斜面を急角度にしている。

4） 土塁 （第13～14図、図版８）

土塁は、二ノ郭の外周に構築された内土塁と、三ノ郭を構成する外土塁の２つの土塁が遺存する。内土塁は、近世以降の耕作等により大半を破壊されている。北西側と南西側のコーナー部分に土塁の一部が塚状に遺存しており、祭祀遺構として現存している。内土塁では、北側の塚状に残る土塁が最も高低差がある。また、東側に遺存する土塁は、内側から大部分を耕作等によって削られているものの、内土塁では最も長く延びて遺存している。内土塁東側の遺存土塁高（堀の底部から土塁の頂上部）5.10m、内高1.00m，斜度（外側）53°前後を計る。構築は、最下層が黒褐色土の自然堆積層でその上に褐色土と黄褐色土を交互に盛り土している。

外土塁は、三ノ郭と舌状台地の先端とを区切るように東西方向に構築されている。西側で土塁高3.90m、内高2.10m、斜度（外側）44°、（内側）40°、中央部で土塁高3.40m，内高1.20m、斜度



第15図　城址関係遺物実測図

（外側）34°、（内側）34°、をそれぞれ計り、内高でみると、西が高く、東に進むにつれて低くなっている。構築は、最下層が砂まじりの褐色土の自然層で、その上に粘性を持ち団子状の黒褐色土の堅くしまった土層が堆積しており、その上に褐色土、暗褐色土、黄褐色土を盛り土している。

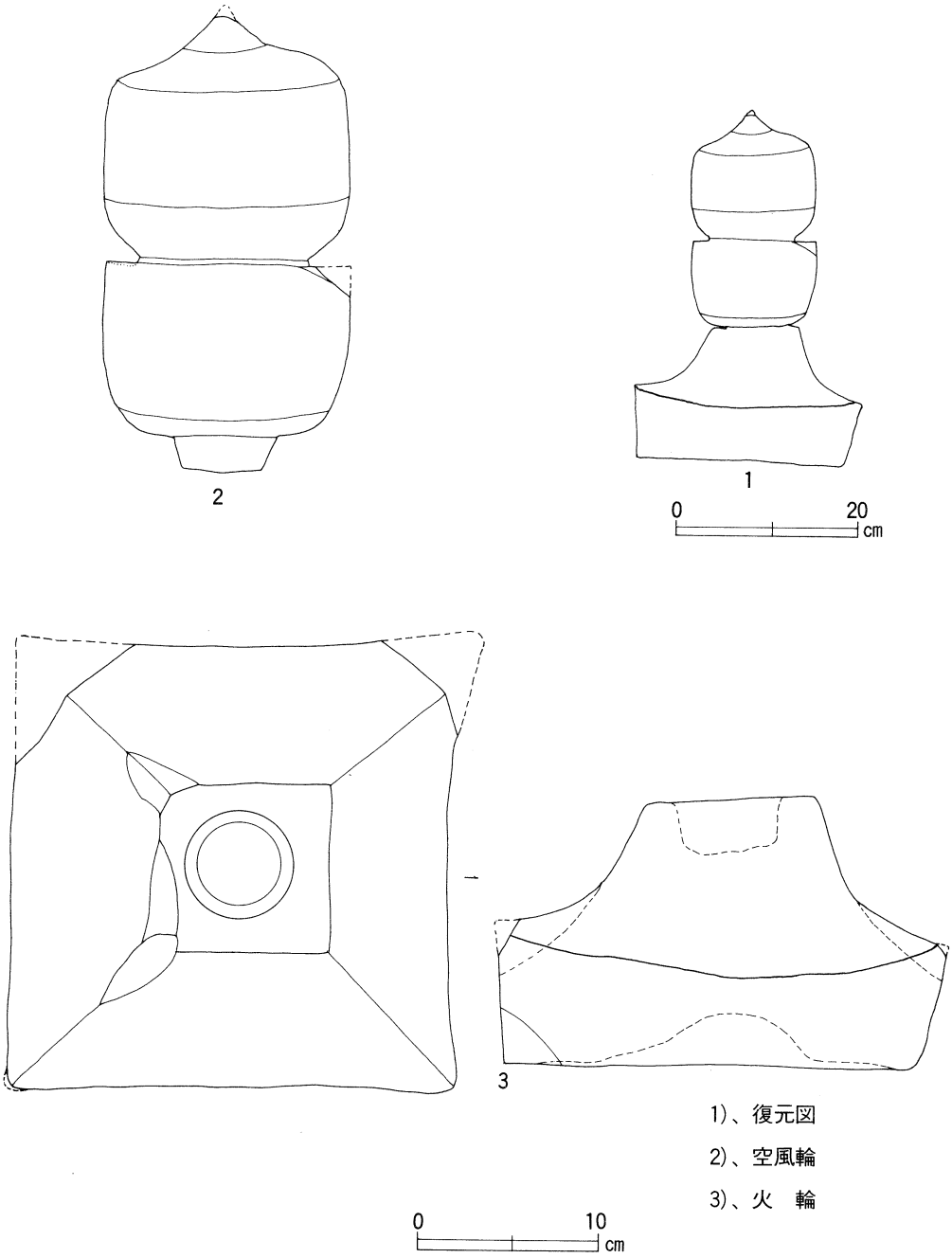
5）　出土遺物　（第15～16図、第１表、図版15）

当遺跡を調査した結果、中世及びこれに関連した遺物としては、土師質土器、天目茶碗、摺鉢、火舎、古銭、高台付碗、五輪塔などと、第５号土壙出土遺物が中世品として検出されており、当遺跡覆土内と耕作土壙から古銭が検出されている。第５号土壙の遺物は、別項で述べるため本項では、第５号土壙以外の遺物に関し記述する。

第16図２、３は、Ⅱ郭東側堀より検出された五輪塔で、火輪と空風輪である。空風輪は、結合した状態で造られている。石質は、砂岩でありやや偏平に造られている。火輪は、軒先端を２ヶ所欠損しており、底面は水輪と重ねるため3.8㎝程度刻み込まれている。法量は、火輪が高15.7㎝

第１表　城址関係出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	碗	A　11.45 B　3.65 C　5.7	体部4／5欠 底部完欠	全体的に厚味がある。 底径が口径のほぼ 1／2 である	ロクロ使用 底部回転系切り	粗密 良 白茶色	Pit 内出土
2	皿	A　8.0 B　1.7 C　6.0		焼きゆがみがあり、 全体的に厚味がある。 底径が口径の3／4 である。	ロクロ使用	密 良 橙褐色	
3	皿	A　7.5 B　1.7 C　5.0	ほぼ完形	底部に厚味がある 底径が口径の2／3 である。	ロクロ使用 底部回転系切り	密 良 白茶褐色	第 2 号住 No.4 床　　直
4	瀬戸系 天目茶 碗	A　14.0			若干の丸味を持ち、 口唇部で直線的に なる	粗密 良 白釉	
5	高台付 碗	C　7.8	小破片	釉だれがある。	灰釉陶器 釉だれがある。	密 良	高台径　5.8 瀬　戸　産 1 号 堀 内
6	摺　鉢		底部 小破片			粗 良 褐釉	1 号 堀 内
7	火　舎			凸帯が横位に廻る。		粗密 良 (外)黒灰 (内)茶灰	1 号 堀 内
8	煙　管	長　5.2 幅　0.8					
9	古　銭 開　元 通　宝	径　2.2 孔　0.8					耕作土壙内
10	古　銭 寛　永 通　宝	径　2.2 孔　1.6					耕作土壙内
11	古　銭 (不明)	径　2.4 孔　0.7					磨滅のため 銭 名 不 明 1 号 堀 内



第16図　東側堀出土五輪塔実測図

上面径9.5cm、下面径23.0cm、孔径5.5cm×3.0cm、空風輪が高25.4cm（空輪9.9cm、風輪13.5cm）、空輪幅13.6cm、風輪幅13.6cm、差込部径2.1cm×5.7cm×4.4cmを計測する。

第15図No.1は、土師質土器で素焼きの碗であり、体部を4／5程度欠損している。法量は、推定口径11.5cm、底径3.65cm、現高5.7cmを計測する。No.2、3は小型のカワラケで皿である。No.2は、底部から口縁部にかけその大部分を欠損しており、No.3はほぼ完型品である。2点とも、薄手のカワラケであり、No.3は第2号住居址内より検出されている。No.4は天目茶碗で1／5程度の破片である。推定口径は、14.0cm程度で瀬戸系である。No.5は瀬戸系の高台付碗であり、1号堀内より検出されている。灰釉陶器で、釉だれが見られる。No.6は、摺鉢底部片で8条単位の櫛引が見られる。No.7は火舎片であり、No.8は煙管である。No.9～11は、古銭である。No.9は開元通宝であり、No.10は寛永通宝であるが、No.11は磨滅のため銭銘は不明である。

6） 土壙 （第17～19図、第2・18表、図版9・19）

中世の土壙は、粘土貼り土壙3基を含め、5基検出された。

第1号土壙 （粘土貼り土壙）

本址は、調査区の南側に位置し、調査区外のⅠノ郭に最も近い位置に構築されている。東側の一部を耕作により攪乱されている。大きさは、長径1.34m、短径0.96m、確認面からの深さ0.20mを計る。主軸はE－15°－Wに有し東西に長い隅丸長方形を呈している。底部は、長方形で比較的平坦である。壁は、緩やかに丸味を持って立ち上がる。

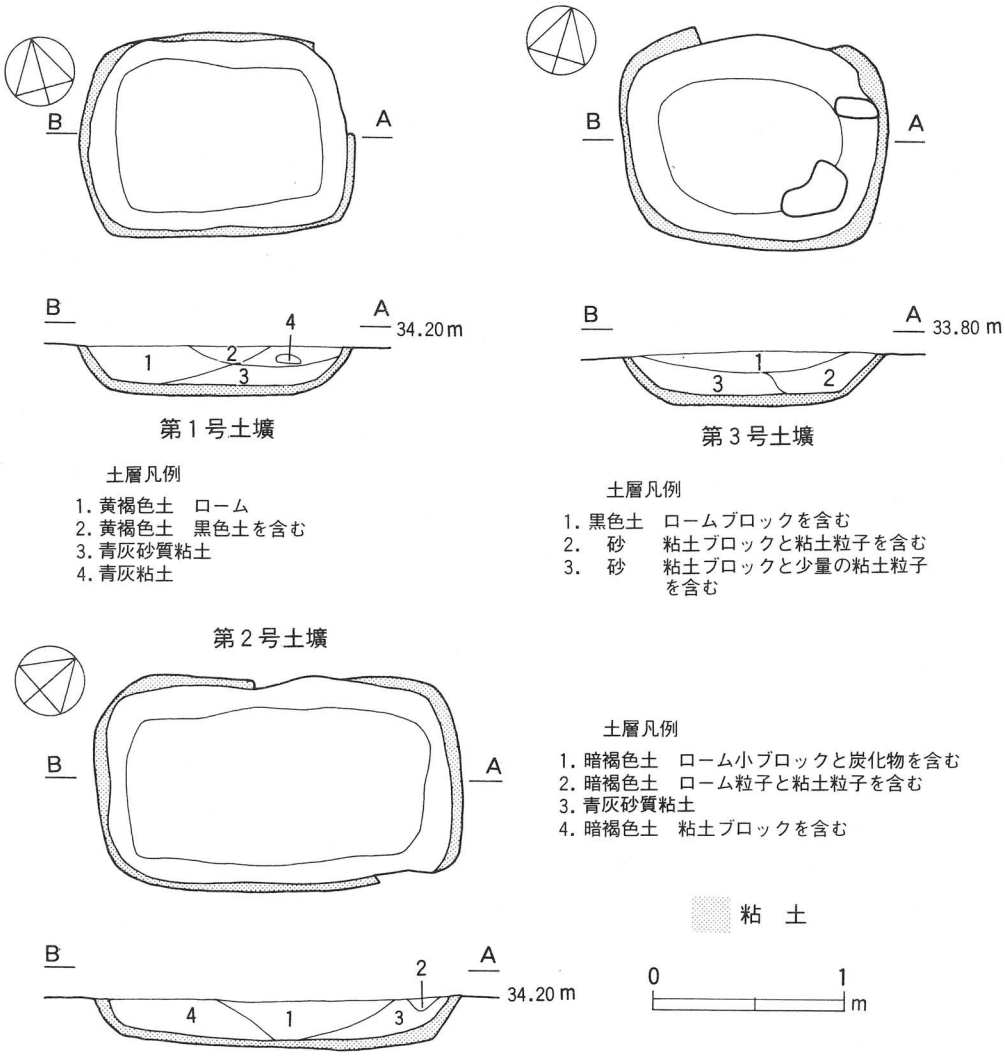
覆土は、東側からの流れを示し、1層と2層は、黄褐色土を主体とし、3層は、粘性を持つ青灰色砂層である。壁に貼り付けている粘土の厚みは、ほぼ均一で約10cmを計る。

本址に伴う遺物の出土は無かった。

第2号土壙 （粘土貼り土壙）

本址は、調査区の南側で、第1号土壙の東側に位置している。壁の一部に攪乱を受けている。大きさは、長径1.8cm、短径1.04cm、確認面より深さ0.20cmを計る。主軸は、N－38°－Eに有し東西に長い隅丸長方形を呈している。底部は、ごく浅い摺鉢状を呈すがほぼ平坦と考えられる。壁は、緩やかに立ち上がる。

覆土は、第1号土壙と似た堆積を示すが、1層と4層は、粘土ブロックを含む暗褐色土である。



第17図　土壙(粘土貼り)実測図1

3層は、粘性を持つ青灰色砂層である。壁に貼り付けている粘土の厚みは、東側の立ち上がる部分でやや厚みを増すが、ほぼ均一で約5㎝を計る。

本址に伴う遺物の出土は無かった。

第３号土壙　（粘土貼り土壙）

本址は、第５号住居址の柱穴Ｐ４の上面に構築されている。北側の壁の一部と、底部の南東コーナー付近は攪乱されている。大きさは、長径1.30m，短径1.07m、確認面よりの深さ0.24mを計る。主軸は、Ｅ－15°－Ｗに有し、東西にやや長い隅丸方形を呈している。底部は、平坦な楕円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がるが、東壁のみは他の壁よりもやや急傾斜で直線的に立ち上がる。覆土は、土層に黒色土が堆積し、下層には砂層が堆積している。壁に貼り付けている粘土は、壁面が約４㎝前後と薄く、底部が約６㎝前後を計り、壁面より底部の方が若干厚く貼り付けられている。

本址に伴う遺物の出土は無かった。

第４号土壙

本址は、調査区の南側で第２号土壙の東側、第10号住居址の南側に位置している。大きさは、長径2.25m、短径1.85m、確認面よりの深さ0.42mを計る。主軸は、Ｅ－67°－Ｎに有し東西にやや長い隅丸方形を呈し、西南に出入口と考えられる張り出しの中段を有している。底部は、平坦で東西に若干長い長方形を呈す。壁は急傾斜で直線的に立ち上がる。

覆土は、暗褐色土が主体である。

出土遺物は、土器は出土しなかったものの、覆土の中位で土壙の北側から比較的大きな粘土塊が４個出土した。

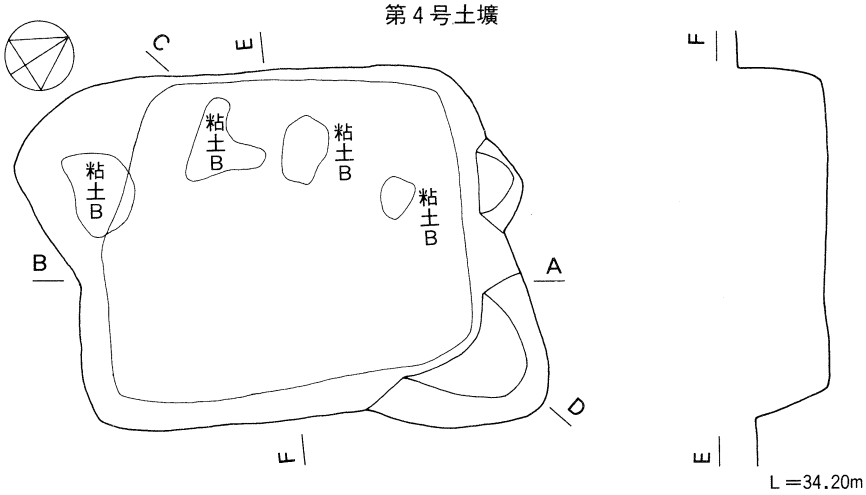
第５号土壙

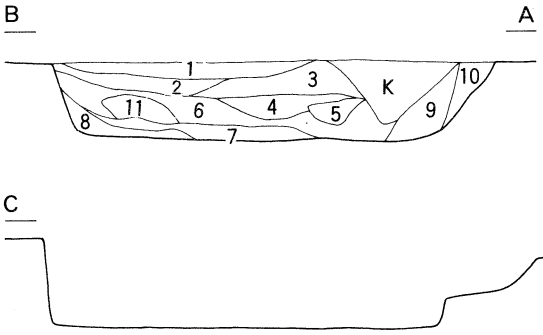
本址は、第９住居址の北西コーナーを切って位置する。大きさは、長径1.56m、短径1.04m確認面よりの深さ0.36mを計る。主軸は、Ｎ－37°－Ｅに有し南北に長い楕円形を呈し、半円球に掘り込まれているため、底部は摺鉢状を呈している。壁は、緩やかに立ち上がるが、東壁のみは急傾斜である。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積する。

出土遺物は、底部から素焼きの碗が逆向きに出土した他、常滑窯系の甕口縁部の小破片が出土した。さらに南側で、２層最下部と４層上層に素焼き碗型土器の小破片が多量に出土している。

第４号土壙

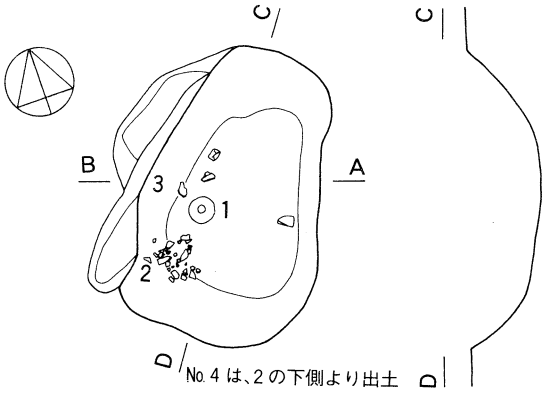




土層凡例

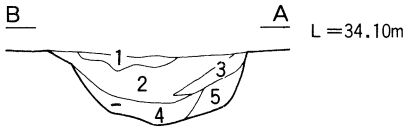
1. 暗 褐 色 土　しまっている
2. 暗 褐 色 土　黒色土と少量のロームブロックを含む
3. 暗 褐 色 土　黒色土とロームブロックを含む
4. 暗 褐 色 土　黒色土粒子とロームブロックを含む
5. 黒 褐 色 土　しまっている
6. 暗 褐 色 土　黒色土粒子を含み、しまっている
7. 暗黄褐色土　多量のローム粒子を含み、くすんでいる
8. 暗黄褐色土　暗く、くすんでいる
9. 暗 褐 色 土　ローム粒子を含み、さらさらしている
10. 黄 褐 色 土　ボロボロしたロームである
11. 暗 褐 色 土　多量の粘土ブロックと粘土粒子を含む

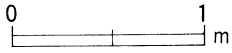
第５号土壙



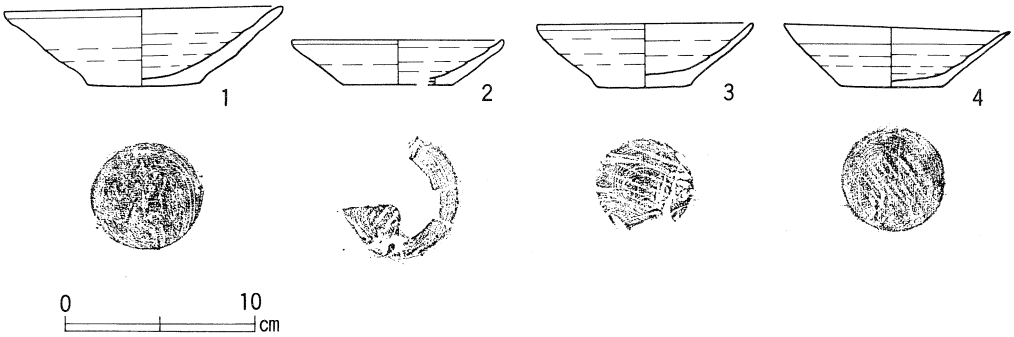
土層凡例

1. 暗褐色土　ローム小ブロックを含む
2. 黒褐色土　ロームブロックと小炭化物を含む
3. 褐 色 土　ロームブロックを含み、ボロボロしている
4. 暗褐色土　少量のロームブロックを含み、しまっている
5. 暗褐色土　ローム粒子を含み、ボロボロしている





第18図　土壙実測図２



第19図　第５号土壙出土遺物実測図

第２表　第５号土壙出土遺物一覧表

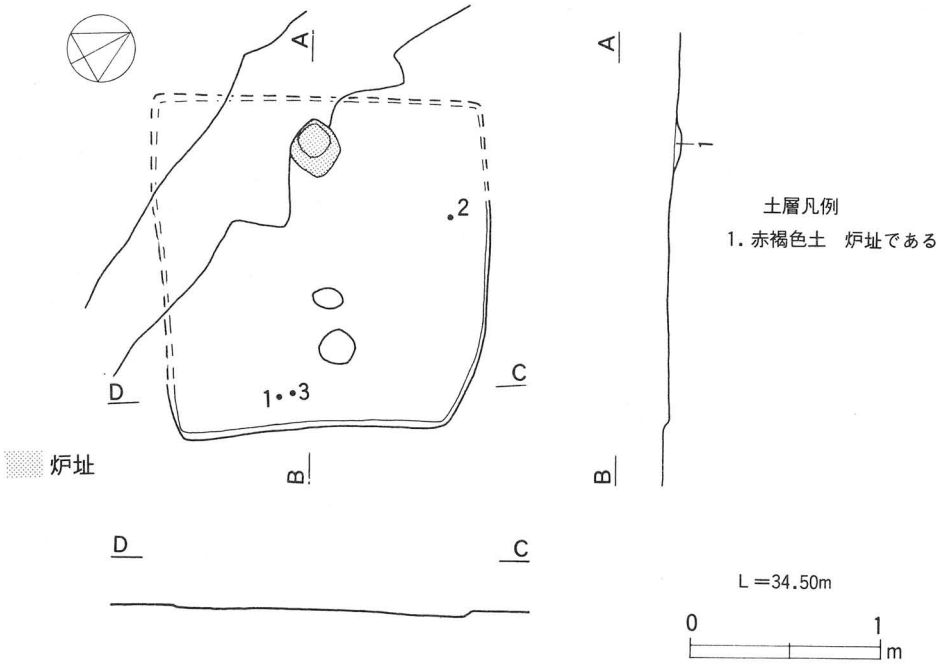
挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	碗	A　14.5 B　4.0 C　5.9	完形	底径が口径の1／2以下である。厚い。	ロクロ使用 底部回転系切り	密 良 (外)白茶色	＋　1
2	皿	A　11.0 B　2.4 C　5.8	1／2欠	底径が口径のほぼ1／2である。	ロクロ使用 底部回転系切り	粗 良 白茶色	＋　3
3	碗	A　11.2 B　3.4 C　6.0	約1／2欠	底径が口径の1／2以下である。底部が厚く体部が薄くなる	ロクロ使用 底部回転系切り	粗密 良 白茶色	＋　4
4	碗	A　11.8 B　3.2 C　5.4	ほぼ完形	底部が口径の1／2以下である。口唇部が、若干外反する	ロクロ使用 底部回転系切り 口縁部、なめし皮等で調整	粗 良 白茶色	＋　7

２．中世以前の遺構と遺物

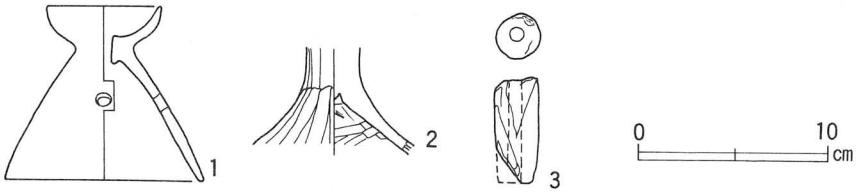
１）住居址

第１号住居址　（第20・21図、第３表、図版10・16）

本址は、調査区の最も西側に位置し、中世の築城及び耕作等により、遺構上面の大半と北壁、西壁が消滅している。また、本址の北西部を南北に走る耕作溝によって床面の一部が破壊されている。大きさは東西径3.40m、南北径3.45mと推定され、遺構確認面よりの深さは、最大で0.08m程度である。主軸はＮ－64°－Ｗで不正方形を呈している。床は、直床であるが軟質である。壁



第20図　第１号住居址実測図



第21図　第１号住居址出土遺物実測図

第３表　第１号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	器　台	A　6.0 B　9.2 C　10.3	脚部 1／2欠	四方透しである。器受部は丸味を持って開き、脚部は直線的に開く。	磨滅が激しい。	粗 不良 暗褐色	＋　6
2	高　坏	頸部　2.8	脚部 5／6欠	透し痕がある。	外面に縦位のヘラミカギを施す。	粗 不良 橙褐色	＋　2
3	土製管玉	2.4×2.2×5.05 0.7×0.7 重　28g				粗密 良 薄褐色	床　直

は東壁の南側半分と南壁及び西壁の南寄りのごく一部が残存し、床面からほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝、柱穴、貯蔵穴等は、検出されなかった。覆土は、暗褐色土１層で、よくしまっている。

出土遺物としては、器台、菅玉、土師器片などが検出されている。第21図No.１は器台で床面上６cmより、同図No.２は器台片で床面上２cmより、同図No.３は菅玉で床面から、各々検出されている。これ以外では、住居址覆土内より少量の土師器片が検出された程度である。No.１～３は、本址に結び付く遺物と判断される。

炉址は、住居址の北端のほぼ中央に位置し、南北に長い楕円形を呈し、北寄りに浅く掘り込まれている。覆土は、赤褐色土１層であるが、あまり焼けていない。

第２号住居址　（第22・23図、第４表、図版10・16）

本址は、調査区の西側で、第１号住居址と第３号住居址との間に位置する。大きさは東西系3.95m，南北径4.46m、遺構確認面よりの深さは、最大で0.15m程度である。主軸は、N－60°－Wで南北に若干長い隅丸長方形を呈している。床は、貼り床であるが全体にやや軟弱であり、北東部で床面が低くなっている。壁は、住居址の西側ではほぼ垂直に掘り込まれているが、東側は若干斜めに掘り込まれている。壁溝は、東壁で浅くなり東壁中央部分で切れている。また、北、西、南壁ではほぼ同一の深さで周っている。柱穴は、北東側で壁溝が切れる地点とほぼ平行した位置で検出された。口径は小さく、床面からの深さも0.10mと浅い柱穴である。貯蔵穴は、検出されなかった。

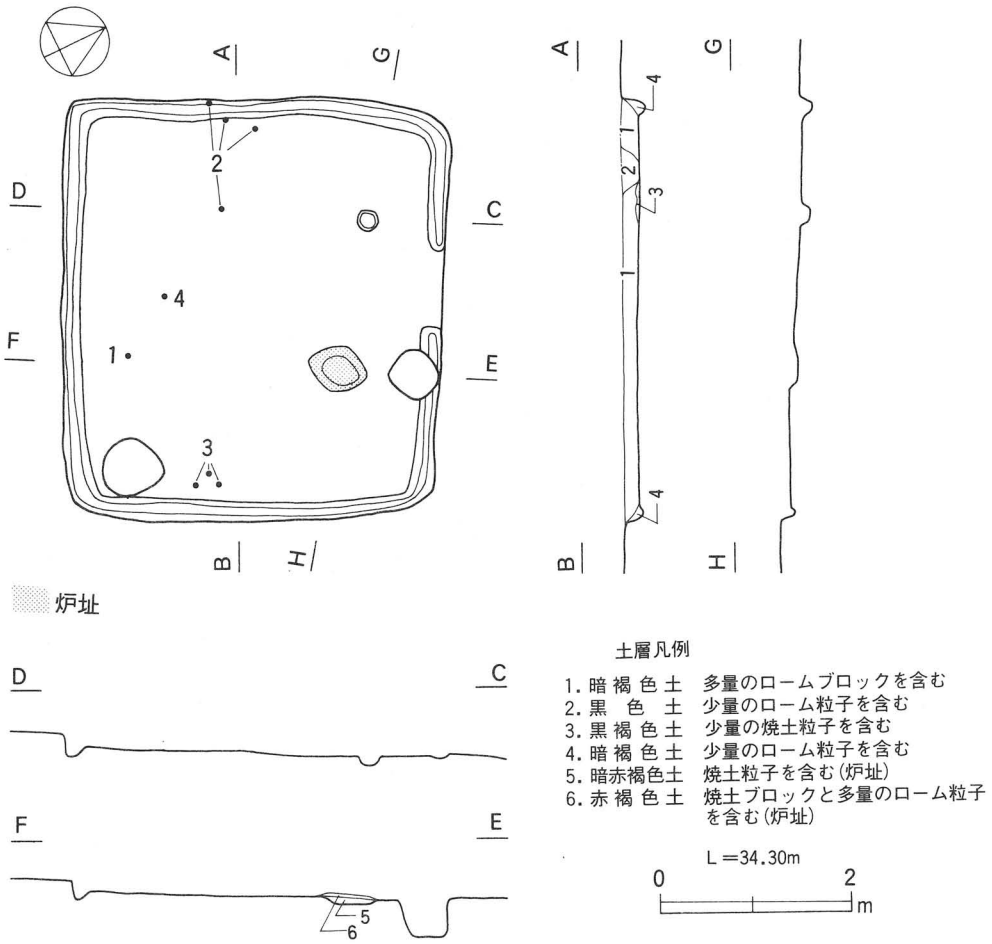
覆土は、暗褐色土を主体とし、中世の土塁下に位置していたと考えられるため、かたくしまっている。

出土遺物は、No.１の坩やNo.２、No.３の壺の口縁部片が出土しているが、大半は土師器小破片である。第23図No.１は坩で床面より検出され、同図No.２は甕で床面上３cm～９cmの所より検出され、同図No.３は甕で床面上３cmの所より各々検出されている。No.２、No.３は、接合資料であり、またNo.１～３は本址に結び付く遺物と判断される。

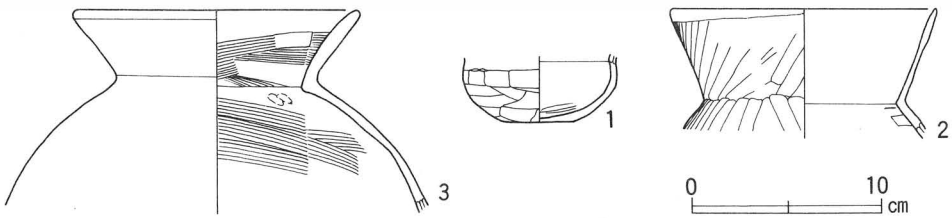
炉址は、住居址の東側で若干南寄りに位置し、東西に長い楕円形を呈している。ほぼ中央部が浅く、摺鉢状に掘り込まれている。覆土は、赤褐色土が主体であるが、上面は暗褐色土を呈し、よく焼けており、炉址の南側の床面も熱を受けて赤化している。

第３号住居址　（第24図、第５表、図版10・16）

本址は、調査区の北側で第２号住居址と第４号住居址の間に位置する。本址の北側は、中世の



第22図　第２号住居址実測図



第23図　第２号住居址出土遺物実測図

堀によって破壊され消滅している。大きさは、東西径5.30m、南北残存径3.50m、遺構確認面よりの深さは、南壁側で0.40mを測るが、北側へ進につれて深さはなくなる。主軸は、N－28°－Wに有し隅丸方形又は隅丸長方形を呈している。床は、貼り床であるが堅持ではない。北へ向かっ

第4表　第2号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	小形坩	C　3.7	口縁部 欠損	底部平底 体部は内傾 頸部は外傾	(外)横位のヘラナデ (内)ヘラミガキ	密 良 (外)黒色 (内)白茶褐色	床　直
2	壺	A　13.8	口縁部 3／5欠	頸部がくの字状を呈し、口縁部が直線的に外上方へ立ち上がる。	(外)頸部を境にして、口唇へ向かうものと、胴部に向うヘラナデを施す。	密 良 薄茶褐色	＋　6
3	壺	A　14.6	口縁1／4 頸部1／3欠 胴部1／2	頸部がくの字状を呈し口縁部が厚くなる。	(外)磨滅が激しい。 (内)横位に刷毛目を施す。	粗 良 (外)白茶(内)薄茶	床　直

て床面が若干低くなっている。壁は南面コーナー周辺と東壁の北側でゆるやかに立ち上がるが、南東コーナー周辺は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、南壁と西壁で検出されたが、東壁では検出されなかった。また西壁側では、途中から消滅している。南壁が最も深く掘り込まれている。柱穴は、2本検出されたが、本来は4本ではなかったかと考えられる。口径が小さく、床面からの掘り込みも0.10mと浅い。貯蔵穴は、検出されなかった。

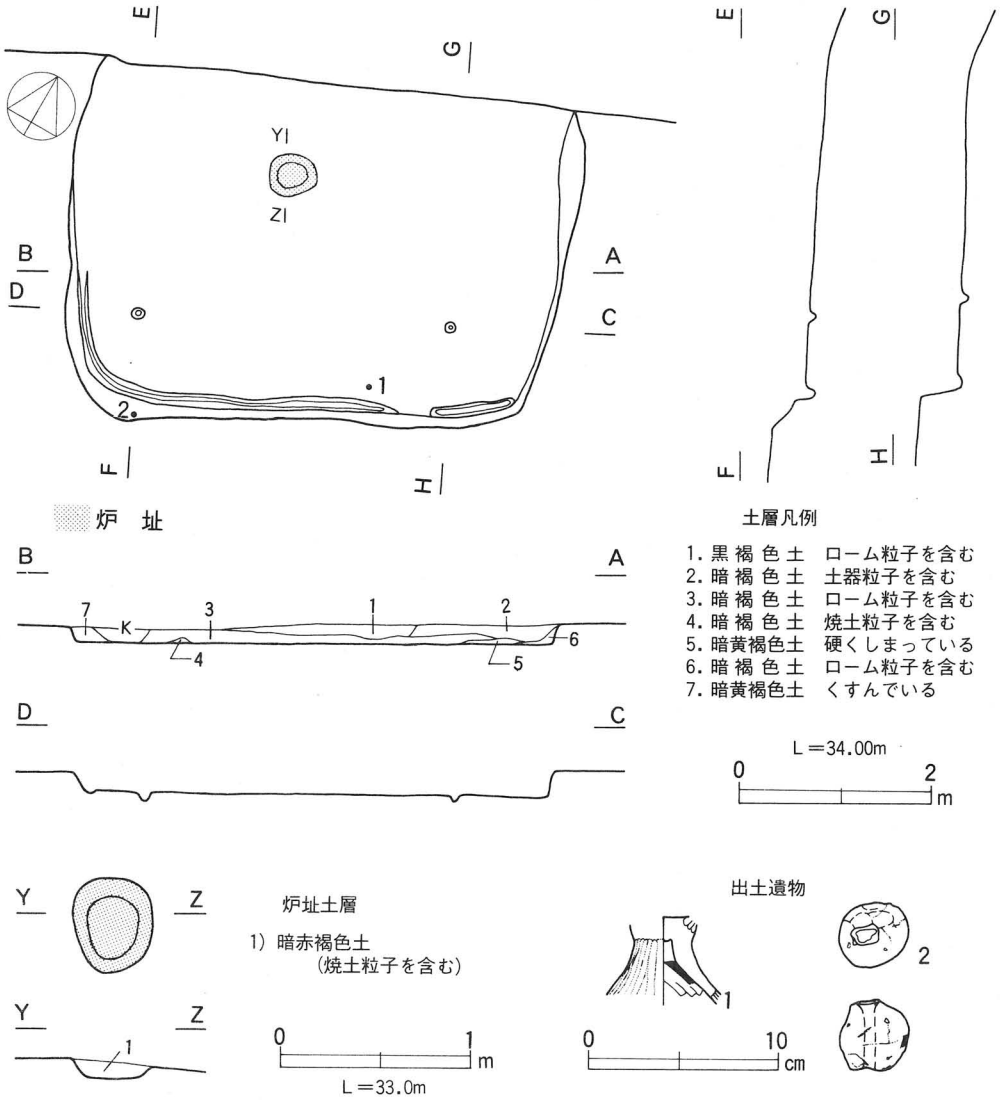
覆土は、暗褐色土が主体であるが、かなり攪乱を受けている。本址も中世の土塁下と考えられ、かたくしまっている。

出土遺物は、主なものでNo.1の高杯片とNo.2の土玉程度で、大半は土師器小破片である。小破片は、南壁から柱穴の間までの覆土中に集中して出土している。第24図No.1は、床面からの検出であり、同図No.2は床面上29cmの覆土内からの検出である。

炉址は、住居址の西寄りのほぼ中央に位置すると考えられる。東西に若干長い楕円形を呈し、掘り込みは浅い。覆土は、暗褐色土が堆積するが、あまり焼けていない。

第4号住居址　(第25・26図、第6・7表、図版11・16)

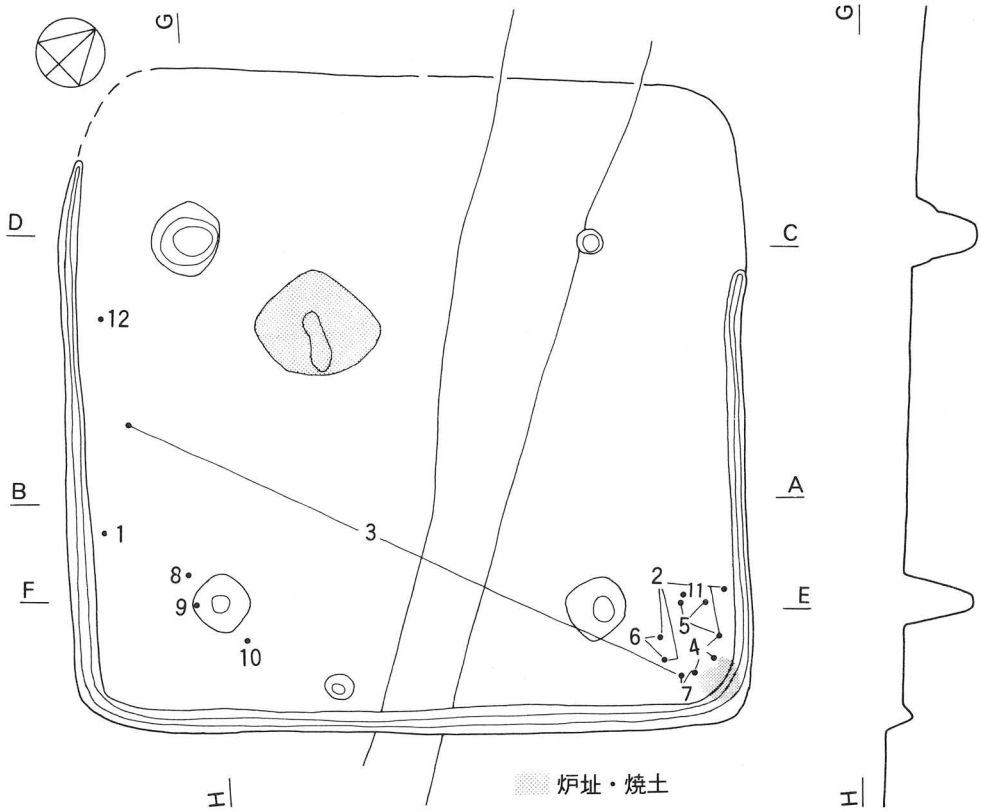
本址は、調査区の北側で第3号住居址の北東方向に位置する。本址の北側は、中世の堀によって削平され消滅している。また、本址を東西に切るように南西に走る溝によって、中央部分を破壊されている。この南北に走る溝の上面に、本址から北側の堀にかけて粘土が貼りられている。本址の大きさは、東西径7.40m、南北推定径7.30m、遺構確認面よりの深さは南壁側は最大で0.26mを測るが、北側へ進むにつれてなくなる。主軸は、N－49°－Wに有し、隅丸方形を呈している。床は、貼床であるが軟弱である。北へ向かって若干であるが、床面が低くなる。壁は、東壁が最も垂直に掘り込まれており、南壁と西壁は急傾斜で掘り込まれているが、東壁に比べると若

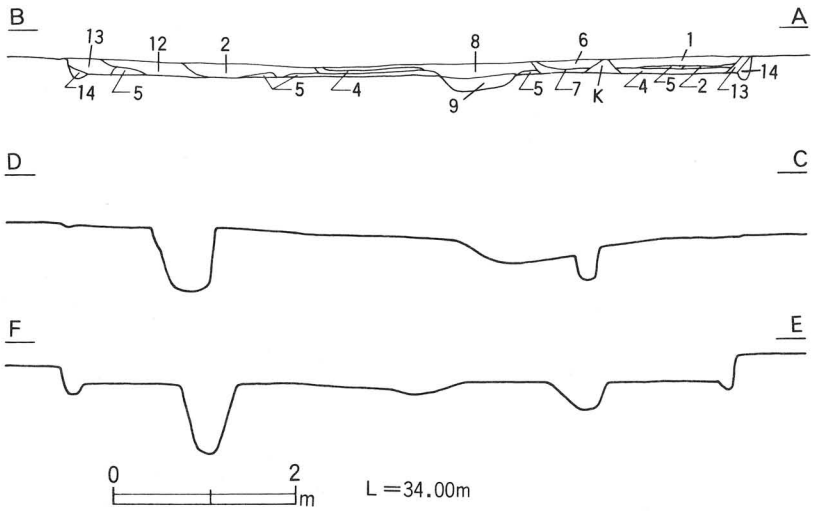


第24図　第３号住居址実測図

第５表　第３号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　考
1	高　坏	頸部　3.0	坏部 脚底部欠	脚部は外湾気味に外傾。	(外)横位のヘラミガキ (内)ヘラナデ	粗密 良 橙褐色	＋　1
2	土　玉	3.6×3.4×3.7 1.1×0.65 重　41g	完形			密 良 薄橙褐色	＋　36

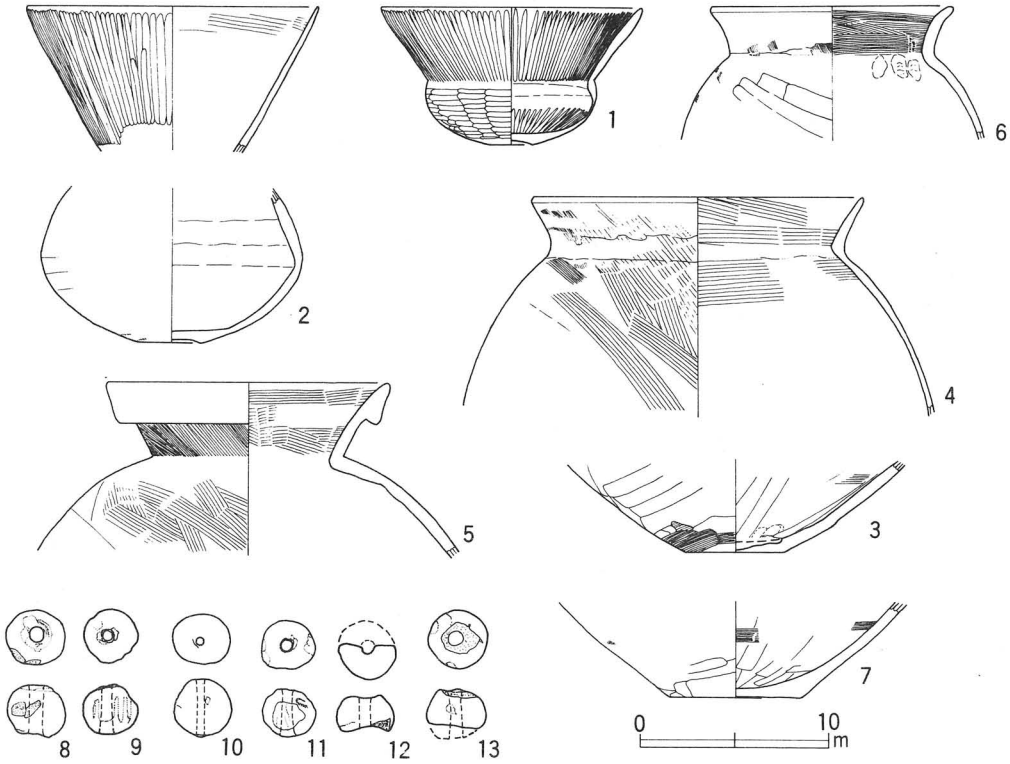




土層凡例

1. 暗褐色土　固く、ローム粒子を含む
2. 黒褐色土　炭化物とローム粒子を含む
3. 暗褐色土　ローム粒子を含む
4. 黒褐色土　炭化物と少量のローム粒子を含む
5. 暗褐色土　多量のローム粒子を含む
6. 砂質粘土ブロック　固い
7. 黒褐色土　ロームブロックを含み固い
8. 暗褐色土　多量のローム小ブロックを含み、固い
9. 黒褐色土　ローム小ブロックを含む
10. 黒褐色土　ロームブロックを含む
11. 黒褐色土　多量のローム小ブロックを含む
12. 暗褐色土　少量の焼土粒子とローム粒子を含む
13. 暗褐色土　小量のローム粒子を含む
14. 暗褐色土　ローム粒子を含む
15. 焼　土

第25図　第４号住居址実測図



第26図　第４号住居址出土遺物実測図

第６表　第４号住居址出土遺物一覧表　1

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土．焼成．色調	備　　考
1	坩	A　13.8 B　　7.4 C　　2.2	3／5欠損	底部が0.2cm上げ底になっている。頸部が若干くびれ、口縁部が、大きく外へ開く	(外)口縁部は縦位ヘラ磨き．体部は横位ヘラ磨き (内)縦位ヘラ磨き	良 赤彩(底)肌色	底部削り高0.25 他住居接合あり ＋　1
2	坩	A　15.3 C　　3.2	口縁部2／5 全頸部 ½ 胴　部	底部が0.2cm上げ底になっている。頸部がくびれ口縁部が胴部径より若干広い位に開く	(外)口縁部赤彩あり縦位ヘラ磨き胴部横位のヘラナデ痕あり (内)口唇部に刷毛目を施す．胴部上半輪に積み痕	良 橙褐色	底上げ 0.2 残高 7.8＋0.2 ＋　16
3	甕	C　　5.0	底部 1／2欠損	平底 体部は直線的に外傾	底部ヘラナデ(外)底部刷毛目．胴部ヘラナデ(内)下から上へヘラナデ　胴部中位右→左刷毛目	良 (外)暗茶褐色 (内)暗こげ茶	残高4.9 ＋　9
4	甕	A　17.4	口縁部 ～胴部 1／2欠損	口縁部は外傾 体部は内傾	(外)頸部～口唇に刷毛目　頸部～口唇に斜位の刷毛目(内)口縁～頸部刷毛目	不良 (外)肌色(内)灰	残高11.8 ＋　23
5	折返し 口縁壺	A　14.6	口唇部 9／10 胴部上半 5／6 欠損	頸部がくの字を呈す	(外)頸部～口縁部に細い刷毛目、胴部に若干太めの刷目 (内)口縁部に太い刷毛目	黄味茶 良 (外)黒色 (内)黄味茶	二次火災を受けている ＋　14

第７表　第４号住居址出土遺物一覧表　2

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
6	壺	A　12.6	口縁部1／2 胴部上半 2／3 欠損	口唇部が大きく外反する	(外)口縁部と胴部接合部分に刷毛目　胴部に斜位のヘラナデ (内)口縁部に横位の刷毛目	良 (外)薄茶褐色 (内)薄橙褐色	残高7.2 ＋　15
7	甕(底部)	C　　6.8	胴部下半 2／3欠損		(底)ヘラ削り調整 (外)ヘラ削り後、ヘラナデ (内)下→上位ヘラナデ、 横位刷毛目	良 (外)黒褐色 (内)こげ茶	残高5.2 ＋　27
8	土　玉	3.1×2.9×2.8 0.8×0.8 重　25g				良 2／3黒色 1／3薄褐色	＋　10
9	土　玉	2.8×2.6×2.7 0.6×0.6 重19g				良 黒褐色及び肌色	＋　8
10	土　玉	3.0×2.6×3.1 0.2×0.2 重　28g				良	＋　8
11	土　玉	2.8×2.6×2.6 0.6×0.6 重　19g				良 橙褐色	＋　20
12	土　玉	3.0×1.8×2.0 0.7×？ 重　5ｇ	3／4欠			良 薄白茶褐色	床　直
13	土　玉	3.1×3.1×2.1 0.7×0.7 重　20g				良 橙褐色	

干ゆるやかである。壁溝は、幅0.20m前後で床面からの深さ0.10mで全周すると考えられるが、中世の堀によって北側が消滅している。柱穴は、４本検出された。Ｐ１は口径が他の Pit に比べると、かなり小さい。深さはそれぞれＰ１－0.37m、Ｐ２－0.31m、Ｐ３－0.76m、Ｐ４－0.70mを測り、東側２本が西側２本の２分の１強の深さである。貯蔵穴は、検出されなかった。

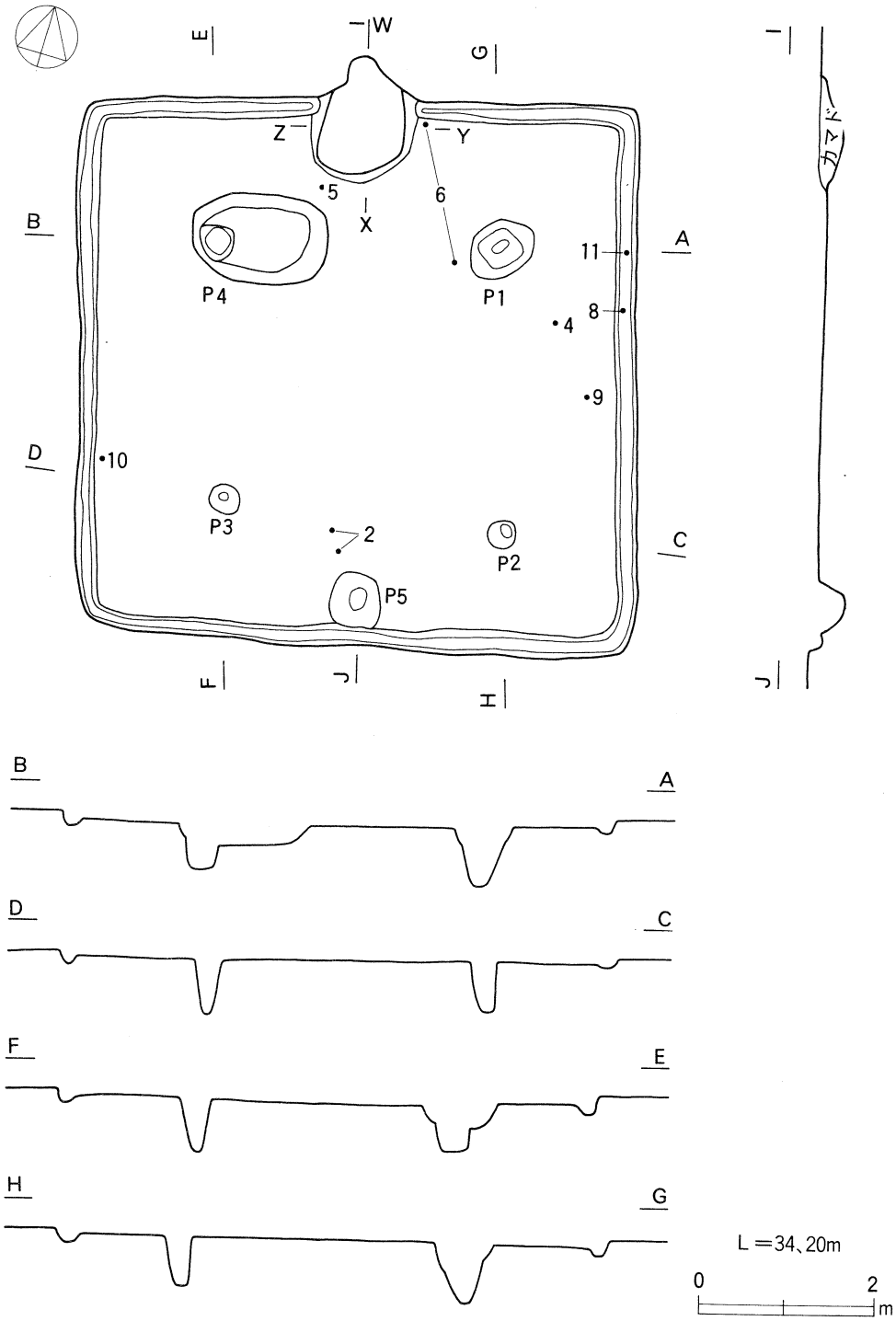
覆土は、暗褐色土と黒色土が主体であるが、かなり攪乱を受けている。

出土遺物は、大半が土師器小破片であり、その多くが覆土中より出土している。さらに南東コーナーの覆土に集中して出土している。また、第26図No１の坩は、床直で検出されているものの破片が５号住、９号住、10号住より出土した接合資料である。

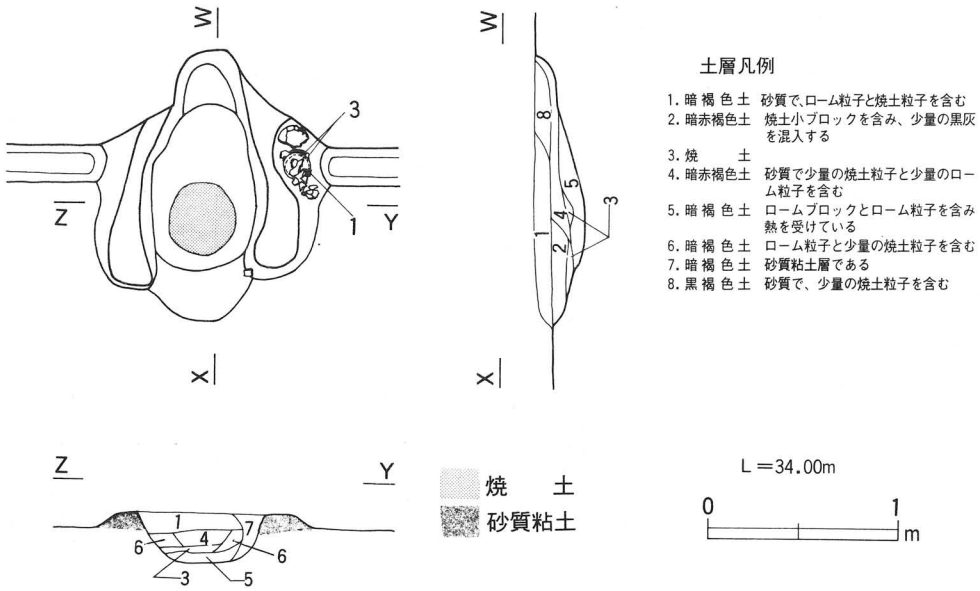
炉址は、攪乱を受けており、かろうじて底部が残存する程度である。

第５号住居址　(第27～29図、第８表、図版11・17)

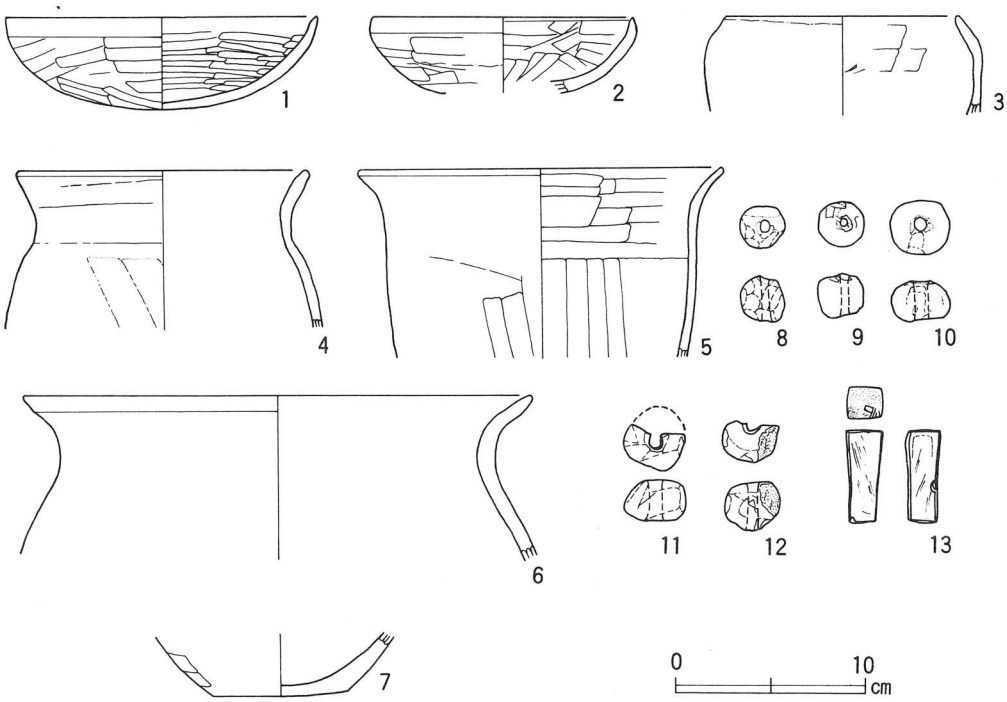
本址は、調査区の北側で、台地の平坦部分で、第４号住居址の東北東に位置している。Ｐ４の地点に、中世の粘土貼り土壙が掘り込まれているため、床面の一部とＰ４の上面が破壊されてい



第27図　第５号住居址実測図



第28図　第５号住居址カマド実測図



第29号　第５号住居址出土遺物実測図

第８表　第５号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	坏	A　16.3 B　　4.9	1／3欠	底部丸底、口唇部が直立状に立ち上がる。	(外)口縁部指ナデ体部ヘラナデ (内)ヘラナデ整形後磨き	密 良 (外)橙褐色 (内)薄こげ茶	
2	坏	A　13.6	3／4欠	底部丸底、口縁部直立する	(外)体部ヘラナデ後、口縁部ユビナデ 黒丹が若干残る (内)ヘラナデ	密 良 (外)薄褐色 (内)暗橙褐色	
3	カ　メ	A　12.0	胴部以下欠	口縁部、直線状に内反する	(外)表面ハクリ激しい (内)ヘラナデ	密 良 (外)白赤褐色 (内)薄茶褐色	残高 5.3
4	カ　メ	A　15.0	口縁部 5／6欠	口縁部が若干厚く外反し口唇部でさらに若干外反する	(外)口縁部、輪積痕残る ユビナデ 胴部縦位のヘラ削り	粗密 良 (外)薄橙褐色 (内)暗橙褐色	残高 8.4 ＋　5
5	コシキ	A　19.0 7／8欠	口縁部	最大径を口縁部に持ち、口縁部が外反する	(外)口縁部指ナデ、粗い、整形、胴部ヘラ削り (内)口唇部ユビナデ 胴部縦位ヘラナデ、口縁部横位ヘラナデ	粗密 良 (外)橙褐色 (内)灰味茶	残高10.0 床　直
6	大ガメ	A　26.6	口縁部 4／5欠	頸部は暖やかな曲線を描き、口縁部外面に小さく段を有す。	(外)頸部～口縁指ナデかなり風化している (内)若干焼けすすけている。	粗 (外)薄橙褐色 (内)黄味灰	
7	カ　メ	C　7.0	底部 1／3欠	底部は平底 体部は内傾	底部と外面にヘラナデ外面は、かなりはく離している	密 良 (外)にぶ赤橙褐色 (内)薄褐色	カマド内
8	土　玉	2.35×2.2×2.5 0.65×0.5 重　11g				粗密 良 橙褐色	床　直
9	土　玉	0.45×0.4 重12g				密 良 薄橙褐色	＋　4
10	土　玉	3.1×2.9×2.2 0.7×0.7 重　19g				密 良 橙褐色	＋　3
11	土　玉	3.25×2.5×2.2 O.8×0.8 重10g	1／2欠			粗密 良 薄赤橙褐色	－　4
12	土　玉	3.0×2.1×2.6 重　12g	1／2欠			粗密 良 暗薄橙褐色	
13	砥　石	1.9×1.7×4.9 重　23g				薄灰黄緑	

る。大きさは、東西径6.23m、南北径6.30m、遺構確認面よりの深さは0.80mを測る。主軸は、N－15°－Wに有し、ほぼ正方形を呈している。床は、貼床で柱穴の内側とカマドの周辺が、よく踏み固められている。壁は、本址の上面の大半を、削平されており不明であるが、若干の残存状況から、ほぼ垂直に掘り込まれているようである。壁溝は、カマド周辺を除き、全周する。柱穴は

5本検出された。床面からの深さは、それぞれ、P1－0.68m、P2－0.55m、P3－0.62m、P4－0.51m、P5－0.34mを測る。主柱穴と考えられるP1～P4までは、均等した深さであるが、P5は主柱穴のP1～P4のほぼ2分の1の深さである。

覆土は、本址の上面がかなり削平されている為に、10cm程しか残存していない。自然堆積の暗褐色土1層である。

出土遺物は、大半が土師器小破片で、カマド周辺と柱穴の外側に集中して出土している。No.1とNo.3及No.7は、カマドの右袖より検出され、No.2、4～6、8～13までは、カメ・坏などでカマド付近に集中し、土玉は柱穴の外側に散在している。(第29図)

カマドは、北壁のほぼ中央に位置する。上面はかなり削平されている。燃焼部は、よく焼けており、カマドのほぼ中央で床面より24cm程度、低い位置に存在する。煙道は主軸方向に、まっすぐに延びている。両袖部は砂質粘土を使用している。右袖の外側付根部分より、No.3とNo.5が出土している。

カマド構築に際して、カマド内面に厚く砂質粘土を貼り付けている。

第6号住居址　(第30・31図、第9表、図版11・17)

本址は、調査区の北側で、第5号住居址のすぐ北側に位置している。本址の北側は、1号堀によって削平され、西壁北側と南壁の一部は攪乱されている。大きさは、東西径3.25m、南北残存径1.92m、遺構確認面より深さ0.10mを測る。主軸は、N－44°－Wに有しほぼ方形を呈すと考えられる。床は、貼床で全体的にしまっている。壁溝は、検出されなかった。壁は、床面付近では緩斜面である。柱穴は、2本検出されたが、本来は4本存在したと考えられる。床面からの深さは、P1・P2共に0.12mで浅い。

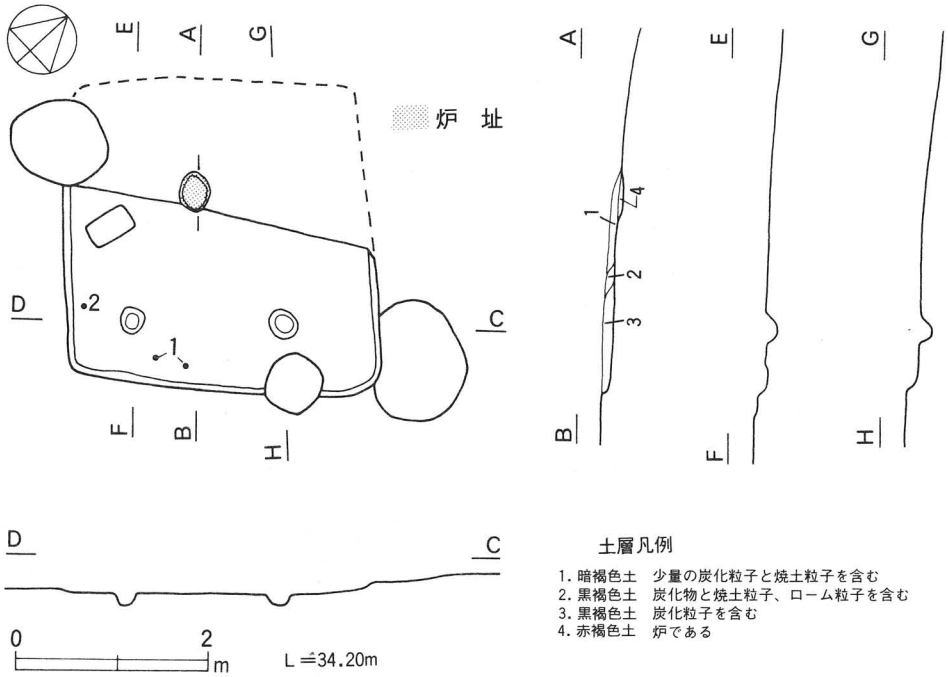
覆土は、南側で10cmを測るが、北側へ進むにつれて減少しなくなるが、暗褐色土と黒褐色土の2層が主体で自然堆積である。

出土遺物は、本址の南側から床面接着でNo.1の甕がほぼ完形で、No.2の鉢形土器が上半1／2で、床面上5cmの所より検出されている。No.3のスラグは、P2北側の攪乱の中より出土している。

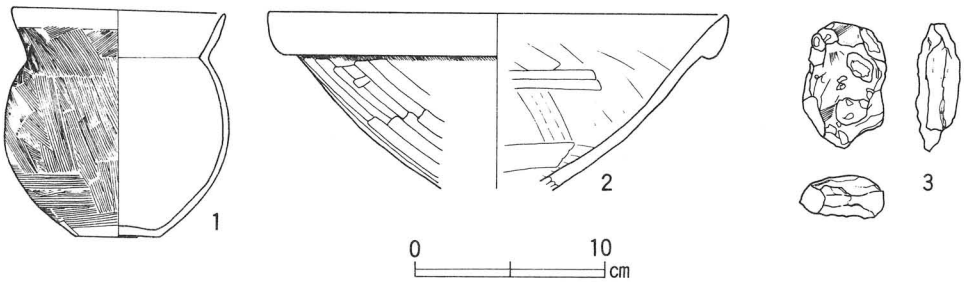
炉址は、床面が残るラインより若干北側で確認された。南北に長い楕円形を呈し、摺鉢状に浅く掘り込まれている。覆土は、赤褐色土1層であるが、あまり焼けていない。

第7号住居址　(第32図、第10表、図版12・17)

本址は、調査区の北側で第1号堀北側コーナー部分の内側に位置しており、上面の殆どを削平



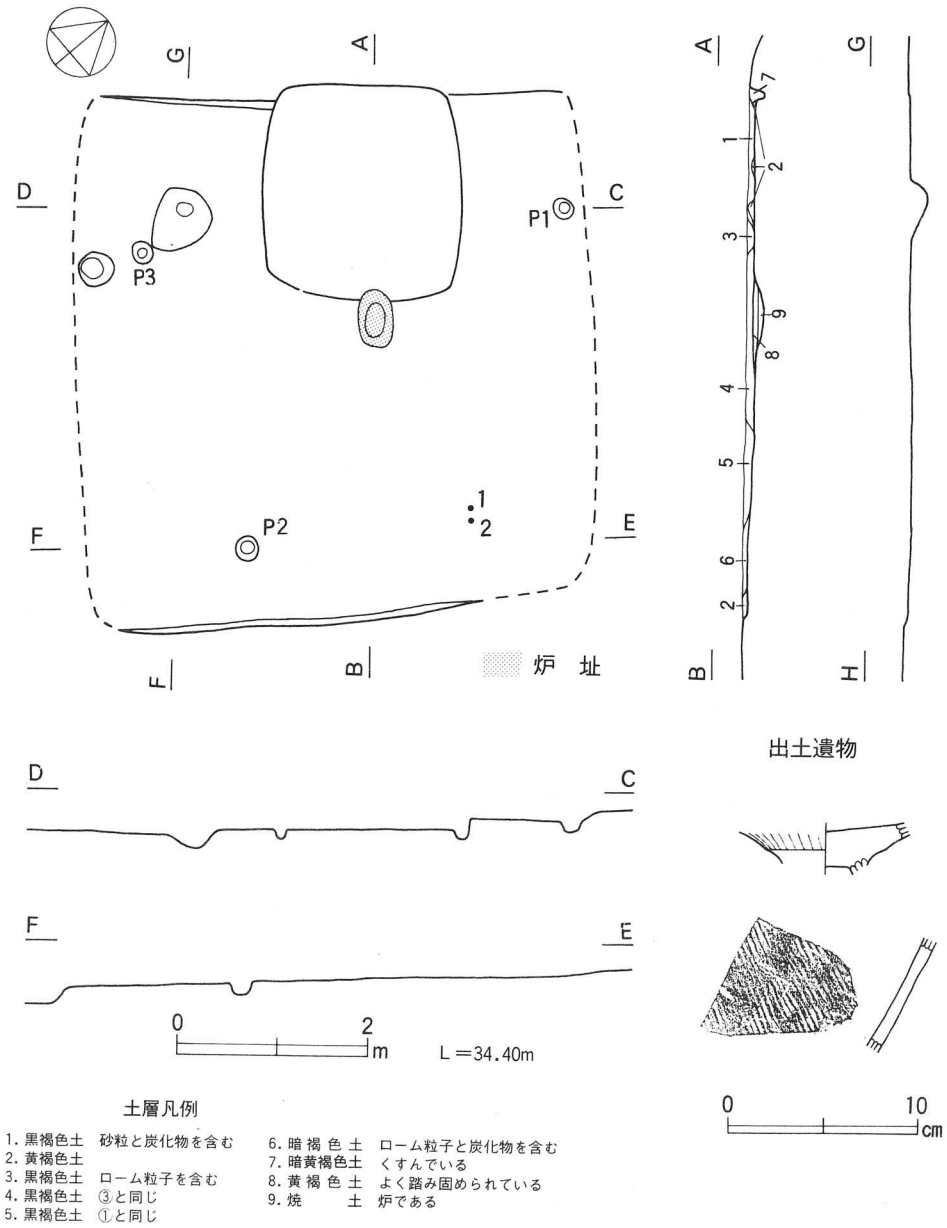
第30図　第６号住居址実測図



第31図　第６号住居址出土遺物実測図

第９表　第６号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	小型甕	A　11.1 B　12.2 C　4.4	口縁部 若干欠	底部が若干の上げ底である。頸部は、くの字を呈し、口縁部は内反ぎみに開く。	(外)刷毛目を施す 口縁部ユビナデ (内)ヘラナデ	粗密 良 (外)薄茶褐色 (内)黒色	床　直
2	鉢　型 コシキ	A　24.0	口縁1／2 胴部7／8 全底部 } 欠	折り返し口縁である。	(外)折返し口縁部の接合をし、刷毛清掃後、体部ヘラ削り。 (内)ヘラナデ調整後、口縁部ユビナデ	粗密 良 (外)薄褐色 (内)赤橙褐色	＋　5
3	鉄　塊	6.7×4.4×2.25 重　95g					床　直



第32図　第７号住居址実測図

され、北壁と南壁の一部分しか残存せず、東壁と西壁は消滅している。また、本址の北側には第14号住居址が掘り込まれている。大きさは、東西推定径5.50m、南北径5.56m、遺構確認面よりの深さ0.10mを測る。主軸は、N－50°－Wに有しほぼ隅丸方形を呈している。床は、軟弱な直床である。壁は、遺構確認面と床面の間に若干の段がつく程度である。壁溝は、検出されなかった。

第10表　第７号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	高　坏		坏底部 以下欠			粗密 良 黒褐色	＋　14 残高2.8
2	須恵器 カ　メ		胴部下半 小破片 (拓本)		(外)タタキ目を施す	密 良 薄青灰色	＋　10

柱穴は３本検出された。床面からの深さは、それぞれＰ１－0.10m、Ｐ２－0.14m、Ｐ３－0.15mで浅く、住居址に伴うかは疑問も残る。

覆土は、最大で10cm程度で、黒褐色土が主体であるが、かなり攪乱されているようである。また、炉址の上面に第14号住居址の貼床があり、炉址の上面部分が踏み固められている。

出土遺物は、少量検出されているが、大半は土師器、須恵器の小破片である。第32図No.１は、高坏坏部片で床面より９cmの所より、同図No.２は須恵器甕片で床面上10cmの所より検出されている。

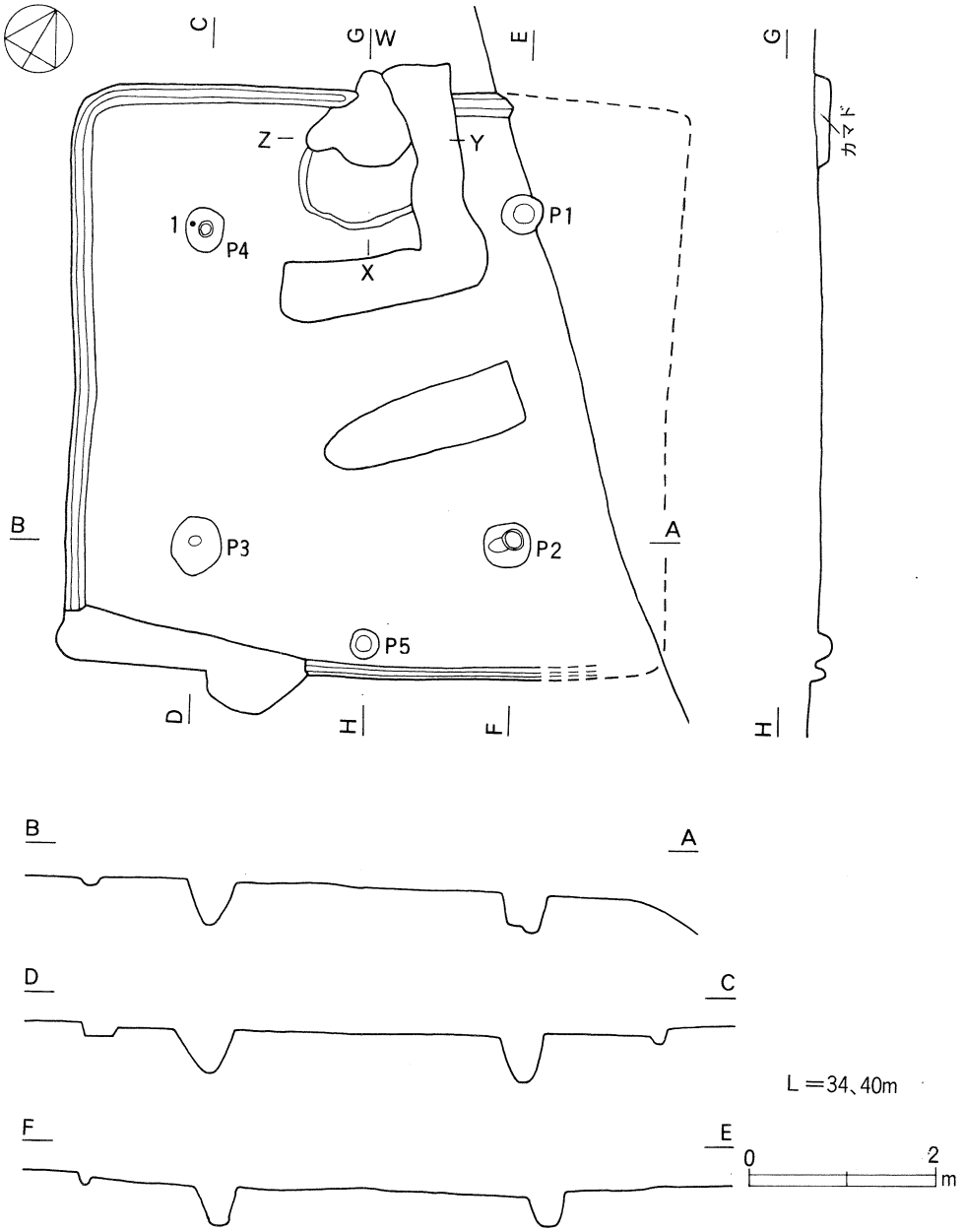
炉址は、住居址のほぼ中央に位置し、南北に長い楕円形を呈す。中心部が浅く掘り込まれ、摺鉢状を呈す。覆土は、上面に第14号住居址の貼床があり、下面は赤褐色土である。炉址は良く焼けており、焼成面のロームが焼土化している。

第８号住居址　(第33～35図、第11表、図版12・17)

本址は、調査区の北側に位置し、第１号堀の北側コーナーが本址の北側に掘り込まれているため、本址の東壁を含む東側が堀によって削平されている。また、カマド周辺と本址の中央部分は攪乱を受けている。東西遺存径約６m、南北径6.30m、遺構確認面よりの深さ約0.10mを測る。主軸は、N－34°－Wに有しほぼ正方形を呈している。床は、貼床であるが軟弱である。壁は、上面がかなり削平されている為に、殆ど残存していない。壁溝は、カマドを除き全周すると考えられる。柱穴は、５本検出された。床面からの深さは、それぞれ、Ｐ１－0.38m、Ｐ２－0.40m、Ｐ３－0.46m、Ｐ４－0.50m、Ｐ５－0.15mを測る。主柱穴と考えられるＰ１～Ｐ４は、ほぼ均衡した深さであるが、Ｐ５は主柱穴の半分以下の浅い深さである。

覆土は、上面の大半が削平されている為に、10cm程度しか残存していない。暗褐色土が主体であるが、攪乱をかなり受けている。

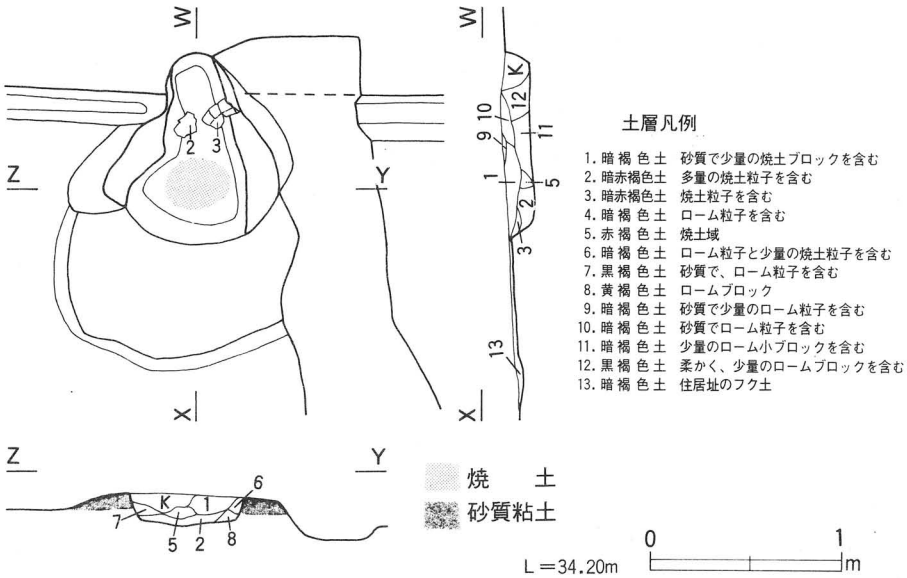
出土遺物は、数点しかなく全て土師器か須恵器の小破片である。第35図No.２とNo.３はカマド内より検出され、No.１とNo.４はＰ３とＰ４の柱穴内より検出されている。第35図No.１と２は、土師



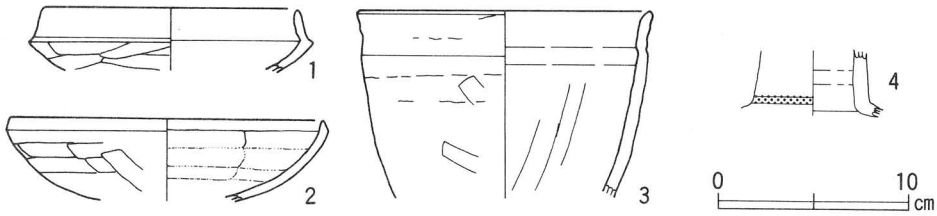
第33図　第８号住居址実測図

器坏であり、同図No.３は土師器甕片であり、同図No.４は須恵器長頸壺である。

カマドは、北壁のほぼ中央に位置する。上面が削平され、カマド右袖の右側は攪乱されている。また、煙道と考えられる地点も攪乱されている。燃焼部は、カマドの南側に位置し、比較的よく



第34図　第８号住居址カマド実測図



第35図　第８号住居址出土遺物実測図

第11表　第８号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　考
1	坏	A　13.2	口縁1／2 体部大半 欠損	中央付近に陵を持つ 口縁は内反する	(外)口縁ユビナデ、 体部ヘラ削り (内)ユビナデ	密 良 黒色(黒彩)	残高　3.3 －　5 (Ｐ４内)
2	坏	A　16.4	口縁～ 体部 4／5欠	口縁部で折れ、 若干内反する	(外)口縁部ユビナデ 体部～底部ヘラ削 (内)ヘラナデ	粗密 良 褐色	残高　4.3
3	カ　メ (コシキ)	A　15.2	口縁～ 胴部 3／4欠	口縁部最も広く、頸部若干くぼむ。胴部～底部へ狭くなる。	(外)口縁部ユビナデ、胴部ヘラナデ、痕輪積痕あり (内)口縁部ユビナデ、胴部ヘラナデ後部分的に縦位のヘラ削り	粗 良 (外)赤橙褐色 (内)橙褐色	残高 10.0
4	長頸壺	頸部 6.0	頸部 4／5欠	頸部は直線的に内傾	ロクロ使用 胴部を作ってから 頸部を作る。	密 良 (外)自然灰釉 (内)白灰色	Ｐ３出土

焼けている。カマドの堀り方は、床面より８㎝程度低く掘り込まれ、構築に際して砂質粘土を貼り付けている。カマドの両袖も、白色の砂質粘土を使用している。

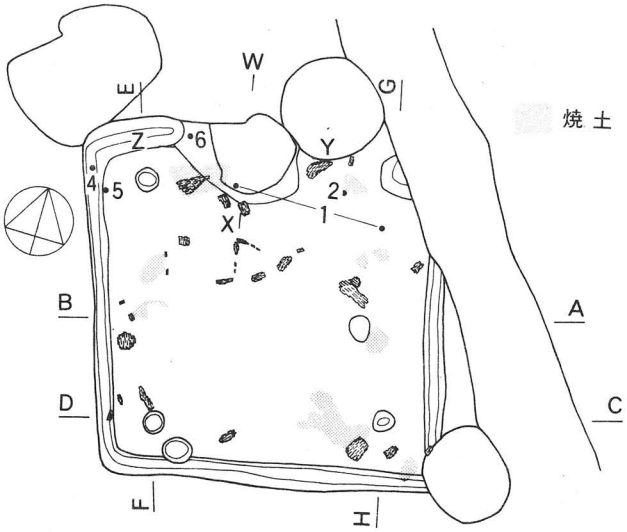
第９号住居址　（第36・37図、第12表、図版12・18）

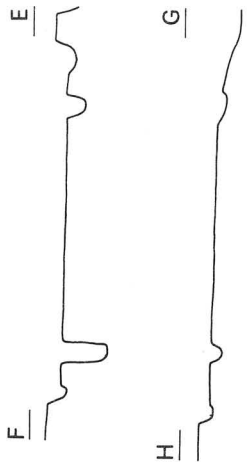
本址は、調査区の中央部より若干南寄りで台地の平坦部に位置し、北東コーナー部分を耕作溝によって破壊されている。また、北壁の東側と南東コーナーを芋穴状土壙に攪乱されており、北西コーナーの一部も第５号土壙に削平されている。大きさは、東西径3.70m、南北径3.80m、遺構確認面よりの深さ0.15m強を測る。主軸は、N－20°－Wに有し、ほぼ正方形を呈す。床は、硬質な貼床で、特にカマド周辺と柱穴の内側が硬い。壁溝は、幅24㎝、床面よりの深さ８㎝を測り全周する。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴は、４本検出され、それぞれＰ１－0.07m、Ｐ２－0.13m、Ｐ３－0.48m、Ｐ４－0.21mを測る。柱穴の間隔が広く、４本とも住居址のコーナーに近い位置に掘り込まれている。

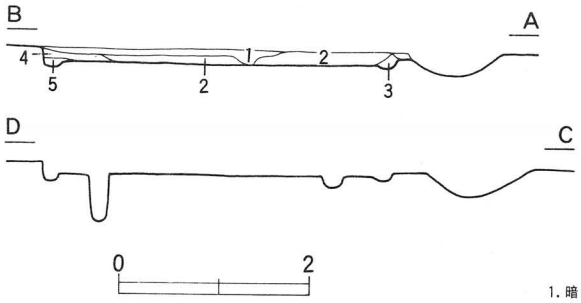
覆土は、暗褐色土の２層が主体で、下層は炭化材、炭化粒子、焼土粒子を多量に含んでおり、焼失住居址の痕跡を示している。上層は人為堆積で、ローム粒子とロームブロックを含んでいる。また、カマドが壊れた際に、西側に崩れたようで、カマドの西側広範にカマド構築材の砂質粘土が検出された。

出土遺物は、土師器と須恵器の小破片が大半である。遺物は、住居址の全域から検出されているが、実測可能な遺物はカマド周辺及び住居址の北側半分より検出された程度である。第37図１は、須恵器坏片で接合資料で床面上１㎝より、同図№２は須恵器坏片で床面上３㎝より、同図３は土師器甕底部片でカマド内より、同図４は土師器椀で周溝内で床面と同レベルより、同図５は土師器甕片で床面上３㎝より、同図６は土玉で床面より、各々検出されている。これらの遺物は、その出土レベルから本址に結び付く遺物と考えられる。また、炭化材と焼土域が、壁付近とカマド周辺から多量に出土している。

カマドは、北壁の中央より若干西側の位置に構築されている。大部分攪乱を受けている。袖部は、両袖とも壁からカマドの中間地点までしか遺存しない。燃焼部は、カマドのほぼ中央に位置するが若干を残す程度である。また、西側に崩れ込んでおり、カマドの西側に赤褐色の砂質粘土が広がっている。遺物は、カマドが西側に崩れ込んでいる為に、カマド内よりも西側の崩れ込んだ部分から多量に出土している。大半は、小破片でカマド内から出土した№３のみが実測可能である。

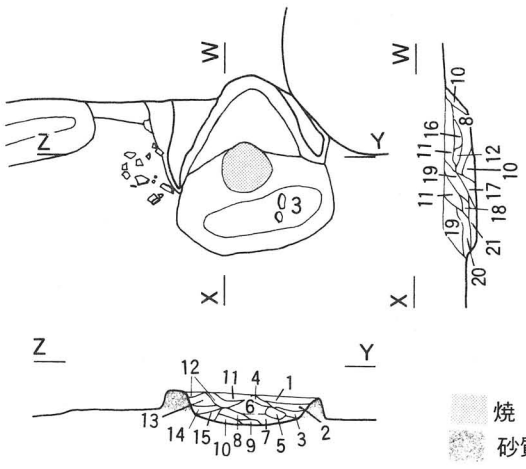






土層凡例

1. 暗褐色土　ローム粒子とロームブロックを含む
2. 暗褐色土　炭化粒子と少量の焼土粒子を含む
3. 暗黄褐色土
4. 暗褐色土　ローム粒子と少量の焼土粒子を含む
5. 暗褐色土　ローム粒子と炭化粒子、焼土粒子を含む



カマド土層凡例

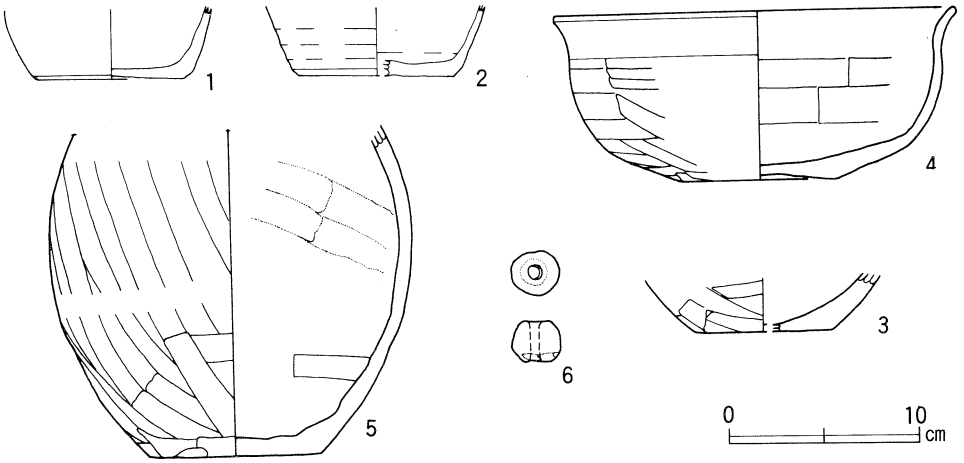
1. 暗褐色土　砂質で焼土粒を少量含む(袖の残骸)
2. 暗褐色土　砂質で炭化物を含む
3. 黒褐色土　多量の焼土粒子と炭化物を含む
4. 黒褐色土　焼土粒子と炭化粒子、灰を含む
5. 黄褐色土　ロームブロック
6. 暗赤褐色土　焼土粒子と焼土ブロック、ロームブロックを含む
7. 灰褐色土　多量の灰を含む
8. 灰褐色土　灰と焼土粒子を含む
9. 焼　　土
10. 黄褐色土　熱を受けている
11. 暗赤褐色土　多量の焼土粒子を含む
12. 暗褐色土　褐色砂質粘土と灰が混じりあった層である
13. 暗赤褐色土　砂質である
14. ⑦と同じ
15. 暗褐色土　多量の焼土粒子と炭化粒子、灰を含む
16. 暗褐色土　砂質で焼土ブロックを含む
17. 灰褐色土　ごく少量の焼土粒子を含む
18. 暗赤褐色土　ローム粒子と焼土粒子を含む
19. 暗褐色土　焼土粒子を含む
20. 暗灰褐色土　黒灰とローム粒子、炭化物を含む
21. 黒灰褐色土　灰層である

焼　土
砂質粘土

L＝34.10m

0　1 m

第36図　第9号住居址実測図



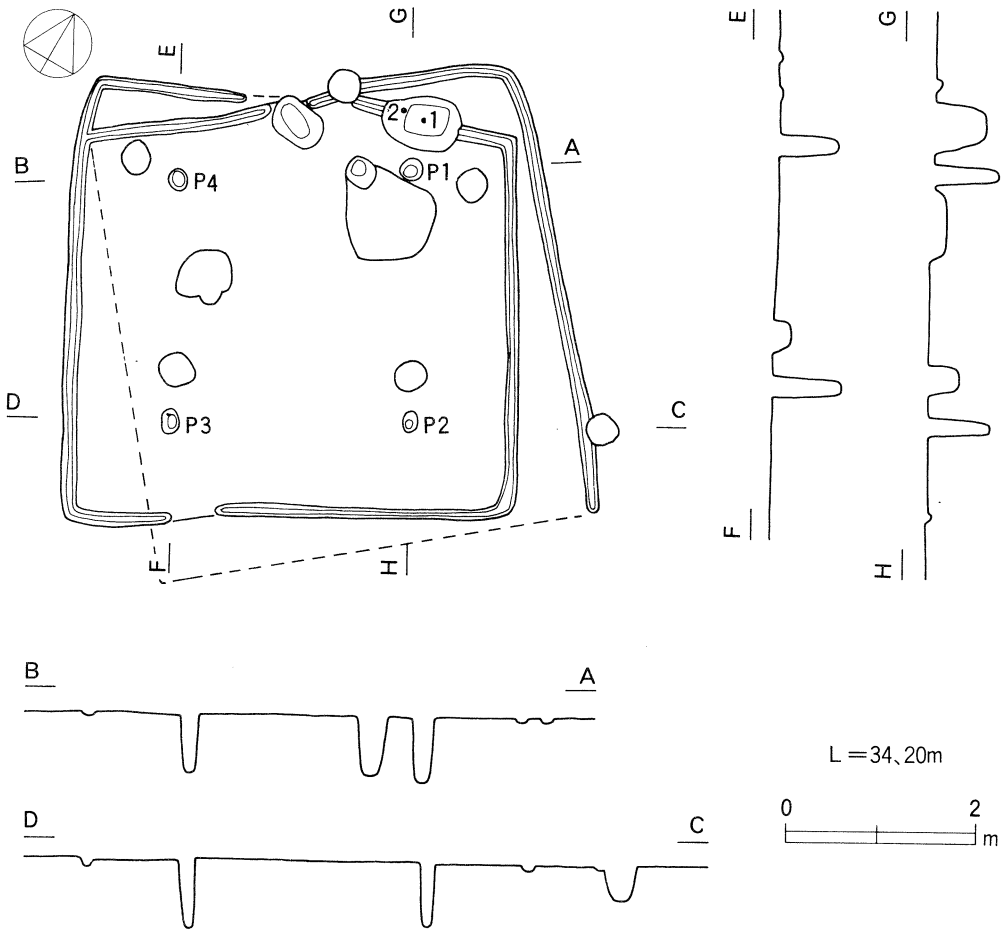
第37図　第９号住居址出土遺物実測図

第12表　第９号住居址出土遺物一覧表

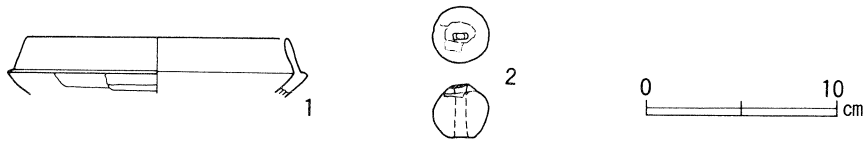
挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　考
1	須恵器 坏	C　7.4	口縁部 1／3欠	急角度で立ち上がる	ロクロ使用 底部切り離し後、同一方向にヘラナデ、体部最下半をヘラナデ	密 良 (外)薄灰緑色 (内)薄白茶褐色	残高　3.7 ＋　1
2	須恵器 坏	C　7.8	2／3欠	急角度で立ち上がる	ロクロ使用 底部回転糸切り後、ヘラナデ。 体部最下半にヘラナデ	密 不良（軟質） 薄緑灰	残高 3.7 ＋　3
3	カ　メ (底部)	C　7.2	底部 3／5欠		(外)ヘラ削り (底)ヘラ削り	密 良 薄茶褐色	
4	碗	A　20.8 B　9.0 C　7.8	口縁部～ 体部 を5／6欠	底部が若干上げ底で、胴部まで丸くふくらみ、頸部が若干縮まり、口縁部で外反する。	(外)体部ヘラナデ後、口縁部ユビナデ (内)体部横位ヘラナデ、口縁部ユビナデ (底)中心より時計回りにヘラナデ	粗密 良 (外)黒褐色 (内)暗赤橙褐色	床　直
5	カ　メ	C　9.0	胴部3／4 底部2／3 欠	平底 体部は内傾	体部はヘラ削り 後ヘラナデ	密 良 (外)薄赤橙褐色 (内)黒黄色	最大径 19.0 残高 17.3 ＋　3
6	土　玉	2.6×2.3×2.15 重　43g				粗 不良 薄橙褐色	床　直

第10号住居址　（第38・39図、第13表、図版13・18）

本址は、調査区の東南側で台地の南端に近い所に位置している。貯蔵穴を持つ住居址（A）と、貯蔵穴を持たない住居址（B）の２軒の重複と考えられる。大きさは、東西径約4.80m、南北径



第38図　第10号住居址実測図



第39図　第10号住居址出土遺物実測図

約4.80mで2軒ともほぼ同じ大きさで正方形を呈す。主軸は、（A）はN－40°－W、（B）はN－27°－Wを示す。床は、2軒とも貼床で固くしまっているが、住居址の南側は、中世の城郭時代にさらに踏み固められている。壁溝は、幅約12cmで浅い掘り込みである。（A）は、東壁溝と北壁溝は検出されたが、南側と西側は不明である。（B）は、南壁溝の一部と北壁のカマドの付近で消滅するが、ほぼ全周する。壁は、住居址の確認面で床面が露呈している為に、形態は不明で

第13表　第10号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	坏	A　13.6		中段に陵を有し、口縁部は直線的に内反する	体部ヘラ削り	粗密 良 黒褐色	(貯蔵穴内) －　18
2	土　玉	3.0×2.9×2.9 0.35×0.8 重　20g				密 良 薄橙褐色	(貯蔵穴内) －　17

ある。柱穴は、(A) は不明である。(B) は、P 1 －0.68m、P 2 －0.66m、P 3 －0.72m、P 4 －0.62mを測る。4本とも細く深い掘り込みである。貯蔵穴は、Aに遺存し、東西に長い不正長方形を呈し、床面からの深さは、54cmを計り、床は、中心よりも周りが若干低くなる。床の一部が円状に固くしまっているが、中世の掘立柱等によるものと考えられる。

出土遺物は、貯蔵穴から2点出土しており、No.1の坏は、貯蔵穴のほぼ中心で覆土中から出土している。No.2の土玉は、貯蔵穴の壁に接して出土している。

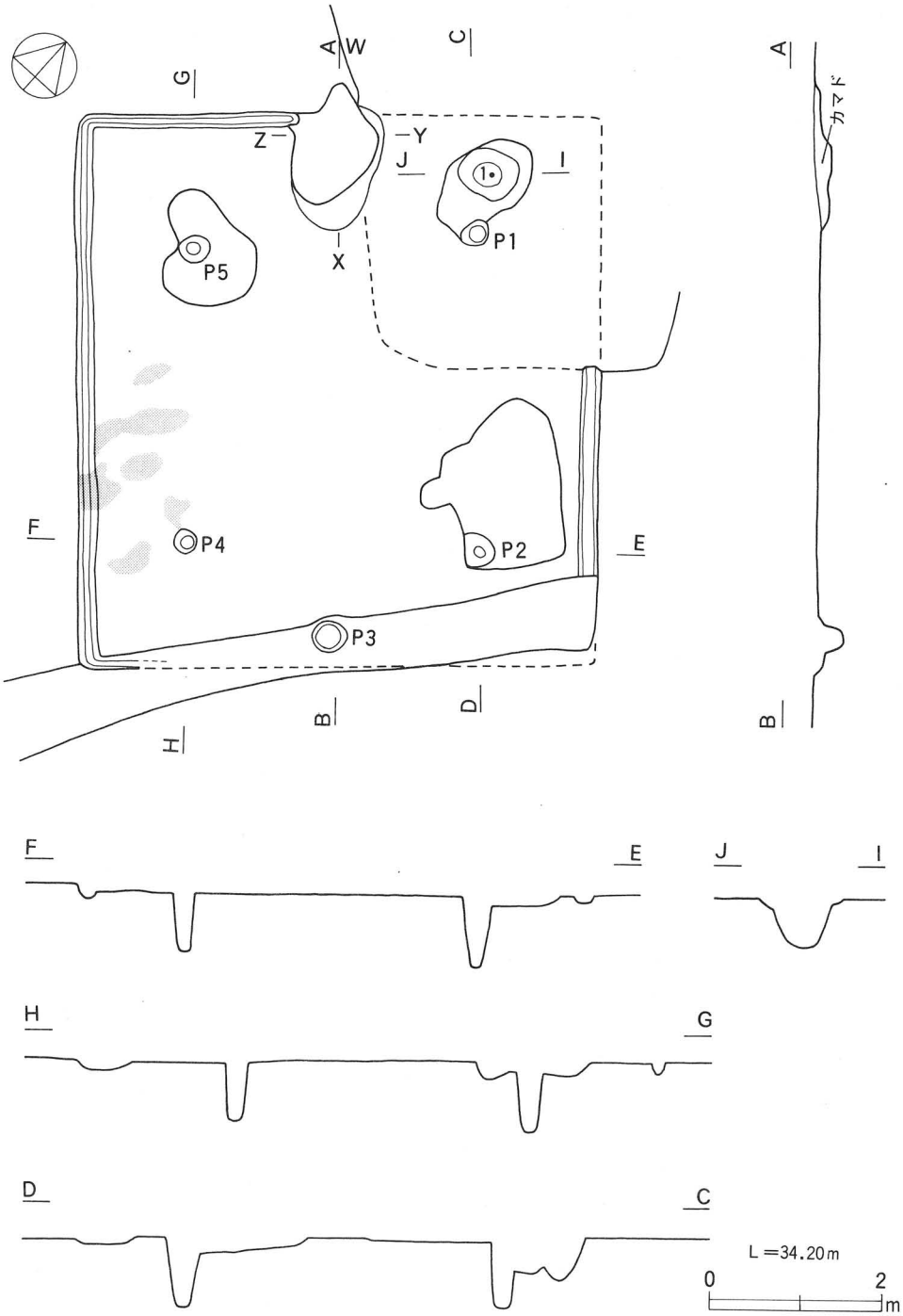
カマドは、北壁のほぼ中心に位置する。上面が削平されている為に、燃焼部のみが遺存し、燃焼部は北壁の内側に作られている。真北に対して東西に長い楕円形である。覆土は、赤褐色土であるが、あまり焼けていない。

第11号住居址　(第40・41図、第14表、図版13・18)

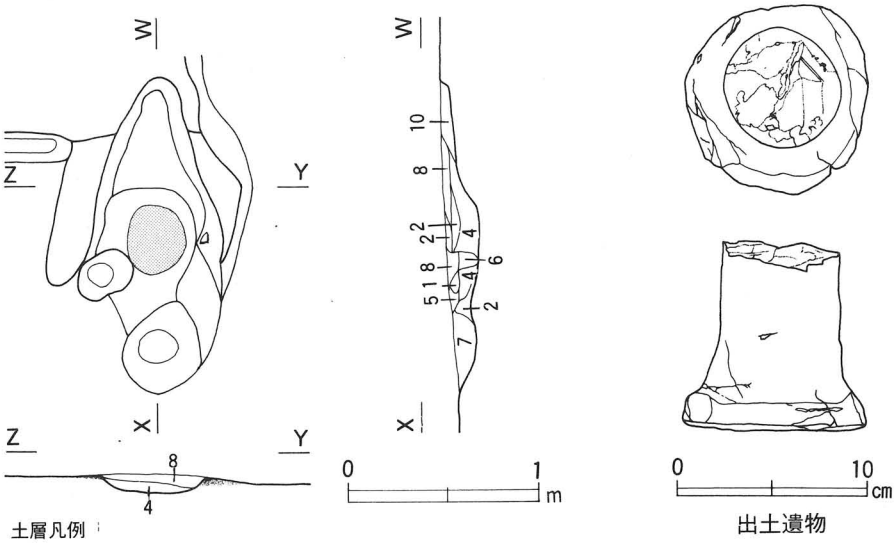
本址は、調査区の東側に位置し、第10号住居址の東隣りに位置し、住居址の北東部4分の1を第12号住居址と耕作溝によって削平され、南壁のほぼ全てを時期不明の溝によって破壊されている。更に、中世の掘立柱建物址により、部分的に床面を破壊されている。大きさは、東西径6.05m、南北径6.50m、遺構確認面で床面が部分的に露呈する。主軸をN－37°－Wに有し、南北に若干長い方形を呈している。床は、貼床であるが比較的軟弱である。壁溝は、幅24cm、深さ10～14cmを計測する。壁は、床面より上が削平されている為に不明である。柱穴は5本検出され、それぞれP 1 －0.77m、P 2 －0.83m、P 3 －0.68m、P 4 －0.69m、P 5 －0.21mを計る。P 1 ～P 4が主柱穴で細く深い。P 5は溝内から検出された為に、若干浅くなっているが、主柱穴の2分の1以下の深さで、主柱穴よりも径は若干大きい。貯蔵穴は、カマドの右側に位置しており、東西に若干長い楕円形を呈し、床面からの深さ60cmを計測する。

覆土は、若干残る部分で暗褐色土1層である。また、P 3付近の西壁寄りに薄い焼土域が数ヶ所散在している。

出土遺物は、土師器・須恵器の小破片が点在するのみで、実測可能な遺物は、貯蔵穴から出土



第40図　第11号住居址実測図



1. 焼　土
2. 赤褐色土　焼土ブロクト焼土粒子を含む
3. 暗褐色土　黒灰とローム粒子、焼土ブロックを含む
4. 暗褐色土　砂質で少量の焼土粒子を含む
5. 暗褐色土　砂質で焼土粒子と少量ローム粒子を含む
6. 暗褐色土　焼土小ブロックを含む
7. 暗褐色土　ローム粒子を含む
8. 暗褐色土　焼土ブロックとローム粒子を含む
9. 暗褐色土　砂質で、少量の焼土粒子を含み、くすんでいる
10. 暗褐色土　砂粒と少量の焼土粒子を含む

第41図　第11号住居址カマド及出土遺物実測図

第14表　第11号住居址出土遺物一覧表

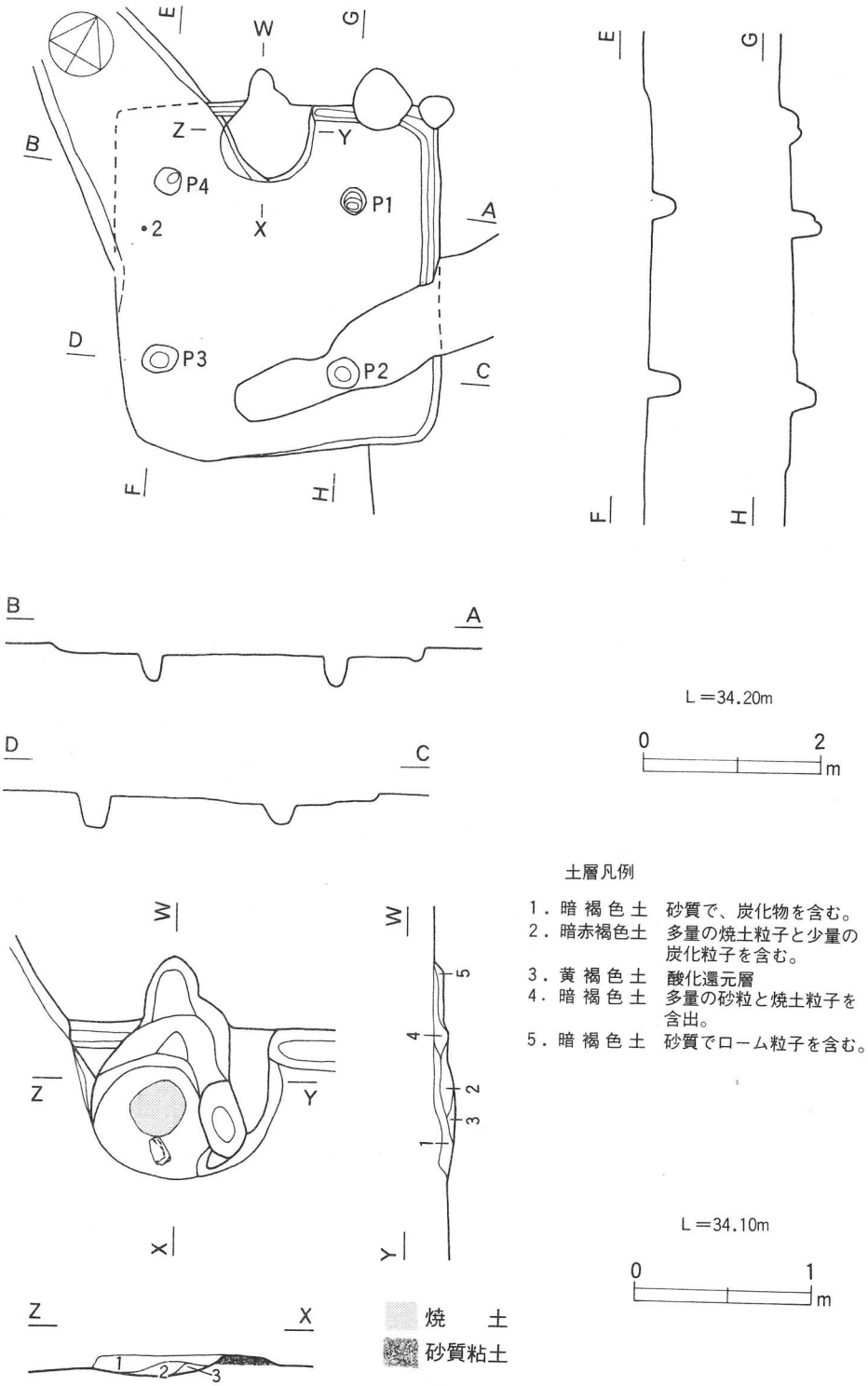
挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　考
1	土製支脚	C　9.5	上部欠			粗 良 薄にぶ赤橙褐色	(貯蔵穴内) －　36

した土製支脚一点のみである。

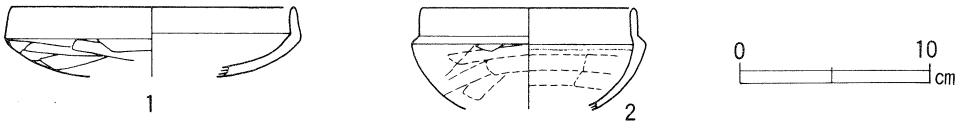
カマドは、北壁のほぼ中央に構築されている。上面の大半を削平されている。燃焼部は、カマドの中央に位置し、赤褐色を呈している。袖部は、右袖の外側を耕作溝に削られているが、基礎部の砂質粘土を若干残している。

第12号住居址　(第42・43図、第15表、図版13・18)

本址は、調査区の東側に位置し、第11号住居址を削平して作られている。中世城址と耕作によって上面の殆どが削平されている為に、第11号住居址と切り合っている西側部分のプランが、はっ



第42図　第12号住居址実測図



第43図　第12号住居址出土遺物実測図

第15表　第12号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　考
1	坏	A　14.7	上半 1／2欠	陵を持たず、器高の中位より内反し、ほぼ直線的に立ち上がる。	(外)体部ヘラ削り後ヘラナデし、口縁にナデ (内)体部に縦位の磨きを施す。かなり磨耗している。 口縁部ユビナデ	密 良 (外)赤橙褐色彩 (内)薄黄茶	床　直
2	坏	A　11.0	9／10欠	下から約2／3で、深く陵を有し、口縁部は直立する。	(外)体部ヘラ削り後口縁部にナデを施す。 (内)体部ヘラナデ	密 良 (外)濃こげ茶 (内)黒彩	最大径 12.3 残　高 5.4 床　直

きりとは確認できなかった。また耕作溝によって、カマドの西側を破壊されている。大きさは、東西推定径3.60m、南北径3.80m、遺構確認面からの深さ12cmである。主軸はN－32°－Wに有し、南北に若干長いが、ほぼ正方形を呈すと考えられる。床は、貼床であるが比較的軟弱である。壁溝は、幅20cm、床面からの深さ4～8cmを計測し、北壁と東壁の北側で検出されたが、東壁の南側から南壁にかけては検出されなかった。壁の形状は、上面の大半が削平されている為に不明である。柱穴は、4本検出され、それぞれ、P1－0.34m、P2－0.28m、P3－0.35m、P4－0.27m、を計測する。4本ともさほど深く掘り込まれていない。

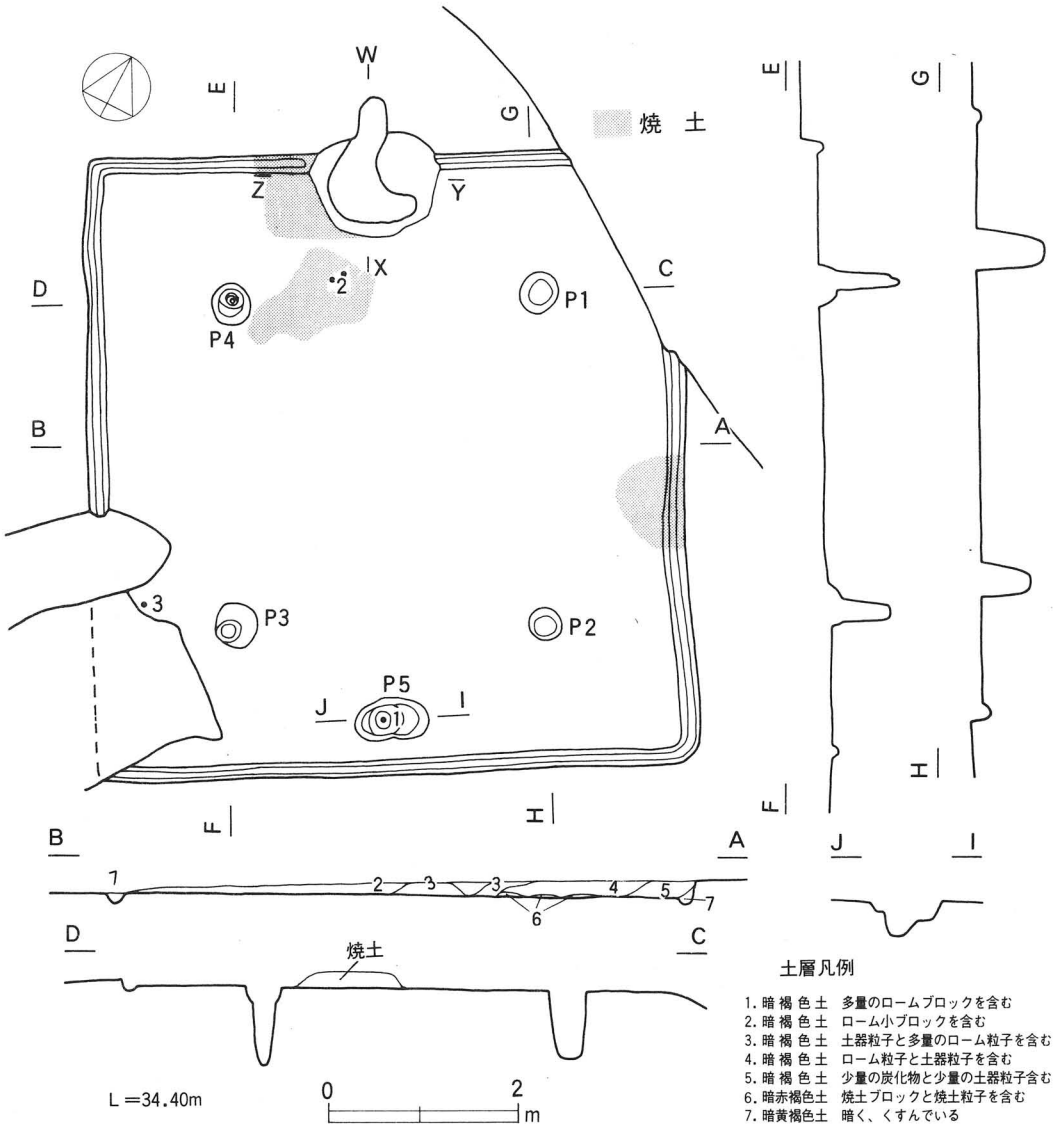
覆土は、暗褐色土1層で薄く残っていた。

出土遺物は、数点出土するが、土師器と須恵器の小破片のみである。No.1は、土師器坏でカマド内より検出され、No.2は、土師器坏で床直である。また、カマド内の手前から土製支脚が出土したが、非常にもろく、実測不可能であった。(第43図)

カマドは、北壁のほぼ中央に構築されている。燃焼部が手前にあり、壁のラインに中段があり、壁の外側に煙道を有す。燃焼部は、よく焼けている。西側袖部は、耕作溝に完全に削平されている。東側袖部にも、燃焼部と並ぶ位置に中世の柱穴が掘り込まれている。

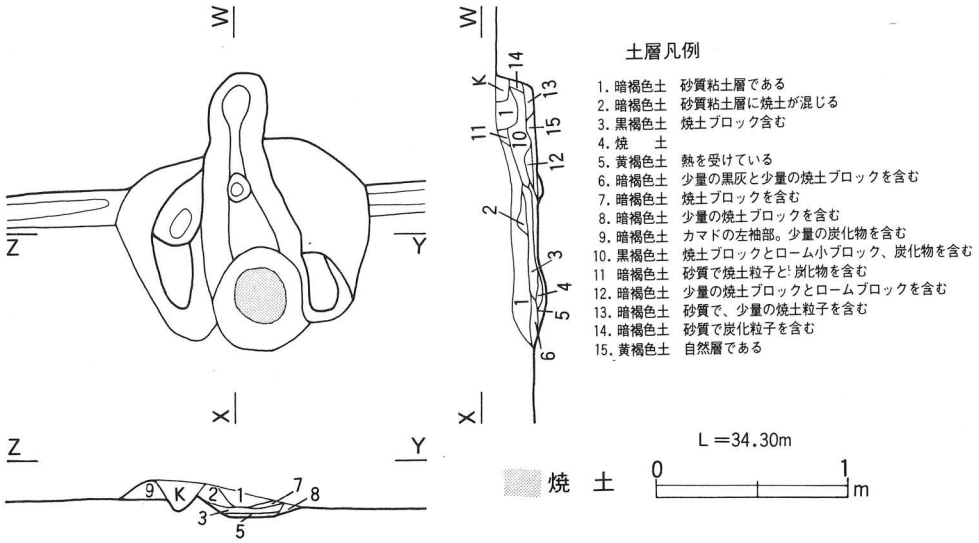
第13号住居址　(第44～46図、第16表、図版13)

本址は、調査区の最も東に位置する住居址である。北東コーナー部分を含む北壁と東壁の一部を1号堀によって削平されている。また、南西コーナーを含む西壁の一部に、攪乱を受けている。

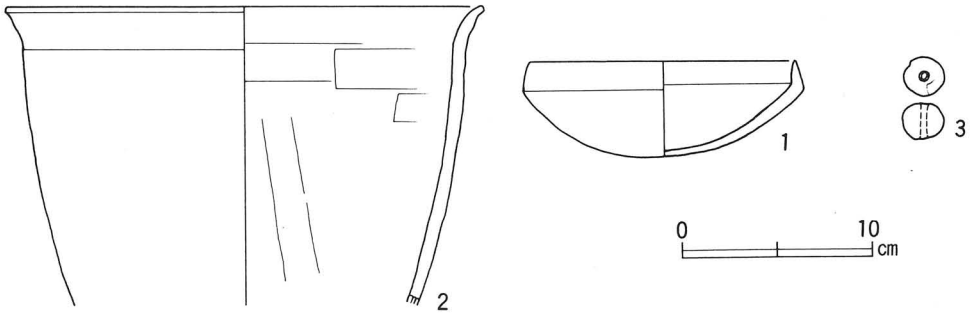


第44図　第13号住居址実測図

大きさは、東西径6.32m、南北径6.48m、遺構確認面よりの深さは、東側で26㎝、西側で５㎝程度を計る。主軸は、N－29°－Wに有し、南北に若干長いほぼ正方形を呈している。床は、貼床で堅持である。壁溝は、幅20㎝、床面からの深さ８㎝で、カマドを除きほぼ全周すると考えられる。壁は、急傾斜で掘り込まれている。柱穴は、５本検出された。床面からの深さはそれぞれ、Ｐ１－0.70m、Ｐ２－0.50m、Ｐ３－0.60m、Ｐ４－0.80m、Ｐ５－0.37mを計る。Ｐ１とＰ４の北側２本が、Ｐ２、Ｐ３よりも深く掘り込まれている。Ｐ３とＰ４は、掘り方が上方では広いが、下方では狭くなる。Ｐ５、柱穴部分は円形であるが、掘り方は東西に長く浅い楕円形で、柱穴の部分



第45図　第13号住居址カマド実測図



第46図　第13号住居址出土遺物実測図

第16表　第13号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	坏	A　13.9 B　5.1	口縁部 若干欠	下から2／3位で口縁部が直線的に内反する	(外)体部ヘラ削り、口縁部ユビナデ (内)底部周辺ヘラナデ　体部～口縁部ユビナデ	密 良 黒色、橙褐色	P 5内 －　1
2	コシキ	A　24.8		下方から上方にかけて広がり、口縁部で外反する。 口縁部で最大径を持つ。	(外)口縁的ユビナデ、胴部ヘラ削り (内)胴部縦位口縁周辺ヘラナデ 口縁部ユビナデ	粗密 良 (外)赤橙褐色 (内)白茶色	残高15.95cm ＋　13
3	土　玉	2.1×2.1×1.9 0.5×0.55 重　10g				粗密 良 黒	床　直

のみが15㎝程度深く掘り込まれている。

覆土は、暗褐色土を主体とし、人為堆積を示す。東側が最大で26㎝を計るが、西へ進むにつれて堆積は減少する。東側からの流れ込みを示し、床面に近い地点で焼土域を確認した。また、東壁に隣接して、覆土上層に廃棄によると考えられる焼土域を確認した。

出土遺物は、Ｐ５内より出土した坏（第46図１）がほぼ完形で出土した以外は、土師器、須恵器の小破片である。また、カマドが南西部に崩れ込んでおり、この部分から土師器、須恵器破片が多量に検出されている。

カマドは、北壁の中心に構築されており、南西方向に崩れ込んでいる。また、カマドの東側は攪乱され、西袖の根元の部分に柱穴が掘り込まれている。燃焼部は、よく焼けており、最も低く手前に作られている。煙道部は、平坦に北へ延び中間部が狭くなる。中間に小さなくぼみを有す。

第14号住居址　（第47図、図版13）

本址は、第７号住居址内の北側に掘り込まれた小竪穴住居址である。東西径2.10m、南北径2.30m遺構確認面よりの深さ0.10mを測る。主軸は、N－49°－Wに有し、南北に若干長い隅丸方形を呈している。床は、貼床で堅持である。特に南壁壁溝の切れる地点が非常に硬い。壁溝は、入り口と考えられる南壁の中央で消滅するが、幅17㎝、床面からの深さ10㎝で、その他を全周する。壁は、東壁と北壁で若干残り、東壁はほぼ垂直に掘り込まれ、北壁は急傾斜で掘り込まれている。柱穴は、１本検出された。東壁の中心に片寄っている。床面からの深さは34㎝を計る。

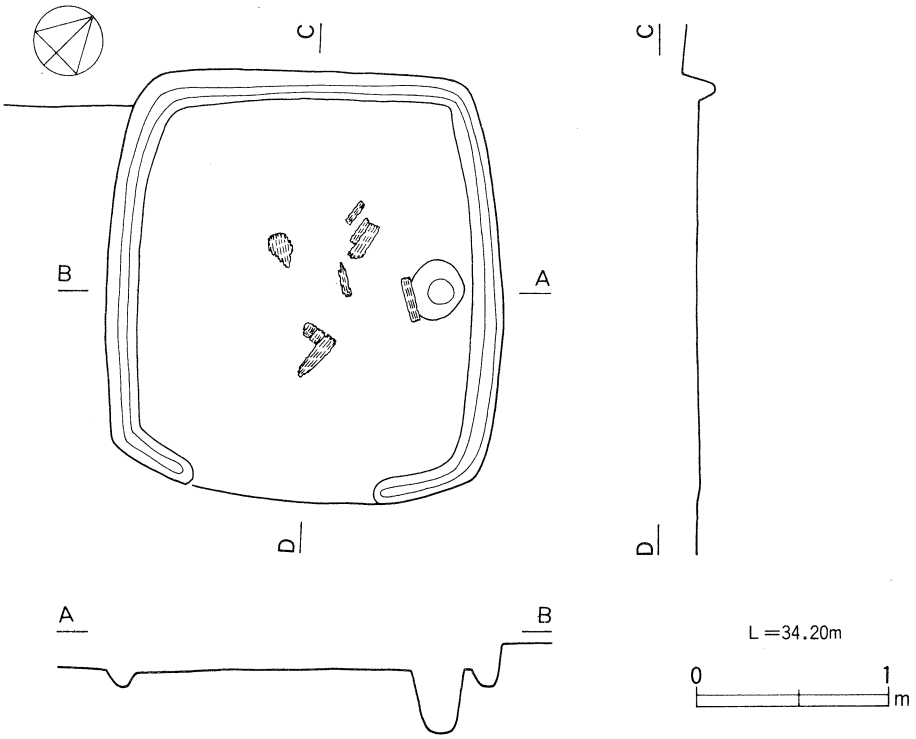
覆土は、黒褐色土１層を主体とし、壁付近は、暗褐色土が堆積する。

出土遺物は、床面の中央に炭化材が散っている他は、土師器、須恵器の小破片が出土したのみで、実測できるものは全くなかった。

第15号住居址　（第48図、第17表、図版13）

本址は、調査区の南側に位置し、床面も削平されている為に、４本の柱穴とカマドの燃焼部の最下面の一部が遺存するのみである。柱穴の間隙は、それぞれ約1.30mである。それぞれの深さは、遺構確認面よりＰ１－0.14m、Ｐ２－0.26m、Ｐ３－0.15m、Ｐ４－0.25mである。Ｐ１とＰ３が、Ｐ２とＰ４より浅く掘り込まれている。

出土遺物は、Ｐ２とＰ４の浅い柱穴内より出土している。



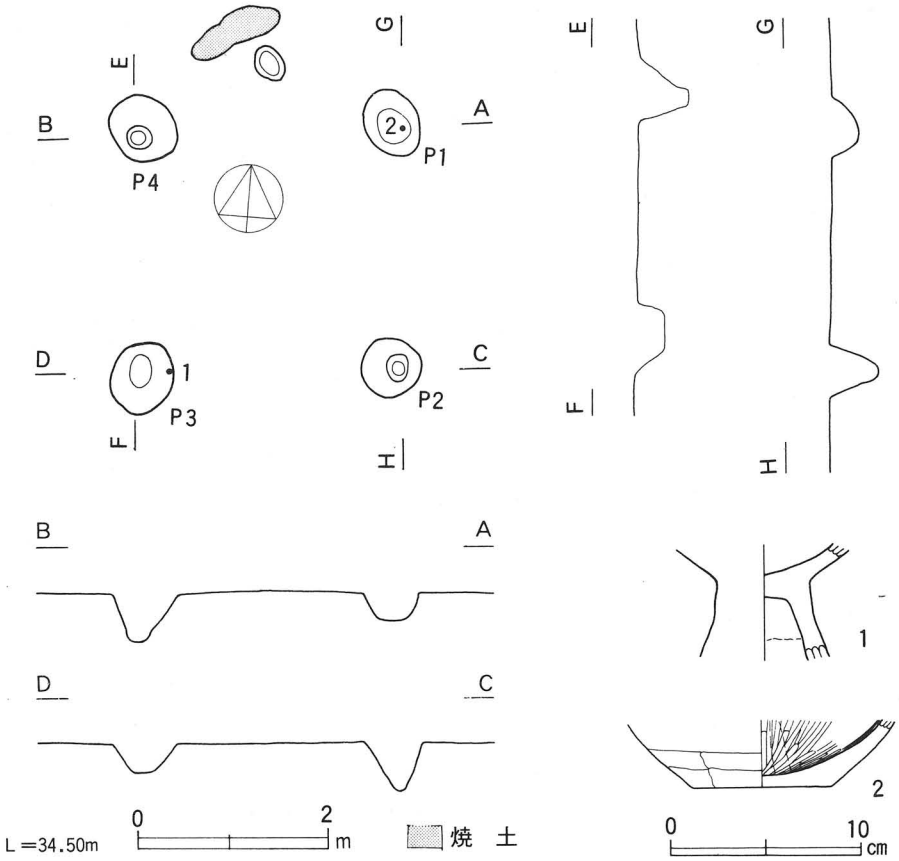
第47図　第14号住居址実測図

2）土　壙

第11号土壙と第13号土壙の２基が検出されたのみである。

第６号土壙　（第49・50図、第18表、図版14）

本址は、調査区の北側に位置し、第６号住居址の東に隣接する。確認面から浅い地点に中段を有し、東側部分が柱穴状に深く掘り込まれているが対比する他の柱穴が検出されなかった為、一応土壙として捉えた。大きさは、上面で長径0.91m、短径0.52m、中段までの深さ0.07mを計り、主軸はN－27.5°－Eに有し、東西に長い楕円形を呈すが、中段から深く掘り込まれている柱穴状部分の平面形は、長径0.53m、短径0.44m、上面からの深さ0.59mを計り、主軸をN－27.5°－Wに有し、南北に長い楕円形を呈す。底面は、径0.17mのほぼ円形を呈し、中心より北側に位置する。立ち上がりはほぼ垂直で、中間点位から開きながら掘り込まれている。



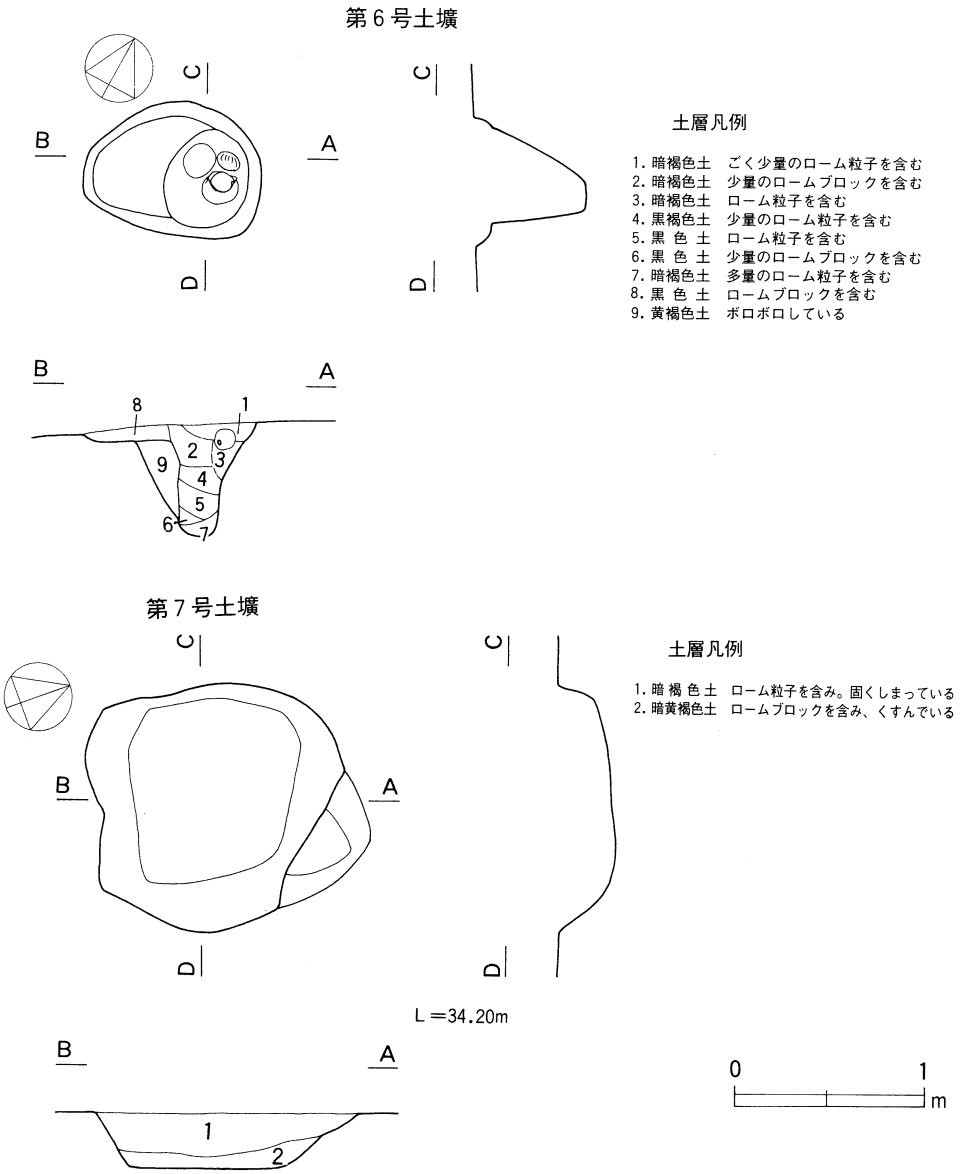
第48図　第15号住居址実測図

第17表　第15号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	高　坏	坏部 C　4.8	坏・脚部 欠損			(外)にぶ赤橙褐色 (内)黒色	
2	カ　メ	C　8.4	底部 1／4欠		(外)胴部ヘラナデ、底部磨き (内)ヘラナデ後、磨き	密 良 (外)薄茶褐色 (内)にぶ橙	

覆土は、上層を暗褐色土、下層を黒色土が堆積し、第９層は、ロームブロックを人為的に埋めた層である。

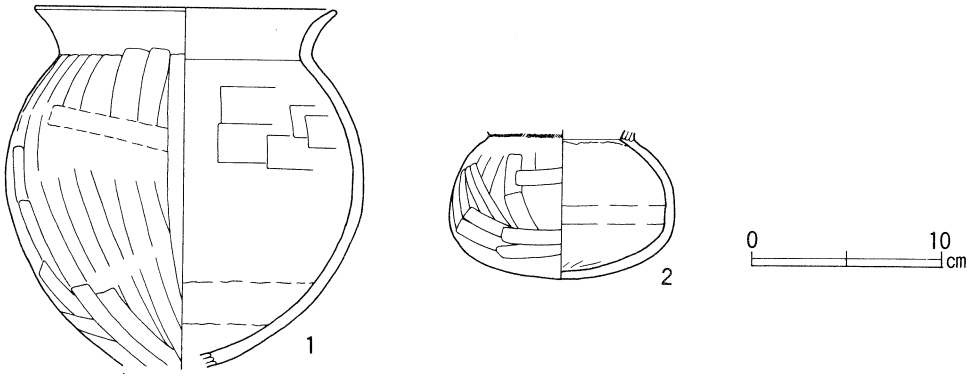
出土遺物は、甕と坩の下半が、それぞれほぼ完形で出土した。２点とも上層から出土しており甕は、若干北側を向いていたがほぼ正位であった。坩は、底部が南を向く横位で出土した。



第49図　土壙実測図 3

第7号土壙　（第49図、図版14）

本址は、調査区の南側に位置し、第10号住居址の南東コーナー東側に隣接している。中世城址の虎口付近である為上面及び周辺が固く踏みしめられている。北側には、小さな三角形状の中段を有す。大きさは長径1.39m、短径1.30m、確認面からの深さ0.29mを計る。主軸は、N－21°－



第50図　第６号土壙出土遺物実測図

第18表　第６号土壙出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	甕	A　15.6	ほぼ完形 (底部欠)	焼き上り後、底部孔をあける。胴部丸くほぼ中央で最大径を持つ。頸部より直線的に外反し、口唇部でさらに外反する。	(外)口縁部ユビナデ後、胴部ヘラ削りとヘラナデ (内)ヘラナデ、口縁部ユビナデ	粗密 良 赤彩 (外)白茶褐色と黒褐色	最大径 18.65
2	坩		口縁部 欠	底部丸底。	(外)全面にヘラナデを施す。かなり風化している。	粗密 良 赤彩	最大径 11.8 頸部径 7.6 残高　7.9

Eに有し、不正方形を呈す。底面は、若干凸凹があり隅丸方形を呈す。壁は、急傾斜に掘り込まれているが中段を有す付近は若干緩やかである。

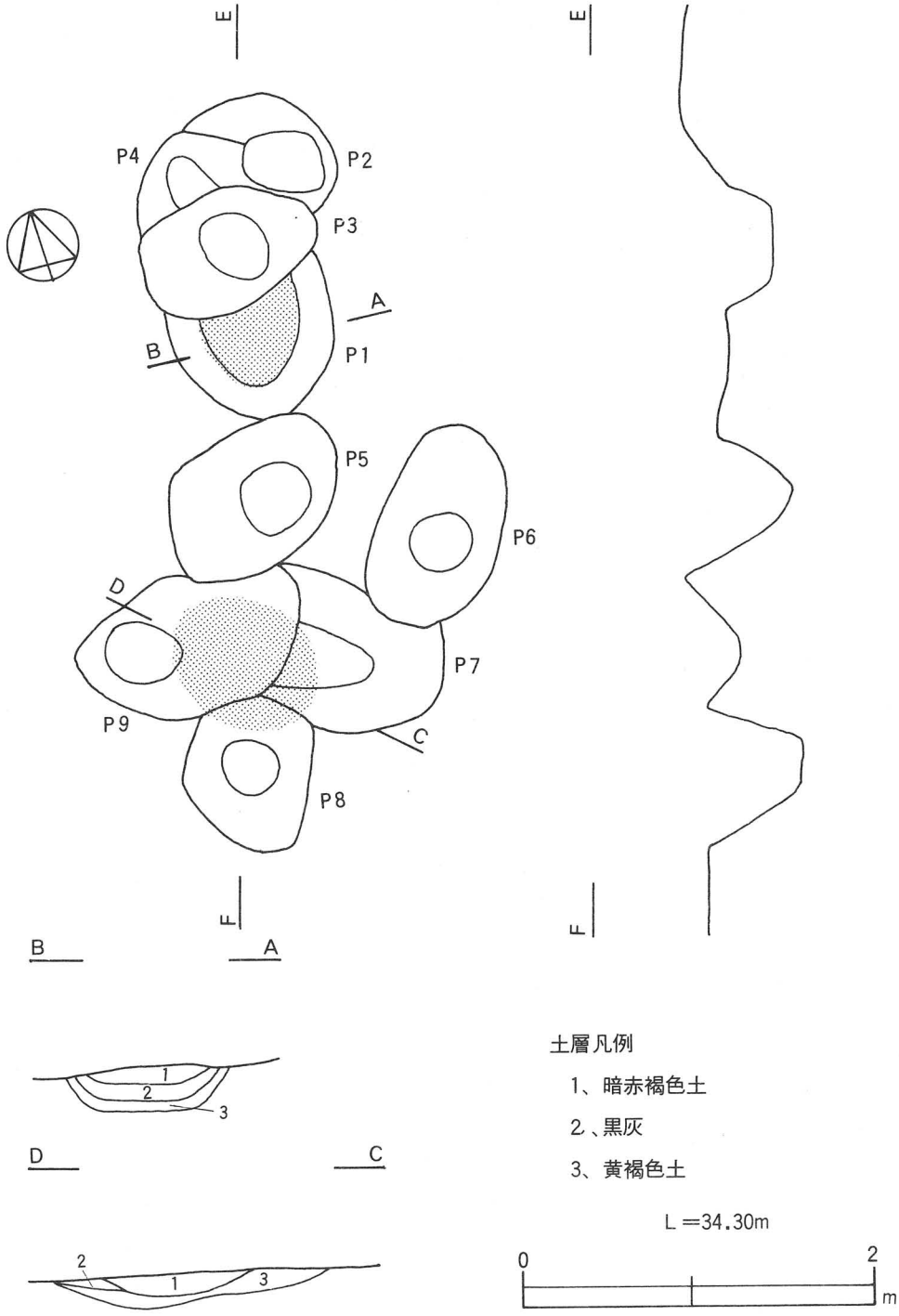
覆土は、２層で、上層の暗褐色土は堆積も厚く、固く踏み固められている。下層の暗黄褐色土は、ロームブロックが主体で人為的に埋められている。

本址に伴う遺物は、数点出土したが小破片の為、実測可能なものは無かった。

３．その他の遺構と遺物

１）　炉　址　（第51図、図版14）

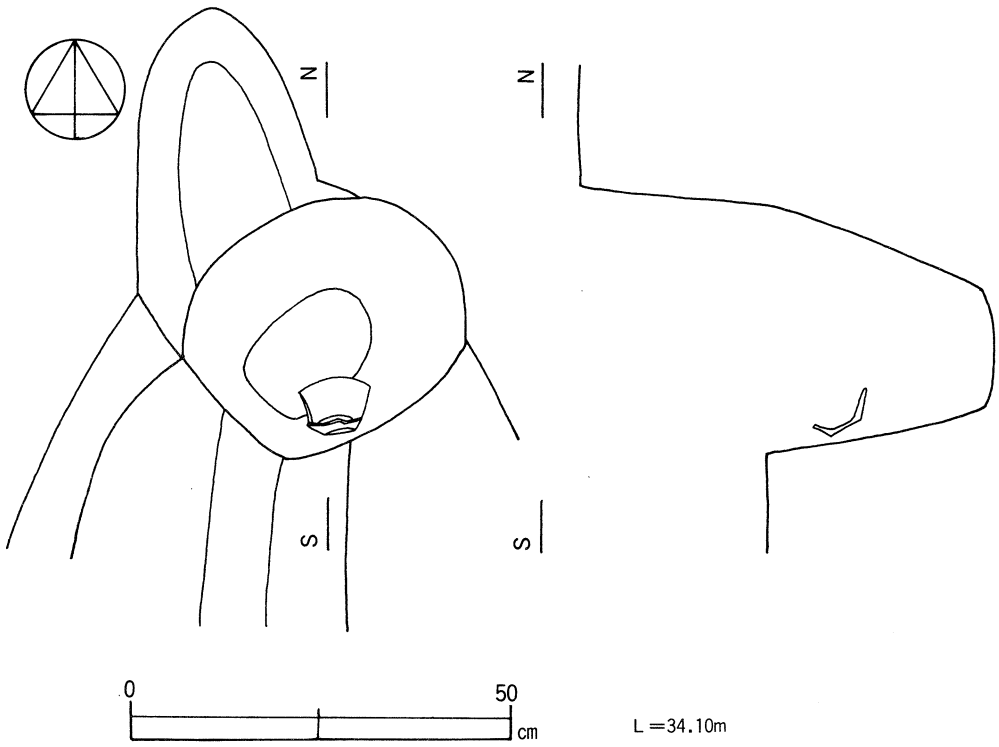
この炉址は、Ｉ区東側虎口の南側で確認され、９本のPit状遺構として確認された。各Pitは各々重複している。焼土は、Ｐ１上面とＰ７～Ｐ９の上面で確認されたが、Pitの底面及び壁面はほとんど焼けていない。また、焼土そのものは炉址としての焼土層とは考えにくく、投機もしくは流入等によるものと考えられる。


E
E
P4
P2
P3
A
B
P1
P5
P6
D
P7
P9
C
P8
F
F
B
A
1
2
3
D
C
2
1
3
土層凡例
1、暗赤褐色土
2、黒灰
3、黄褐色土
L＝34.30m
0
2
m

第51図　炉址実測図

出土遺物は、何ら検出されなかったため、時期を決定することは出来ないが、東側虎口の南側に位置することから中世の炉址と推定されるが、確定出来ないためその他の遺構とした。

2） Pit群 （第52図、図版14）



第52図　Ｐ１実測図

当遺跡からは、多数のPit状遺構が確認されている。これらのPitは、掘立柱建物址や住居址に結び付くPit以外、その多くは遺物の検出もなく時期及び性格等を、確定することは出来なかったが、唯一遺物が出土したのはＰ１のみである。他のPitは、柱穴状を呈するものの掘立柱建物址や住居址としてのプランは認められなかった。

Ｐ１は、Ｉ郭の南側に位置し付近には第６号掘立柱建物址が北西部に位置している。Ｐ１の規模は、東西径0.36m、南北径0.31m、深さ0.55mを計測し、楕円形を呈している。Pit内には、黒色土が体積しており、遺物はPitの南東壁付近でほぼ直立した状態で検出されている。この遺物は、素焼の椀で中世品であることから、Ｐ１は中世のPitと考えられる。

3） 溝 （第54図）

溝としては、Ⅰ郭の中央北側と南側に２条掘り込まれている。２条とも、Ⅰ郭を３等分するように東西方向に掘り込まれているが、北側の溝は地表面よりの掘り込みであることは、調査開始前に確認されているため、調査時に確認された南側の溝（第１号溝）に関して記述する。

第１号溝は、Ⅰ郭の中央南側で東南～北西方向にかけⅠ郭を横切るように掘り込まれている。確認部分での長さは、64.50m、幅は東側で1.90m、中央部で1.70m、西側で1.70～2.30mを計測し、最大幅が2.30mである。深さは、0.35m～0.55mを計測する。溝底面は、ほぼ平坦面をなしており、壁は斜めに掘り込まれている。溝内覆土は、暗褐色土が堆積している。溝の西側には耕作土壙が掘り込まれており、一部の土壙は溝を掘り切っている。

遺物は、構内から何ら検出されなかったが、溝南側の耕作土壙内から古銭（№１）と煙管（№２）（第15図、第１表、図版15）が検出されている。古銭は、寛永通宝である。古銭が検出された土壙は、溝を掘り切っている土壙群であることから、古銭が構内に有ったものと考えられる。よって、この第１号溝は、近世の溝と考えられる。

4） 道路状遺構 （第55図、図版14）

当遺構は、Ⅱ郭の中央南側平坦部から第４号住居址と、Ⅱ郭西側堀上を通り西側斜面部まで延びている。第４号住居址の部分では、粘土を幅70～55cm、厚さ10cm程度に土盛しており、上面は良く踏み固められている。長さとしては、南東から北西にかけ23mの長さを計測する。第４号住居址の部分で、新旧の造り変えが認められる。

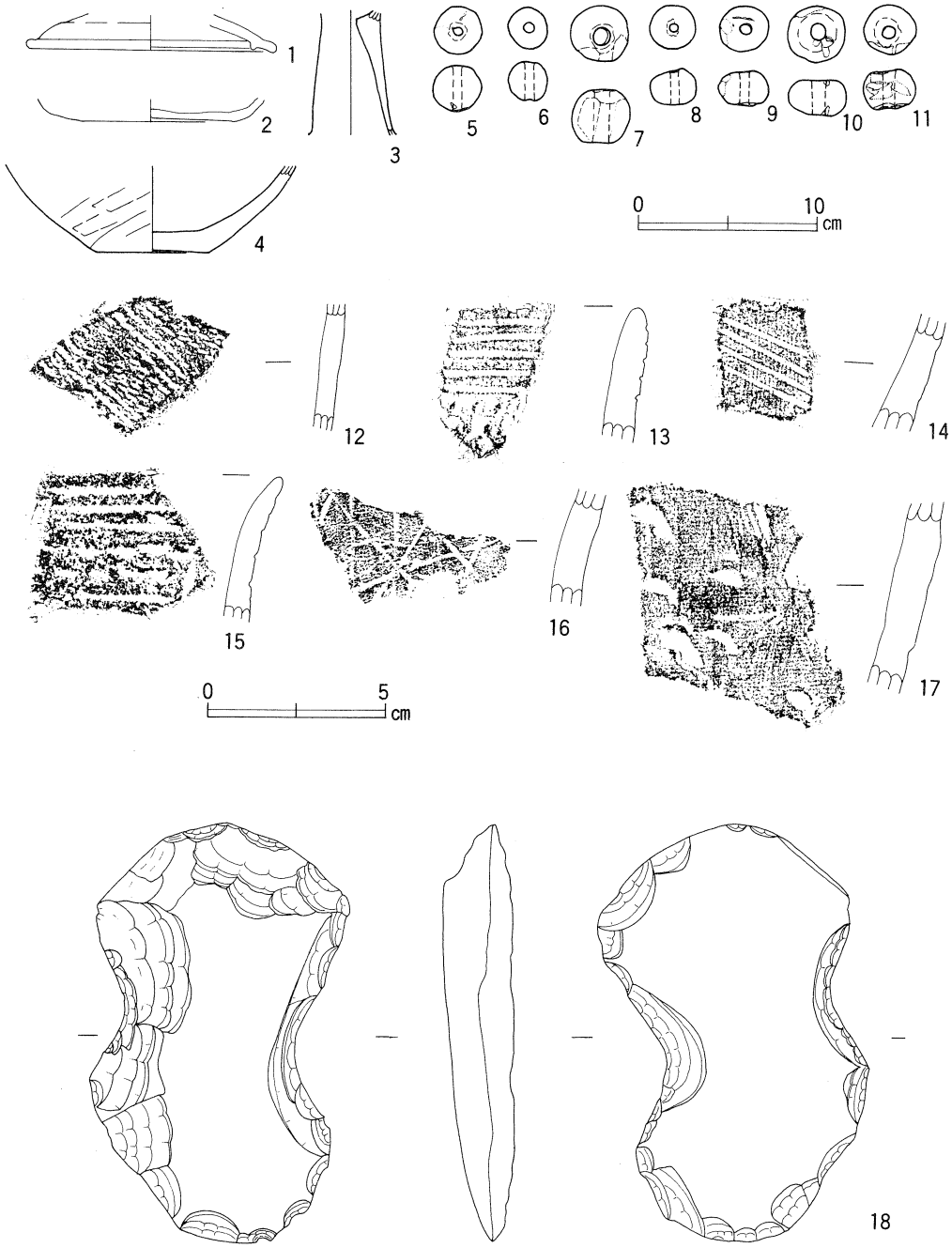
道路となる部分は、南東部でローム上に、中央部では第４号住居址上面に、北西部では堀１上面が、良く踏み固められている。

当遺構に結び付く遺物は、何ら検出されなかったため、具体的な時期決定は不可能である。しかし、当遺構が１号堀上面を通って西側斜面に至っていることから、１号堀が完全に埋没（人為と自然埋没の両者）した後となる。

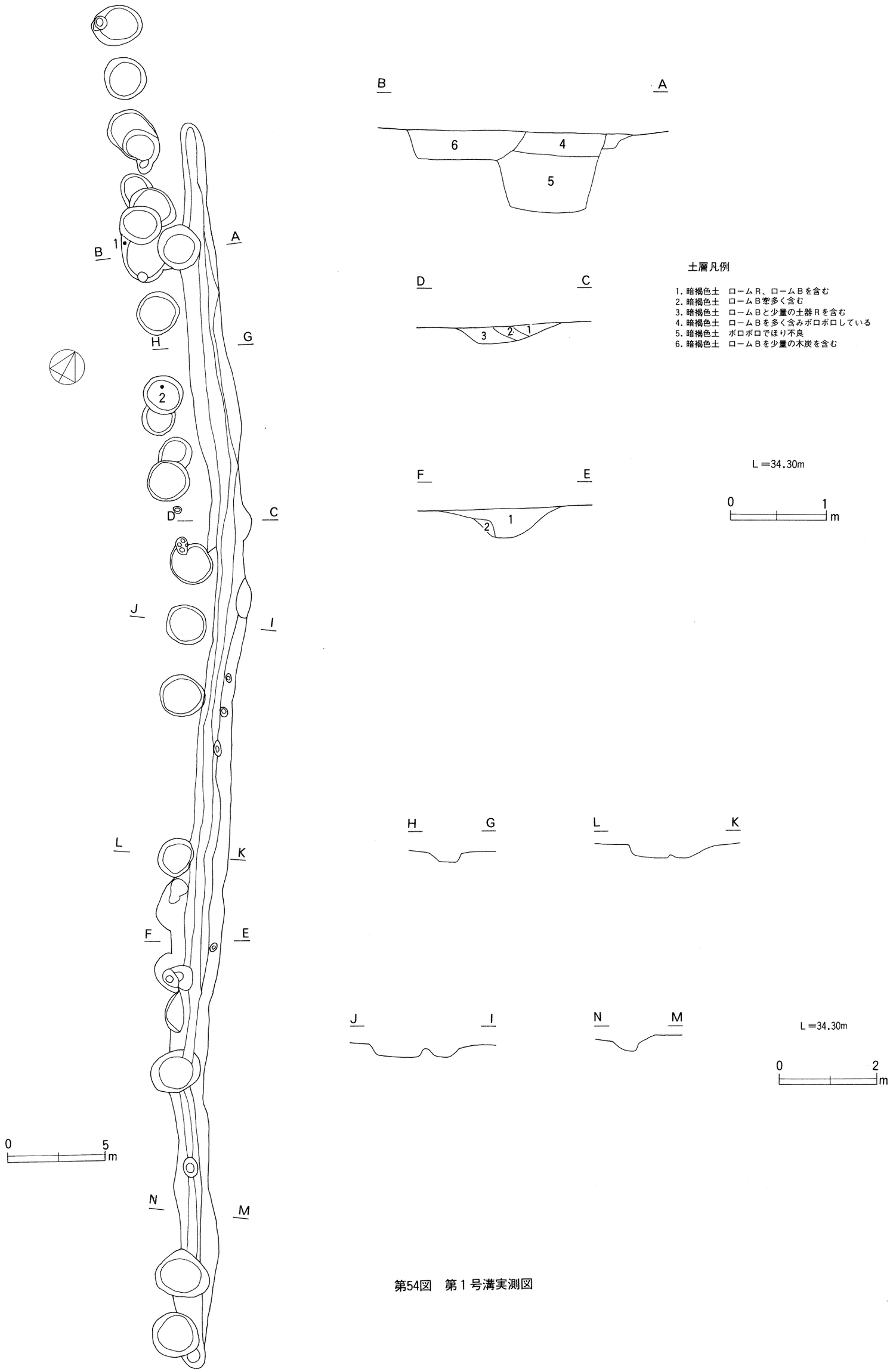
当遺構ではないが、他の耕作土壙、溝等から寛永通宝と煙管等が検出されていることから、この頃の可能性も有している。

5） 覆土内出土遺物 （第53・56図、第19表、図版14・20）

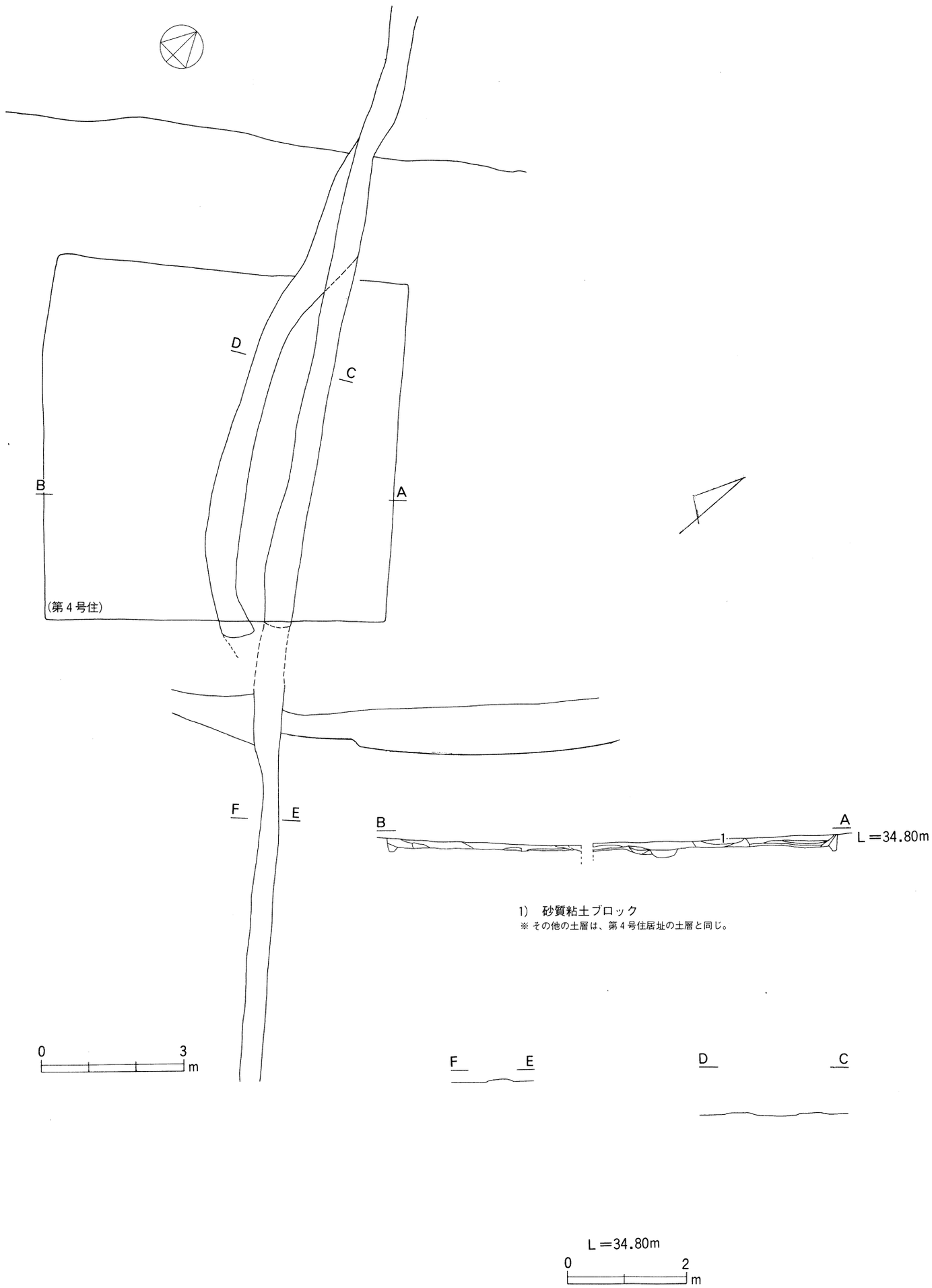
覆土内出土遺物としては、土師器、須恵器、土玉、縄文式土器、打製石斧、石器などが検出さ



第53図　覆土内出土遺物実測図



第54図　第1号溝実測図



第55図　道路状遺構実測図

第19表　覆土内出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土. 焼成. 色調	備　　考
1	須恵器 坏　蓋	C　13.8			ロクロ使用	粗密 良 白灰色	内径 11.4
2	須恵器 坏	C　9.6	底部 2／3欠	底部から若干丸味をもって立ち上がる	ロクロ使用 底部切り離し後、回転ヘラ削り	密 良 白灰色	
3	器　台		底部 全損			粗密 不良 (外)薄褐色 (内)黒	空穴径 0.7×0.45
4	カ　メ	C　6.2	底部 完形		底部・胴部ヘラ削りかなり磨耗している	粗 良 (外)橙褐色 (内)名橙褐色	残高　4.9
5	土　玉	2.7×2.65×2.6 0.45×0.5 重　18g				粗 不良 薄褐色	2　溝
6	土　玉	2.3×2.7×2.2 0.6×0.65 重　11g				密 良 赤褐色	第4号堀立 柱建物址内
7	土　玉	3.2×3.15×3.0 1.0×1.0 重　32g				密 良 橙褐色	一　括
8	土　玉	2.5×2.5×2.0 0.5×O.5 重　12g				密 良 白灰褐色	一　括
9	土　玉	2.75×2.6×1.93 0.7×0.65 重　16g				粗 良 暗白茶褐色	一　括
10	土　玉	3.2×3.15×2.0 0.8×1.0 重　23g				密 良 橙褐色	一　括
11	土　玉	2.9×2.9×2.3 0.7×0.7 重　20g				粗密 良 薄こげ茶	一　括

れている。土師器と須恵器は、全て破片である。土玉は、完成品が検出されている。縄文式土器片は、早期～前期にかけての土器片であり、打製石斧は中期であり、石器は先土器時代の石器と判断される。

第53図は、土師器と須恵器及び土玉である。同図No.1は、須恵器杯蓋片であり、No.2は須恵器杯片である。No.3は、土師器器台（高杯片）であり、No.4は土師器甕底部片である。No.5～6の7点は、土玉である。

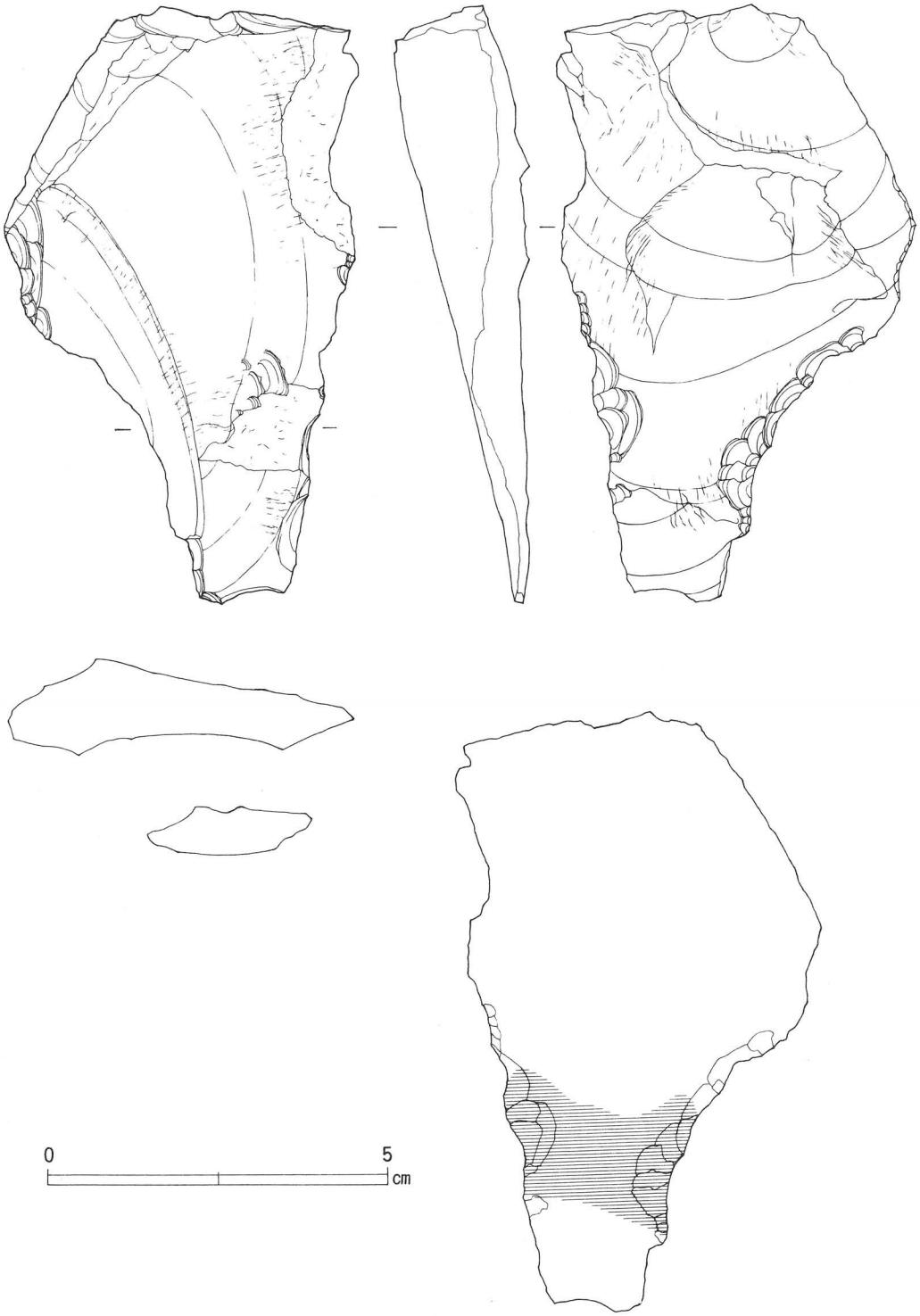
No.12～17は、縄文式土器片である。No.12は、早期燃糸文系の土器片で稲荷台式に比定される。No.13、14は、早期沈線文系の土器片で田戸下層式に比定される。No.15は、前期未葉のいわゆる繊維土器であり、No.17は前期後半の土器片で指突文が特徴である。

No.18は、打製石斧である。長さ11.9cm、厚1.8cm（中央）を計測し、左右及両端に剥離面が見られる。

6） 先土器時代の遺物 （第56図、図版20）

第56図に示した遺物は、本遺跡Ⅰ郭南西部でローム層直上の暗褐色土中より出土したが、その形態、剥片剥離、石材から先土器時代の石器であると認識する。しかし、この石器の出土状況から、後世の遺構の掘り上げによって浮いたことも考えられ、その本来の所属層位は不明である。

石器は縦長剥片を素材として、その両側縁を調整して特に先端部に近い方に弱いくびれを作った簡単なものである。素材剥片の剥片剥離は、石材の表面が横方向から直接打法による剥離が2回あり、その直後に間接打法によってこの剥片を厚く剥離してある。したがって、この剥片は石核調整直後の第1回目の剥片剥離による剥片であり、そのために少し不整形な縦長剥片で、表面は石核調整剥離面と考える。打面は細かく調整されてないため、少し凸凹がある。石器としての二次加工は、表面左側縁の突出部に裏面からの刃潰し的な調整があり、また、裏面の両側縁下部には押圧剥離による調整がある。この裏面の調整部の所に顕著な磨滅が見られ（第56図横線部がその範囲）、特に調整剥離によってできた稜線は潰れているほどである。この部分に対応する表面側には磨滅がなく、仮にこの調整部を刃部として使用されたならば、同様な磨滅が表面にあってもよいと思う。また削器として使うならば、石器を横断するように磨滅はできないはずである。このような事から、この石器は表面に下方から柄を密着して、柄と調整部とを紐で巻付け、使用したと思われ、調整部の磨滅はこの巻き付けの痕跡と推定する。着柄の石器とすると、その刃部は表面左側の調整部で、これから推すと削器であるが、裏面調整部の磨滅ほど、使用痕磨滅はない。計測値は長さ9.3cm、幅5.2cm、厚さ1.6cm、石材は珪質頁岩である。　　（道　沢）



第56図　先土器時代石器実測図

V. 総　　括

当古館遺跡の調査結果は、今まで述べたように掘立柱建物址、粘土貼り土壙、土壙、虎口、堀、Pit群、などが中世の遺構として確認されており、中世以前の遺構としては住居址、土壙が確認されている。また、中世以降の遺構としては溝、炉址、道路状遺構などの遺構が確認されている。ここでは、これらの諸遺構に関し中世、中世以前、中世以降に分けて考察を加味しながら記述するが、考察は別項で述べることとする。

1．中世の古館

中世の遺構としては、掘立柱建物址8棟、粘土貼り土壙3基、土壙1基、虎口1ヶ所、堀、土塁、Pit群が確認され、掘立柱建物址は8棟のうち7棟（第2号、3号、4号、5号、6号、7号、8号建物址）は南北方向に長い長方形を呈し、他の1棟（第1号建物址）は、東西に長い長方形を呈している。また、6棟（第2号、3号、4号、5号、7号、8号建物址）が台地の東側に構築されており、台地の西側部分が広場として使用されていたことを伺わせる。西側に存在する唯一の一棟（第6号建物址）は、台地が傾斜し始める部分に構築されており、西側虎口付近に建てられたものかと思われる。また、第2号建物址と第3号建物址が重複しており、2時期に区分することが可能である。

虎口は、第3号掘立柱建物址の東側で、四脚門（第7号建物址）を構築していたものと考えられる。この虎口は、台地の端で、真下が急傾斜の斜面であることから搦手口ではないかと考えられる。また第7号建物址の西側に第8号建物址があり、前後関係が考えられる。

土塁は、現況で塚状に遺存する土塁（内土塁）と、北側に延びる舌状台地と城を区切るように構築された土塁（外土塁）の2基が所在している。前者の内土塁と後者の外土塁では、構築年代に時間差を有し、2時期に区分することができることから城の増改築が行われたことを示すものである。

堀は、築城時に二郭を周るように深い箱薬研堀を掘っている。この堀は、粘土層を堀り抜いた空堀りである。この堀は、長期間使用された後、造改築時に堀を半分以上埋めている。さらにこの後、北側コーナー部分を完全に粘土と褐色土で埋め、西側の堀が北側コーナー部分で谷の方向へ進めて、消滅するように改築している。

また、西側の谷の部分に盛り土をし緩斜面の傾斜を急傾斜にすると共に、台地の平坦面を西側へ拡張している。さらに北側の台地が続く部分も整地をして平坦面を構築しており、この時期に

外土塁を構築したものと思われる。

出土遺物は、第５号土壙とＰ１から出土した素焼の碗類が少数で、全体でも遺物量は少なく、その多くは小破片である。第15図№４の天目茶碗片と、瀬戸系の摺鉢片は、15ｃ末～16ｃ前半の時期と思われる。また、堀の上面から寛永通宝が出土していることから少なくとも江戸時代にも何らかの形で使用したものと思われる。

この古館の築城年代は、不明であるが、Ⅰ期が築城期、Ⅱ期が堀を改修した時期、Ⅲ期を外土塁構築及び北側斜面部に盛り土をした時期に区分することが可能である。Ⅰ期は、山田氏が築城した時期で２、４、５、６号建物址がこの時期に伴うと思われる。Ⅱ期は、戦国期の16ｃに入る時期で、Ⅲ期もほぼ近い時期と考えられる。１、３号建物址が、この時期に伴うと思われる。古館がこの地域の中心であった時期は、なかったかあっても初期のごく短い時期であったと考えられる。

２．中世以前の古館

本遺跡から検出された遺構は、古墳時代前期の住居址６軒、古墳時代後期の住居址７軒、歴史時代の住居址１軒、時期不明の住居址１軒、土壙２基である。

古墳時代前期の住居址は、細い舌状台地の西端に谷を囲むように構築されている。全てが炉を持つ住居址である。古墳時代前期の住居址のほぼ中央に位置する第４号住居址は、規模が最も大きく、一辺約7.5m前後を有し、しっかりした柱穴を持っている。他の住居址は、一辺約3.5m～５m前後の規模で、柱穴を持つ住居址でも貧弱な柱穴で掘り込みも浅い。また、２、３、４号住居址は、壁溝を有すが、１、６、７号住居址は壁溝を持たない。

遺物は、１号住居址の器台や４号住居址の坩などは古墳時代前期の形態を有している。甕は、４号住居址に見られる甕のように折返し口縁を呈しているものもあるが、６号住居址の甕のように古墳時代中期の形態に似ているものもある。４号住居址出土の№１の坩のように破片が遺跡の全体から出土しており、覆土がかなりいじられているものの、これらの住居址の時期は、古墳時代前期後葉に位置付けられると考えられる。

古墳時代後期の住居址は、５、８、10、13、15号住居址で、前期の住居址とは対照的に台地の中央～東寄りに構築されている。この時期の住居址は、全て北壁のほぼ中央にカマドを有し、深くしっかりした４本の主柱穴を有している。12号住居址を除き、ほぼ同一規模の住居址である。また、10、11号住居址は貯蔵穴を持つ。

遺物は、５、８、10、13号住居址から出土している杯に注目してみると、陵と有す杯と陵を持たず口縁部が内反する杯に分けられるが、時期差はあまりなくほぼ同一時期と考えられ、古墳後

期後半と考えられる。第11号住居址からは、土製支脚のみしか出土していないが、遺構の形態がほぼ同一であることから同時期の遺構と考えられる。また、第12号住居址から出土している遺物は、古墳時代後期後半であるが、他よりも若干古い様相を呈している。

歴史時代の住居址は、第９号住居址のみである。古墳時代後期の住居址に比べて、柱穴が住居址のコーナーに寄っている。

遺物は、須恵器杯が出土している。底部が偏平で、立ち上がりも鋭角である。また、№３は美濃須衛窯址郡の須恵器を模倣したものと思われ、真間期中葉の時期と考えられる。また、遺構外出土の須恵器２点も同時期と考えられる。

土壙は、第11号土壙が、柱穴状で、坩と甕を出土しており、これらの遺物から古墳時代前期に位置付けられる。また、第13号土壙から石器が出土しており、縄文時代と思われる。

本遺跡は、古墳時代前期に台地の西側に集落を営み、古墳時代後期には、逆に台地の東側に集落を営み、真間期には、集落の中心を今回の調査区より南側に移し営んでいたものと考えられる。

また、遺構を確認することは出来なかったが、先土器時代の遺物や縄文時代早、前期の土器片が検出されており、この頃から当遺跡に生活の痕跡を見い出すことが出来る。しかし、遺構としては前述のように、中世城郭築城時やその後の構作等により確認出来なかった。

３．　中世以降の古館

中世以降の遺構としては、溝、炉址、道路状遺構が確認されている。溝は、３条確認されⅡ郭を４等分するように東西方向でⅡ郭中央部に掘り込まれている。この３条の溝は、北側と中央部は構作等による溝であり、南側の溝（第１号溝）は寛永通宝との関連から、江戸時代の溝と考えられる。また、道路条遺構は中央溝上面に位置していることから、第１号溝同様江戸期又はこれ以降のものと考えられる。

炉址は、東側虎口南側で確認されているが、中世城館址に結び付く炉址であるか確定出来ないが、位置及び東側土塁との関係から近世の炉址とも考えられる。

４．　まとめ

当古館遺跡の調査結果に関し、今まで述べて来たように先土器時代から近世までの遺構と遺物が確認されている。当遺跡で、中心となるのは中世城館址の遺構と遺物である。この次に来るのが古墳時代～歴史時代にかけての集落址である。

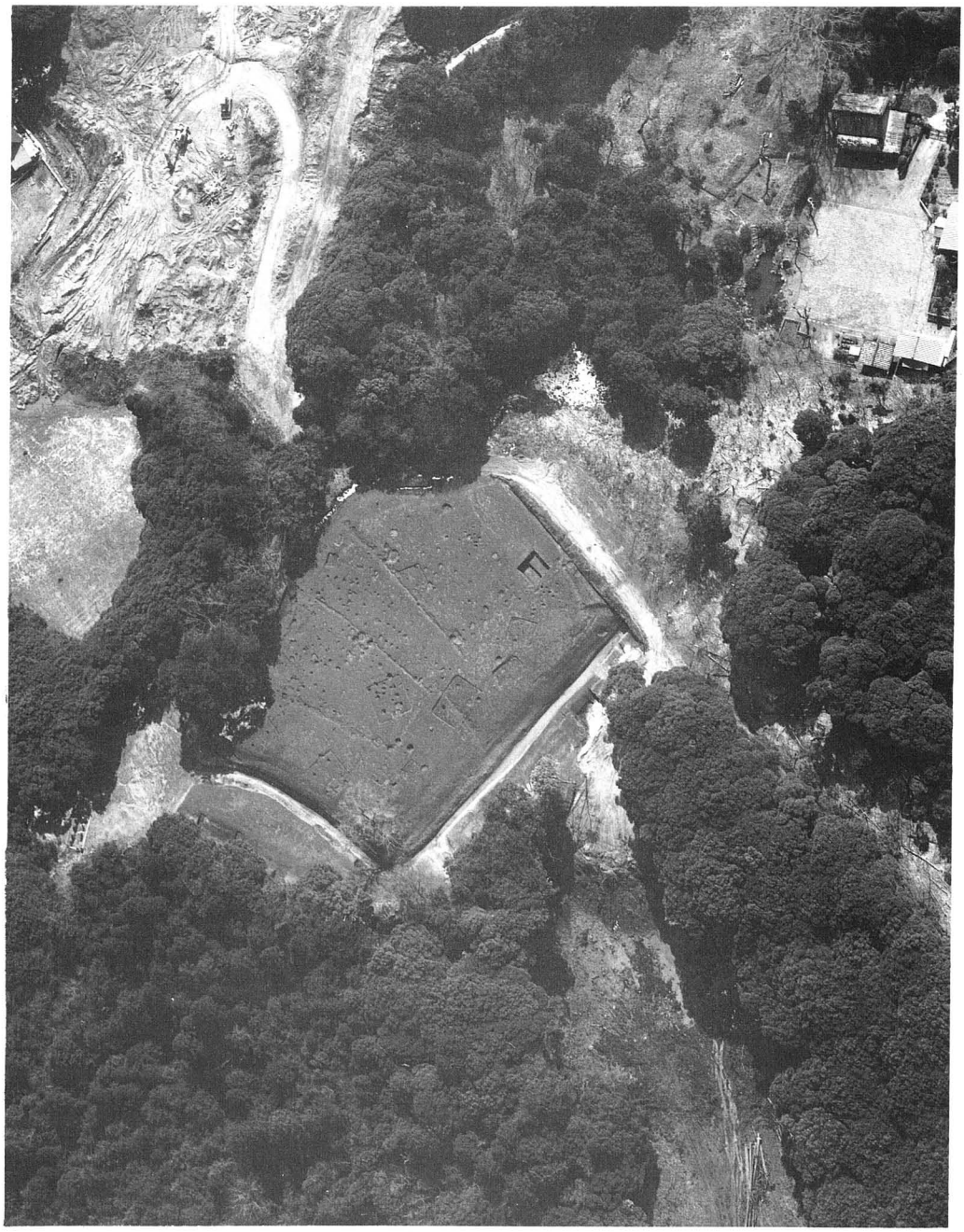
中世の遺構は、堀、土塁、土壙、掘立柱建物址などであり、当遺跡と隣接する平遺跡や北西方

向の古屋敷遺跡からも、当遺跡と同様の遺構が確認されているため、3遺跡を合わせて検討しなければ当遺跡が有する性格等を明らかにすることは出来ない。これは、集落址においても同様である。集落址では、古墳時代五領期の住居址以外は、この3遺跡と六台遺跡、今山遺跡からも確認されているため、5遺跡を合わせ検討せねばならない。したがって、当遺跡に関する考察は別冊で述べることとした。

参考文献

「茨城県史」 中世編	1986	茨城県
「菊水城址主郭部調査報告書」	1988	下総町遺跡研査会
「助崎城址」	1978	助崎城址遺跡調査団
「栃木県の中世城館址」	1983	栃木県文化振興事業団
「石川城郭跡」	1984	(財) 市原市文化財センター
「屋代B遺跡Ⅰ」	1986	(財) 茨城県教育財団
「屋代B遺跡Ⅲ」	1988	(財) 茨城県教育財団
「向原遺跡」	1987	向原遺跡調査会
「堀ノ内大台城址」	1985	牛堀町教育委員会

図版１　遺跡全景



図版２　遺跡近景（調査前）

遺跡南側（北より）

遺跡北側（南より）

図版３　遺跡近景

北側土塁（北より）

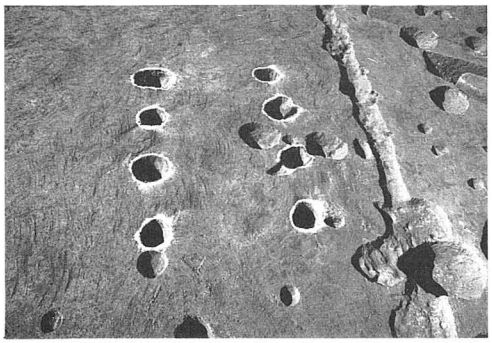
東側曲輪（南より）

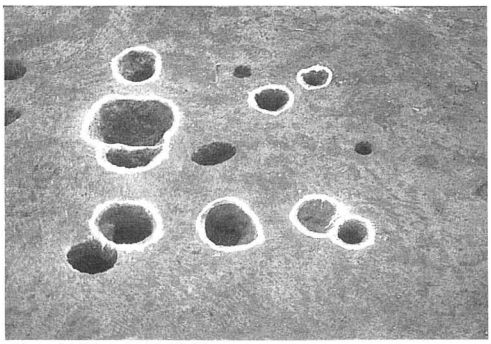
図版 4
遺構全景
（近景）

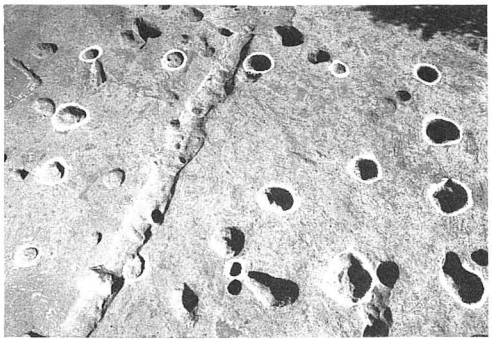
遺跡東側

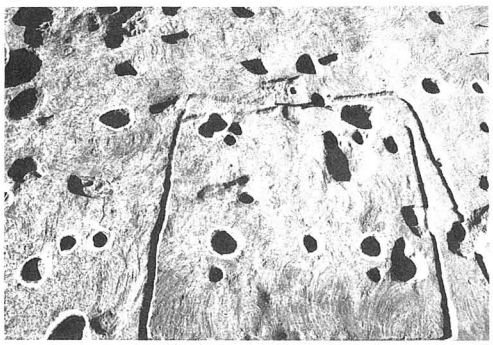
遺跡中央部

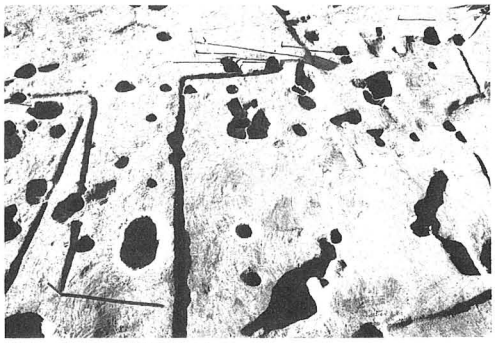
遺跡西側

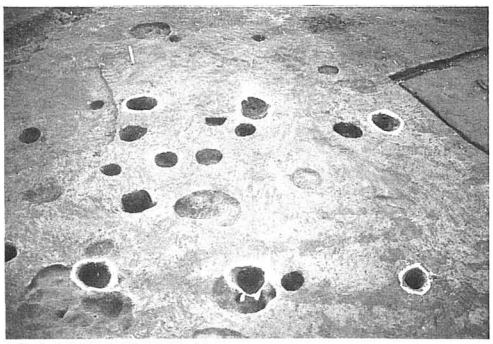

第１号掘立柱建物址

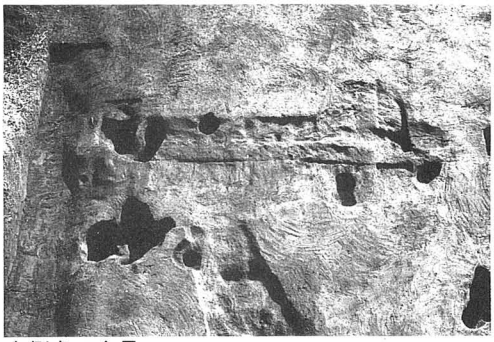

第２号掘立柱建物址

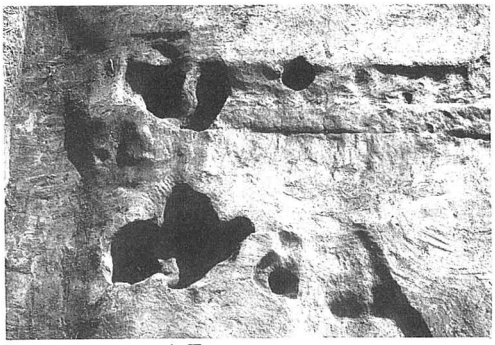

第３号掘立柱建物址


第４号掘立柱建物址

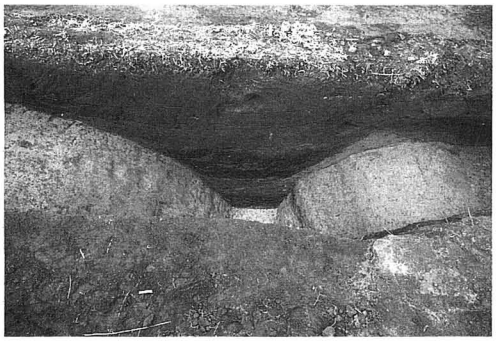

第５号掘立柱建物址


第６号掘立柱建物址

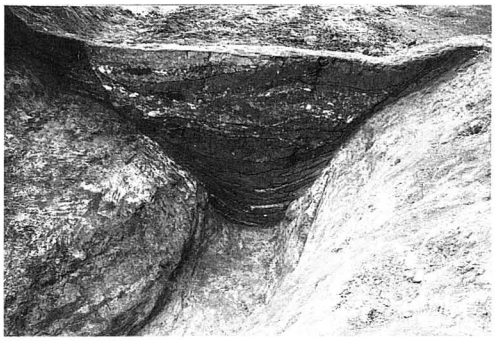

東側虎口全景


東側虎口四脚門全景

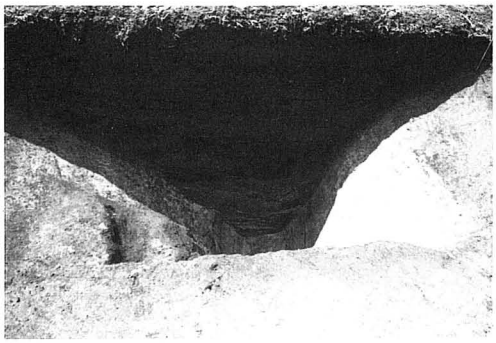
図版６、中世遺構３（掘土層）



１号掘西側（南）

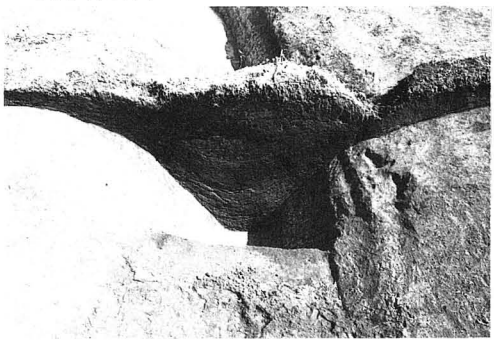


１号掘北西部

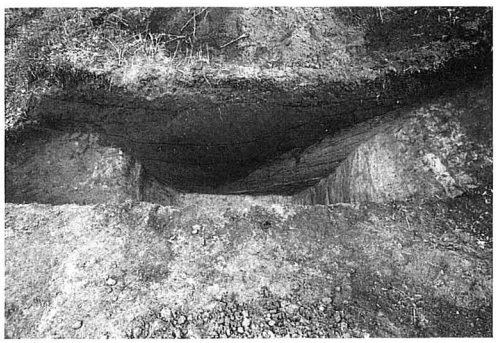


１号掘西側（北）

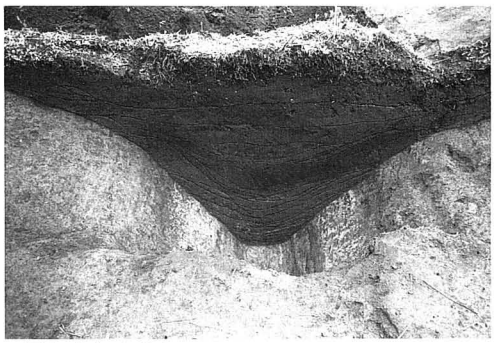
１号掘北東部



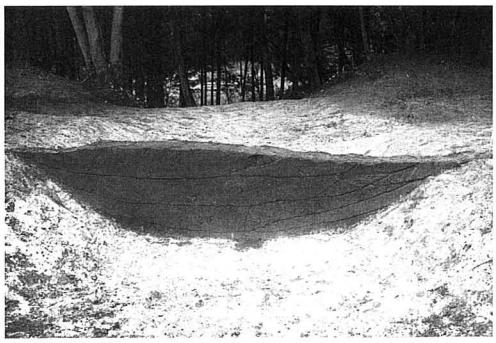
１号掘北側中央部



１号掘東側

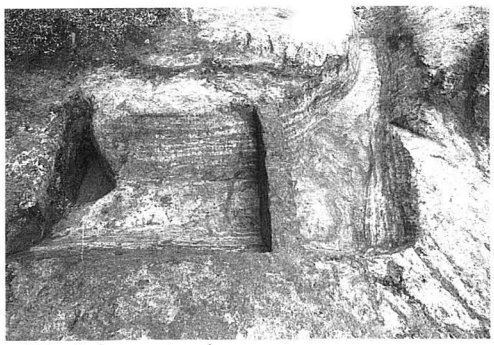


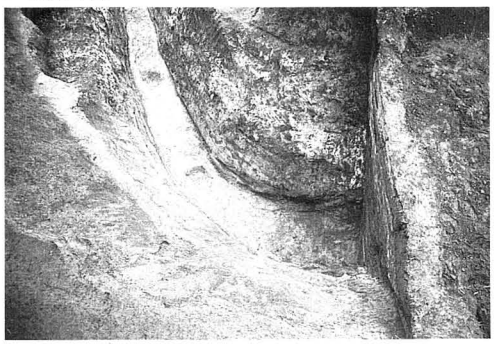
１号掘北側中央部



２号掘東側

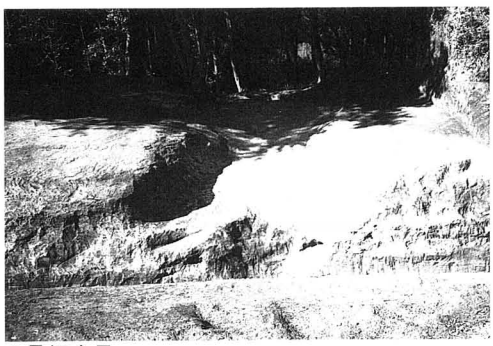
1号掘西側


1号掘北東コーナー部


1号掘北コーナー部

1号掘東側

1号掘北側（西より）


2号掘全景

1号掘北側（東より）

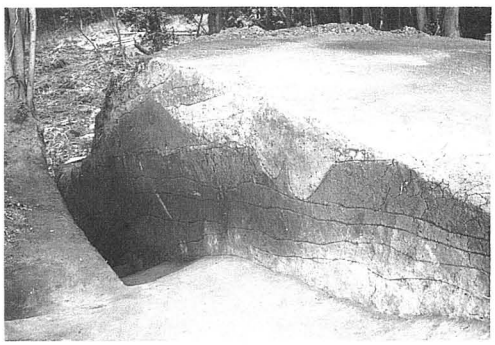
1号掘、2号掘合流部、北西部確認状況

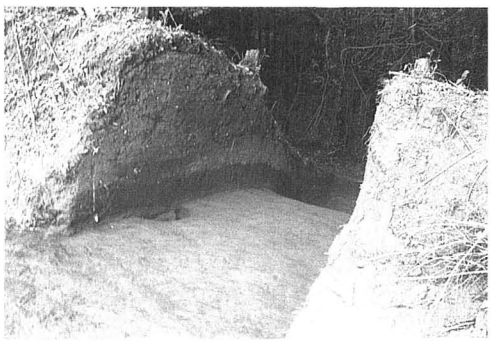
図版８、中世遺構２（土塁、西側斜面）

北側土塁（西側）

東側土塁

北側土塁（西側土盛状況）

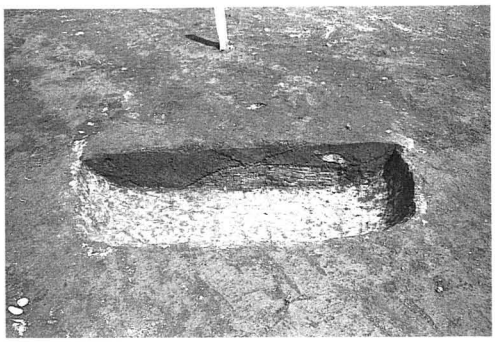

西側斜面土盛状況（北側）

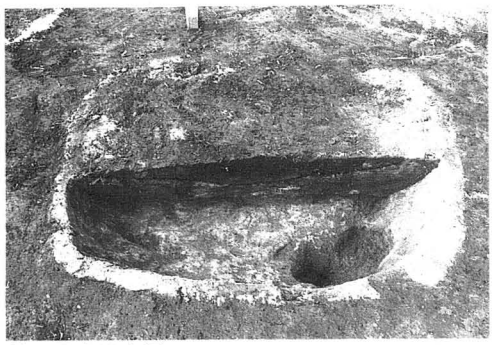

北側土塁（中央部）

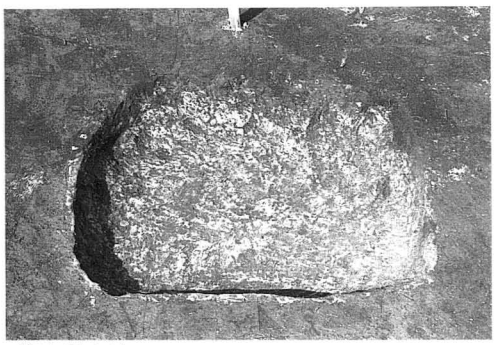
西側斜面土盛状況（南側）

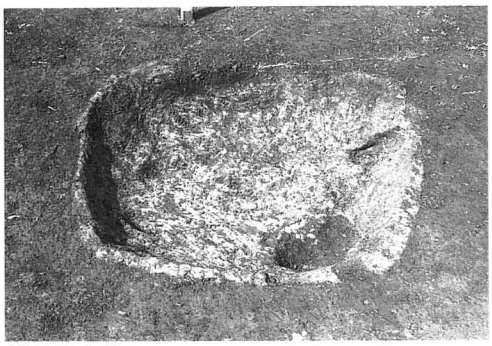
北側土塁（中央部土盛状況）

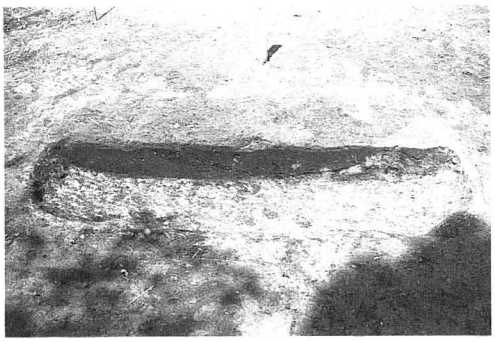
西側斜面土盛状況

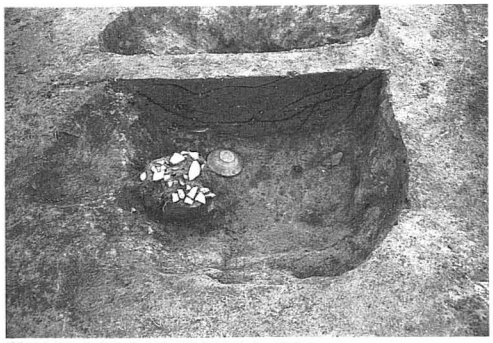

第１号土壙土層

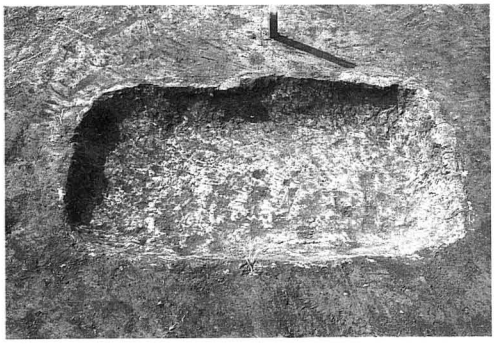

第３号土壙土層

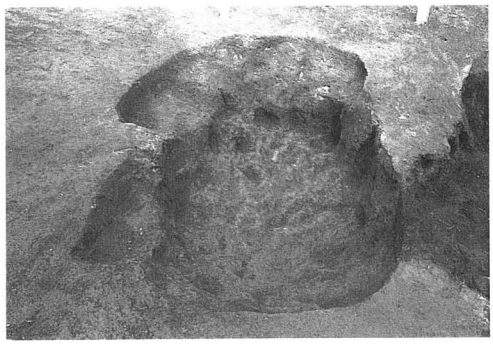

第１号土壙


第３号土壙


第２号土壙土層


第５号土壙土層・遺物出土状況

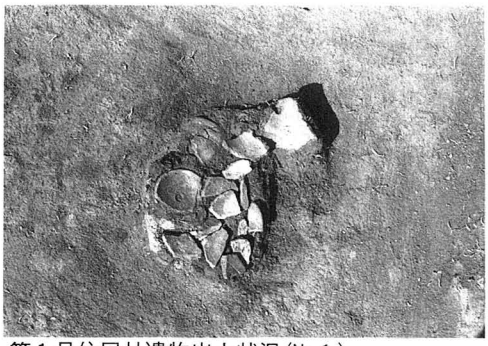

第２号土壙


第５号土壙

図版10、中世以前の遺構１（住居址）

第１号住居址

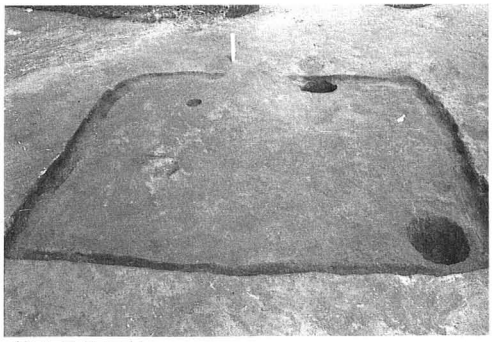
第２号住居址遺物出土状況（No.１）

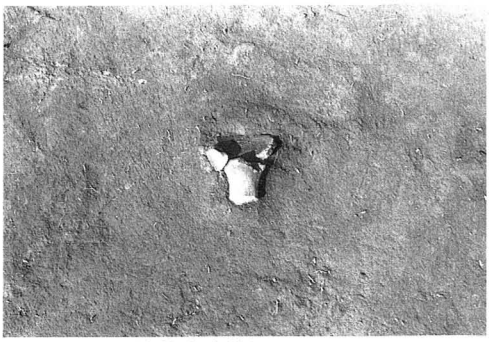

第１号住居址遺物出土状況（No.１）

第３号住居址遺物出土状況

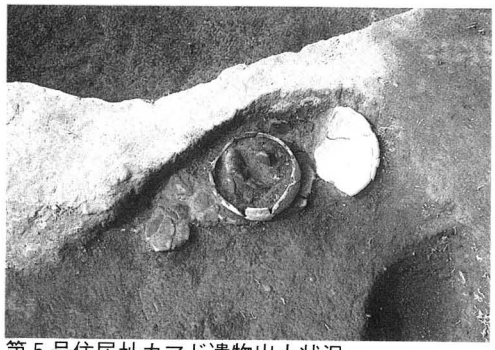
第２号住居址遺物出土状況

第３号住居址


第２号住居址


第３号住居址遺物出土状況

第４号住居址遺物出土状況


第５号住居址カマド遺物出土状況

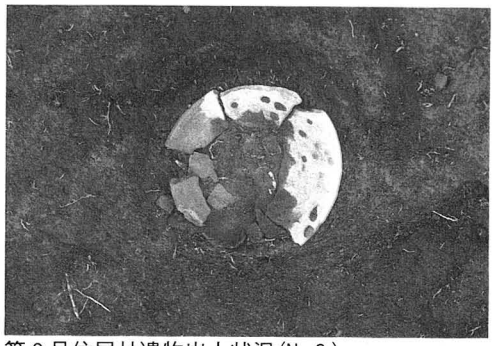
第４号住居址

第６号住居址遺物出土状況

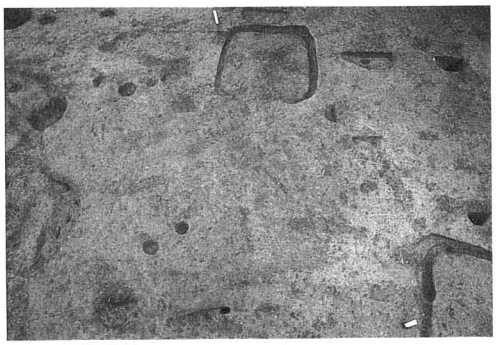
第５号住居址

第６号住居址遺物出土状況（No.１）

第５号住居址カマド

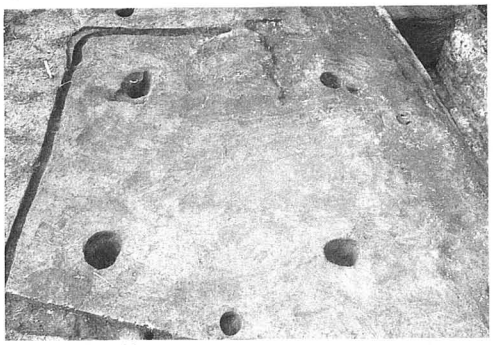

第６号住居址遺物出土状況（No.２）

図版12、中世以前の遺構３（住居址）



第７号住居址

第９号住居址遺物出土状況

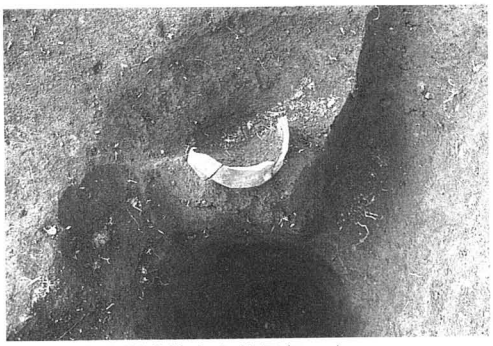


第８号住居址

第９号住居址

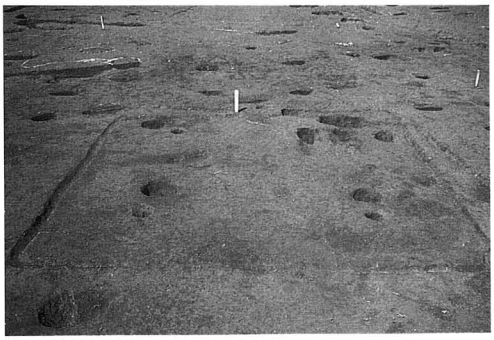
第８号住居址カマド

第９号住居址カマド内遺物出土状況



第８号住居址遺物出土状況（No.１）

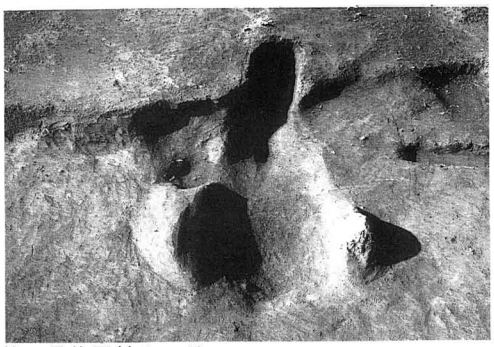
第９号住居址カマド



第10号住居址

第13号住居址

第10号住居址カマド



第13号住居址カマド

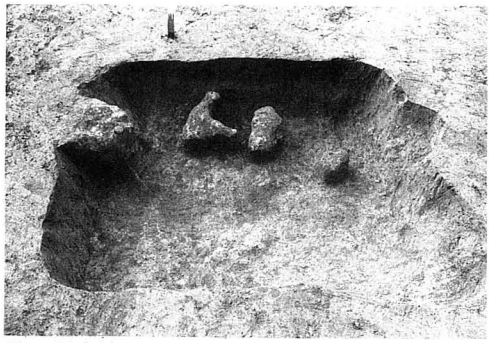
第11、12号住居址

第14号住居址

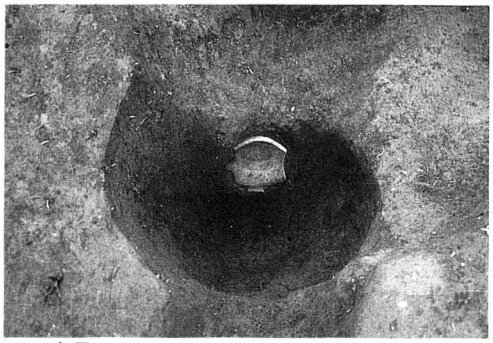
第11号住居址カマド

第15号住居址

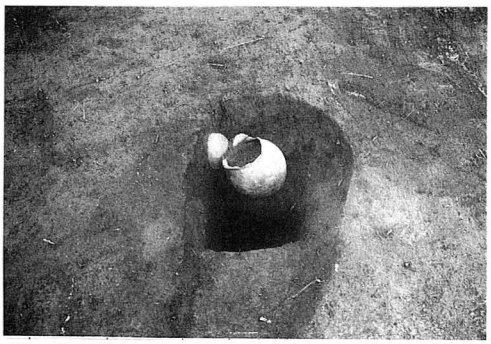
図版14、その他の遺構・遺物



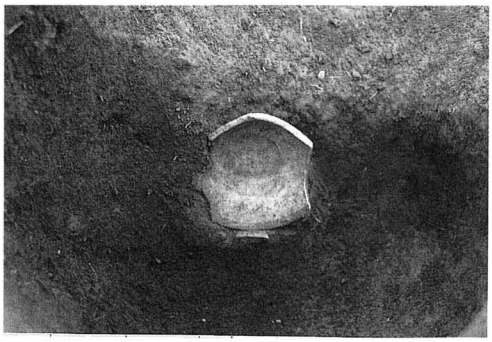
第４号土壙



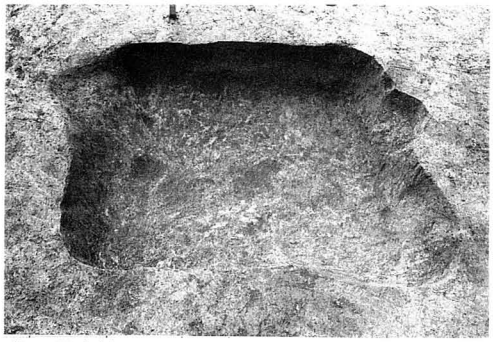
Ｐ１全景



第６号土壙



Ｐ１遺物出土状況



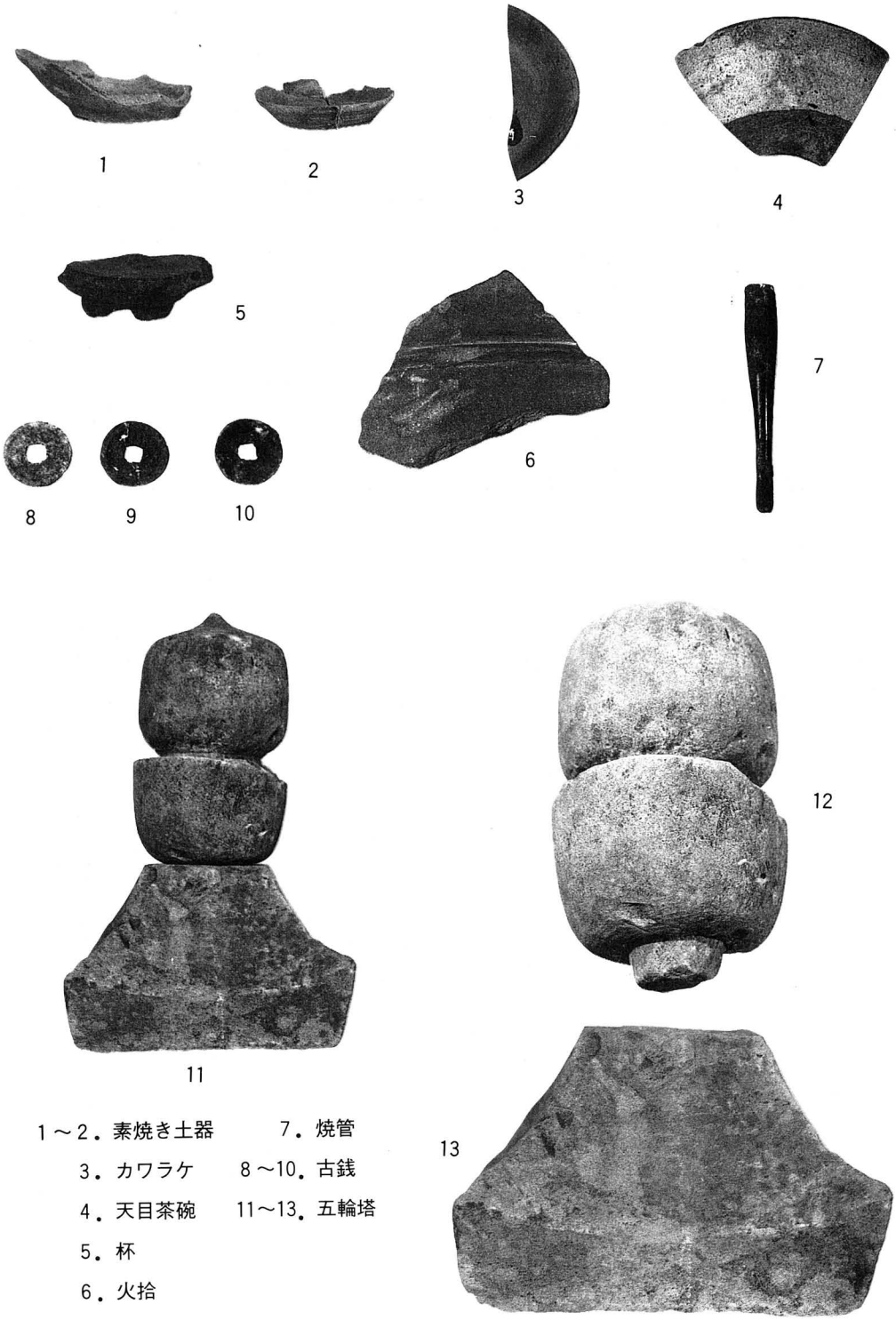
第７号土壙

道路状通溝

石炭出土状況

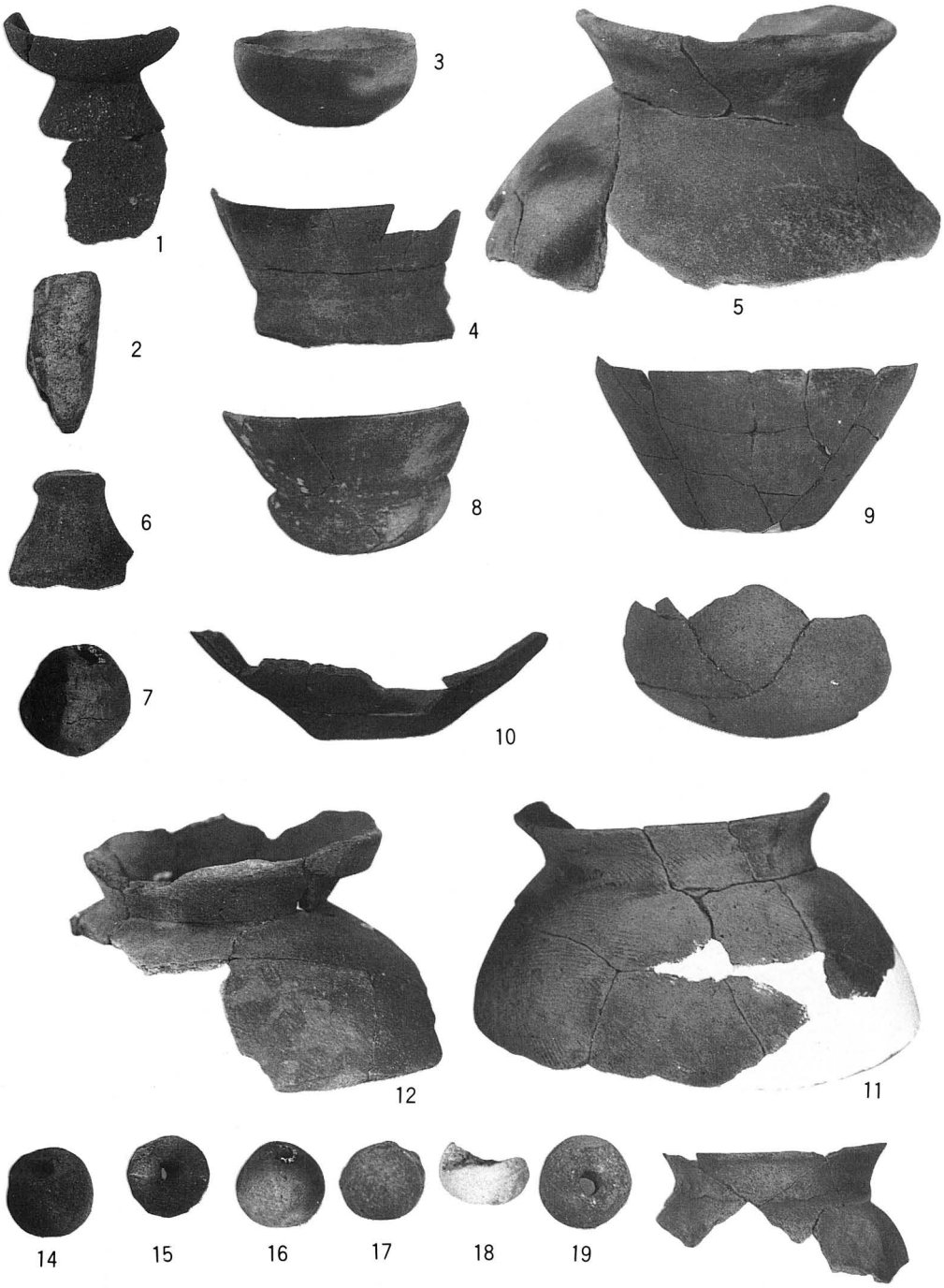
炉址

図版15、出土遺物１（中世）



１～２．素焼き土器
３．カワラケ
４．天目茶碗
５．杯
６．火拾
７．焼管
８～10．古銭
11～13．五輪塔

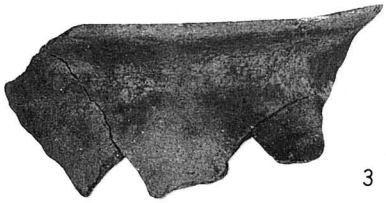
図版16、出土遺物２（住居址内）



１．２．第１号住居址　　６．７．第３号住居址

３～５．第２号住居址　　８～19．第４号住居址

1

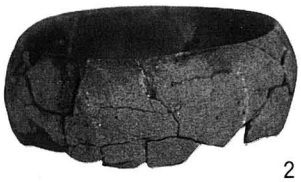

3

4

5

6

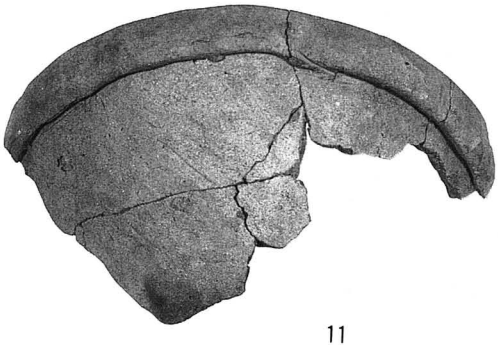
9


2

7

8

10


11

12

14

15

16

13

1～９．第５号住居址

10～12．第６号住居址

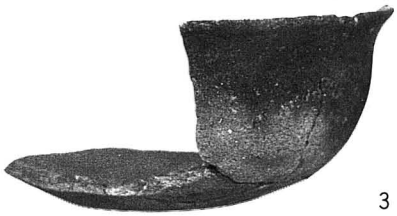
13．第７号住居址

14～16．第８号住居址

図版18、出土遺物４（住居址内）

1

2



3

4

5

9

6

7

8

１～６．第９号住居址

７．第12号住居址

８．第10号住居址

９．第11号住居址

1

3

2

4

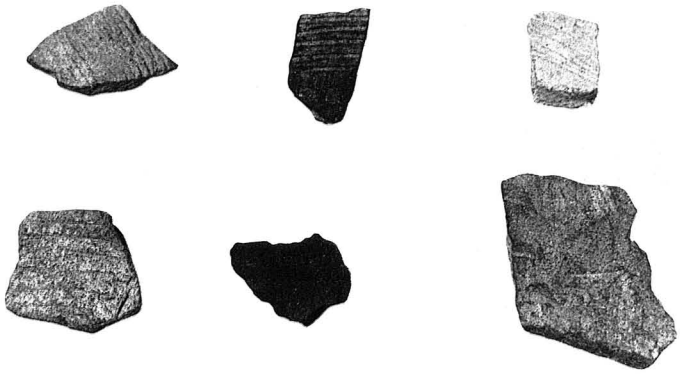
第５号土壙 出土遺物

1

2

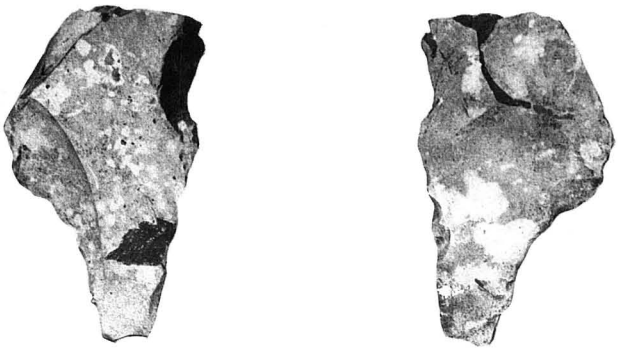
第６号土壙 出土遺物

図版20、出土遺物６（縄文・先土器時代）



縄文式土器

打製石斧



先土器時代石器

茨城県行方郡北浦村

古館遺跡発掘調査報告書

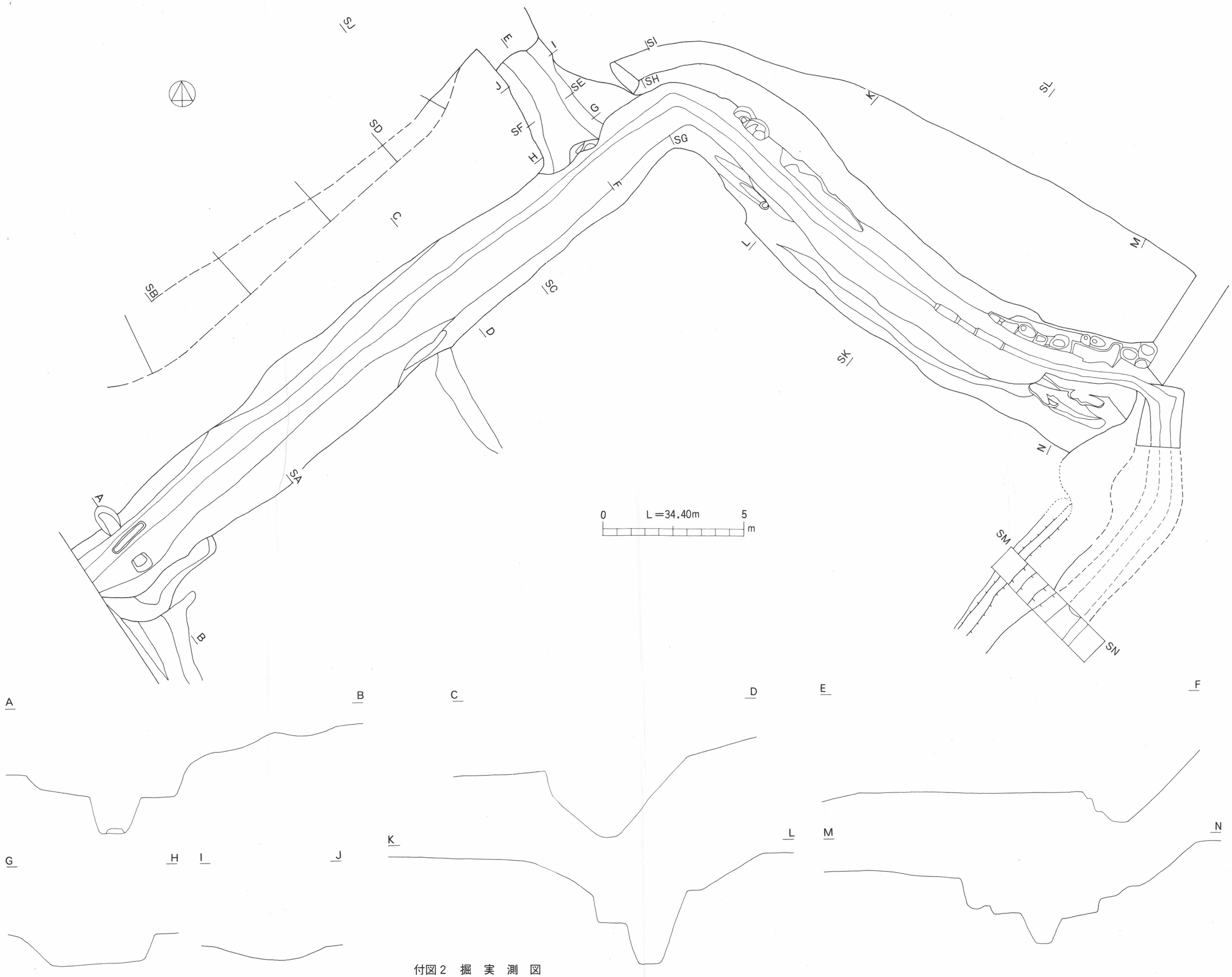
編集発行　山田地区遺跡発掘調査会
北浦村山田2564-10
発 行 日　1990年３月
印　　刷　株式会社 さんゆう社印刷
行方郡玉造町甲2641

付図1　古館遺跡全測図

付図2　掘　実　測　図

2号堀
1号堀
土壙6
6号住
14号住
7号住
8号住
4号住
3号住
土壙3
5号住
13号住
12号住
2号住
5号掘立
11号住
1号住
6号掘立
1号溝
1号掘立
4号掘立
土壙7
10号住
土壙5
2号掘立
8号掘立
9号住
3号掘立
15号住
四脚門
(7号掘立)
東側虎口
P1
炉址
土壙1
土壙2
土壙4
土塁
0
10 m

付図1　古館遺跡全測図


SJ
E
I
SI
SH
SL
K
J
SE
G
SD
SF
H
SG
F
C
L
M
SB
SC
D
SK
N
SA
A
B
0
L=34.40m
5
m
SM
SN
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N

付図2　掘　実　測　図